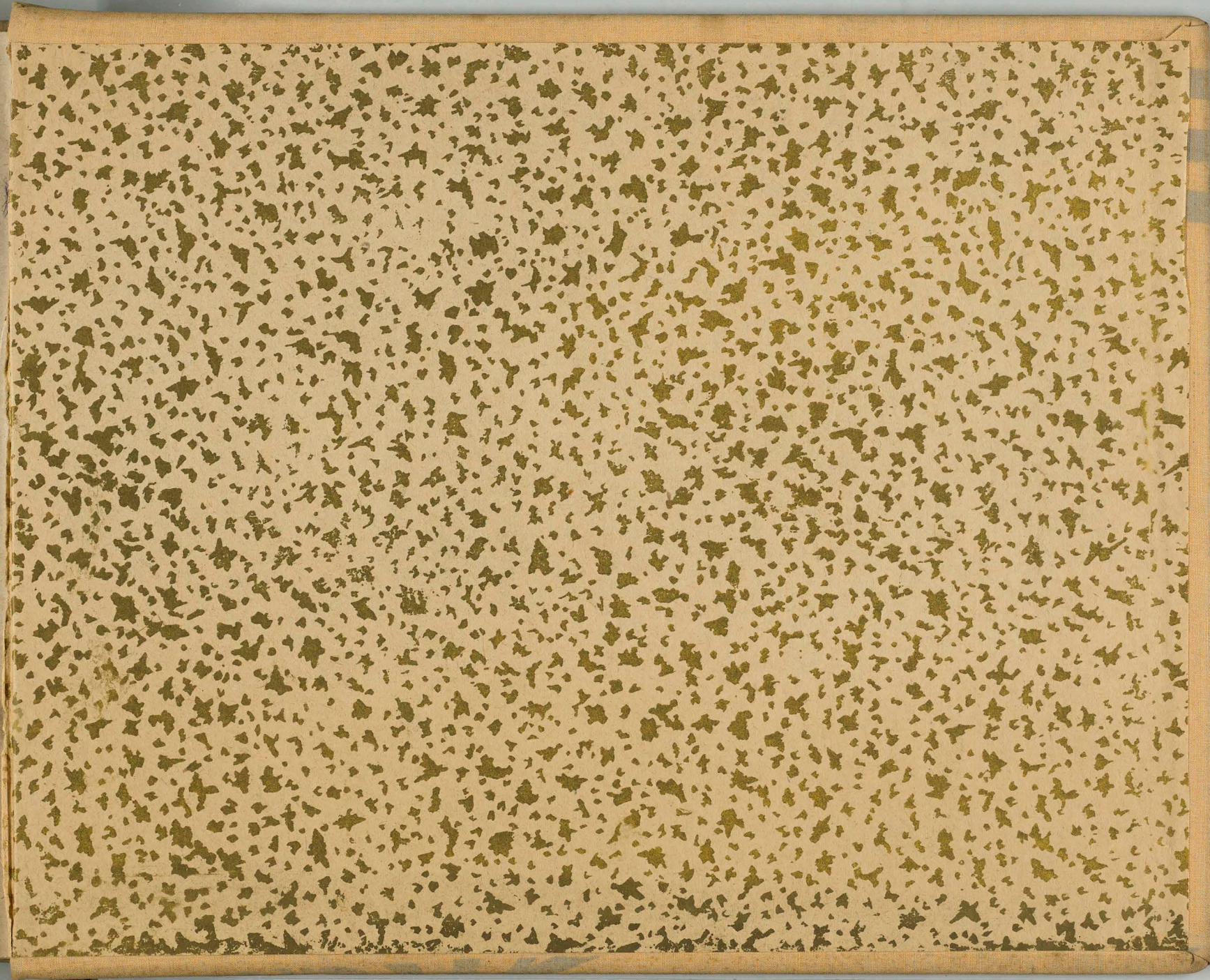
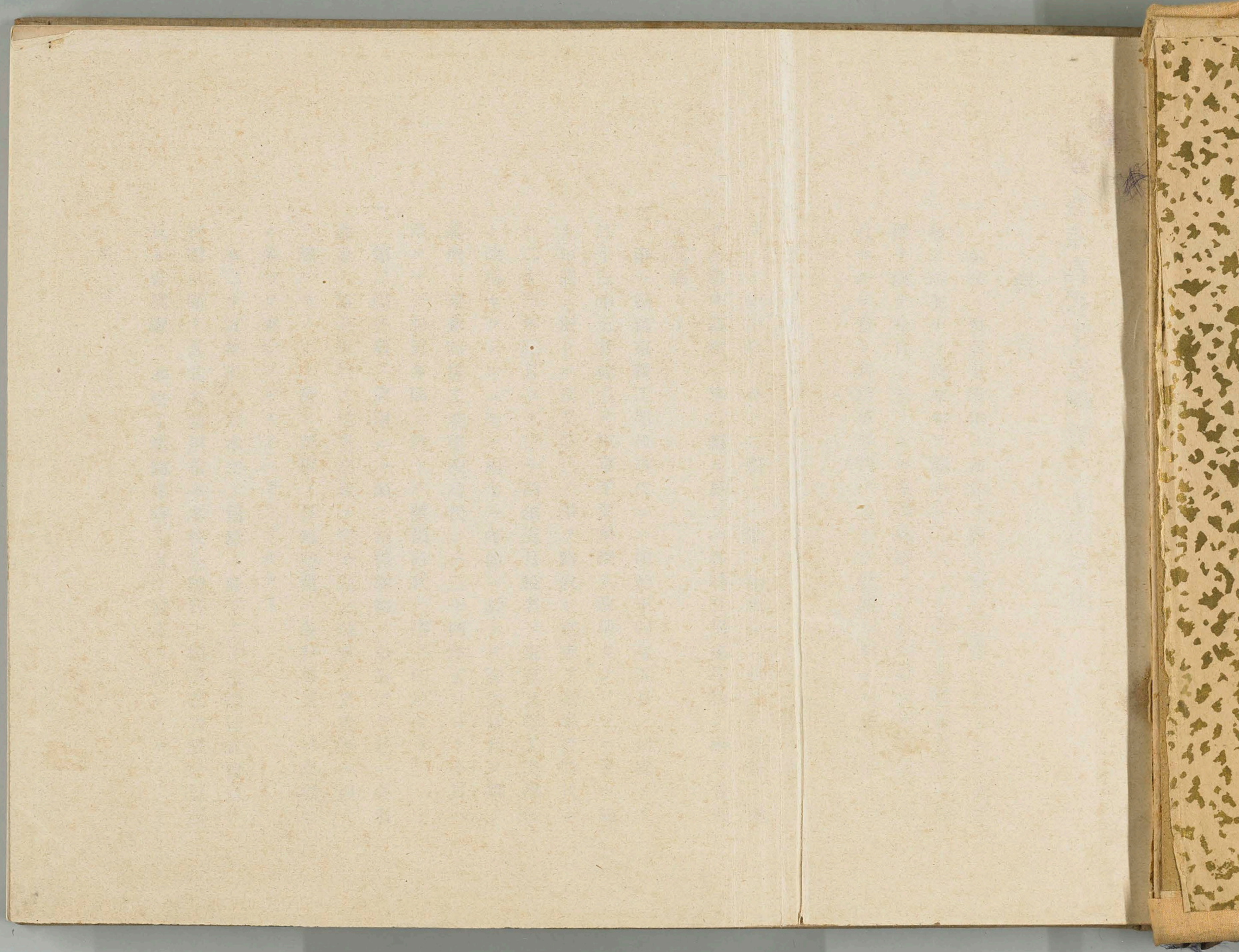


Vertical text on a silver-colored label, likely a library or archival stamp. The text is in Chinese characters and includes a date: 1911.







東京高等工業學校二十五年史

緒言

一、本校ハ明治十四年ノ創立ニ係リ實ニ我邦ニ於ケル工業學校ノ嚆矢ナリ爾來年ヲ閱スルコト二十有五年其間幾多ノ變遷ヲ經テ今日ニ至リシガ今創立滿二十五年紀念祝賀會ヲ舉行スルニ當リ其沿革事蹟ノ大要ヲ記述シ以テ紀念ニ資セントス

一、之ヲ記述スルニ當リ記事ノ錯綜ヲ避ケ且ツ閱覽ニ便セン爲メニ總記事ヲ分テ二編トシ第一編總說ニ於テハ全體ニ關スル事ヲ略叙シ第二編ニ於テハ各科及附屬學校ノ事ヲ各別ニ記述セリ

一、第一編東京職工學校時代ニハ明治十四年五月ノ創立ヨリ二十三年三月校名ヲ東京工業學校ト改稱セラレシニ至ル約九年間ニ於ケル創業時代ノ事ヲ略叙シ東京工業學校時代ニハ二十三年三月ヨリ三十四年五月校名ヲ東京高等工業學校ト改稱セラレシニ至ル約十一年間ニ於ケル發展時代ノ事ヲ畧叙シ東京高等工業學校時代ニハ三十四年五月ヨリ今日ニ至ルマデ約五年間ニ於ケル整頓時代ノ事ヲ略叙セリ

一、第二編各科ノ叙事ニハ頗ル精粗詳略ノ差異アリ是ハ各科設置ノ新舊學科ノ性質記錄ノ完否及ビ教官ノ更迭等ニ因リテ然ルモノナリ故ニ記事ノ長短精粗ハ各科事業ノ盛衰、効果ノ多少ヲ表示スルモノニアラザルナリ

一、本二十五年史ハ其本文ノ用紙ハ府下王子製紙株式會社ノ寄贈ニ係リ又其表裝用布ハ本校染織科ノ製造其表紙ノ圖案及ヒ寫眞版ハ本校工業圖案科ノ意匠製造ニ成レルモノナリ

東京高等工業學校二十五年史

目次

第一編 總說

第一章 設立ノ起原及ビ主旨	一
第二章 東京職工學校時代	四
第一 當代ニ於ケル工業界ノ概況	四
第二 沿革	五
第三章 東京工業學校時代	八
第一 當代ニ於ケル工業界ノ概況	八
第二 沿革	一〇
第四章 東京高等工業學校時代	一四
第一 當代ニ於ケル工業界ノ概況	一四
第二 沿革	一六
第五章 獎學金、獎學賞牌	二〇

第二編 各科及ビ附屬學校

第六章 染織科	二二
第七章 窯業科	三〇
第八章 應用化學科	三四
第九章 機械科	三八
第十章 電氣科	四三
第十一章 工業圖案科	四六
第十二章 附設工業教員養成所	四八
第十三章 附屬職工徒弟學校	五〇
第十四章 附設工業教員養成所附屬工業補習學校	五三

附 錄

第十五章 本校及ビ附設工業教員養成所ニ關

スル諸表……………五七

第一 教官、入學出願者許可者、在學生、卒業

者累年人員表……………五七

第二 卒業者、在學生出身及卒業者就職地

方別表……………五八

第三 卒業者職業類別表……………六〇

第四 教官現員表……………六〇

第五 在學生現員表……………六一

第十六章 本校附帶ノ團體……………六一

第一 校友會……………六一

第二 藏前工業會……………六二



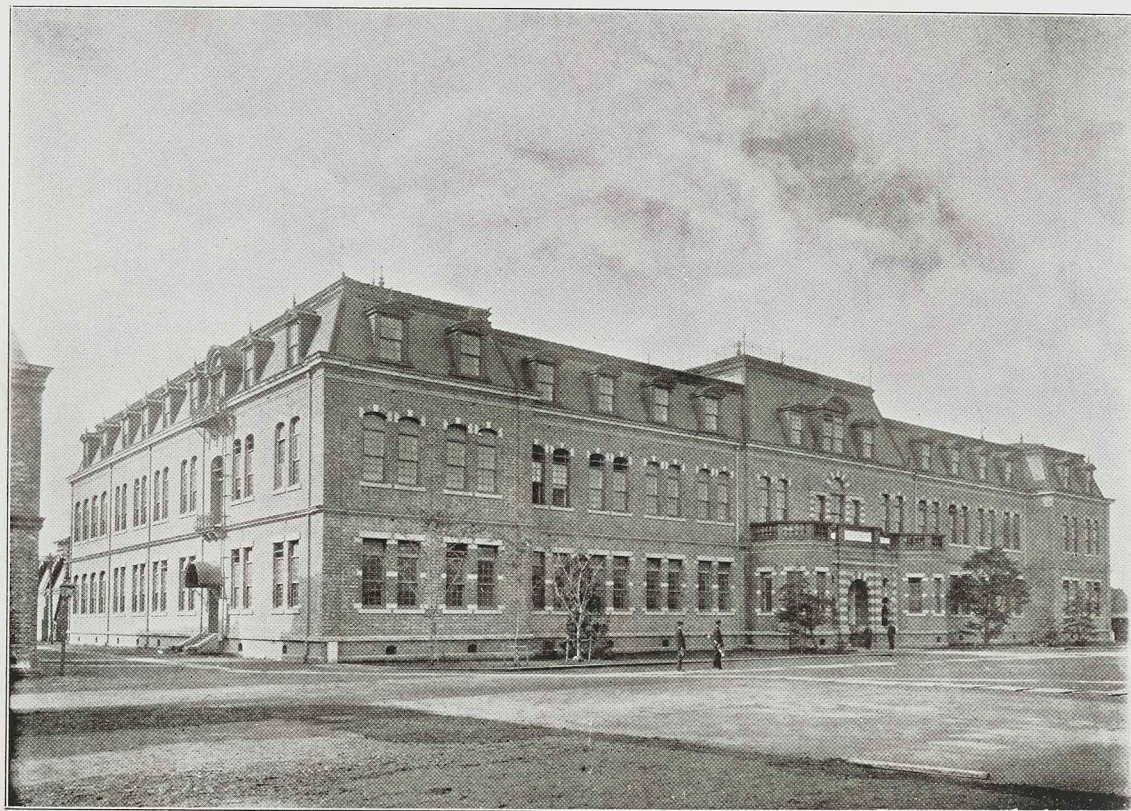
前校長故正木退藏



一 精 島 手 長 校 現



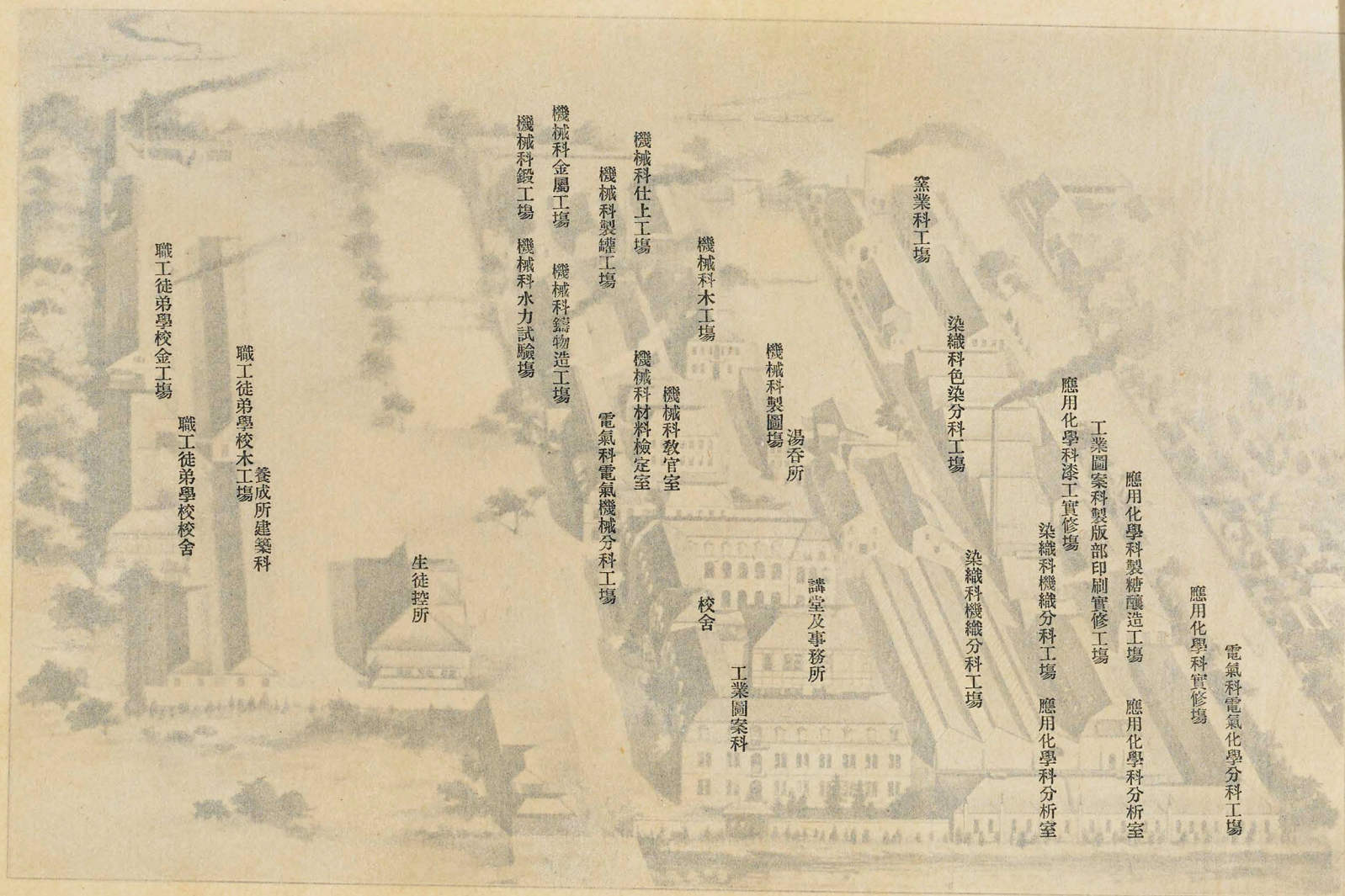
前校長現教授工學博士田貞一



明治三十五年新年築校舎



圖 書 閱 覽 室



電氣科電氣化學分科工場

應用化學科實修場

應用化學科製糖釀造工場

應用化學科分析室

工業圖案科製版部印刷實修工場

應用化學科漆工實修場

染織科機織分科工場 應用化學科分析室

染織科色染分科工場

染織科機織分科工場

窯業科工場

講堂及事務所

湯吞所
機械科製圖場

校舍

工業圖案科

機械科木工場

機械科教官室

機械科仕上工場

機械科材料檢定室

電氣科電氣機械分科工場

機械科製罐工場

機械科金屬工場 機械科鑄物造工場

機械科鍛工場 機械科水力試驗場

生徒控所

養成所建築科
職工徒弟學校木工場

職工徒弟學校金工場

職工徒弟學校校舍

明治三十九年九月於ルケ校舎及工場

卿工給榮學對金工書

卿工給榮學對對舍

卿工給榮學對木工書

養如視事榮林

主給對視

卿工給榮學對木工書

卿工給榮學對木工書

卿工給榮學對木工書

卿工給榮學對木工書

卿工給榮學對木工書

卿工給榮學對木工書

養如視事榮林

主給對視

卿工給榮學對木工書

卿工給榮學對木工書

卿工給榮學對木工書

卿工給榮學對木工書

卿工給榮學對木工書

卿工給榮學對木工書

卿工給榮學對木工書

卿工給榮學對木工書

卿工給榮學對木工書

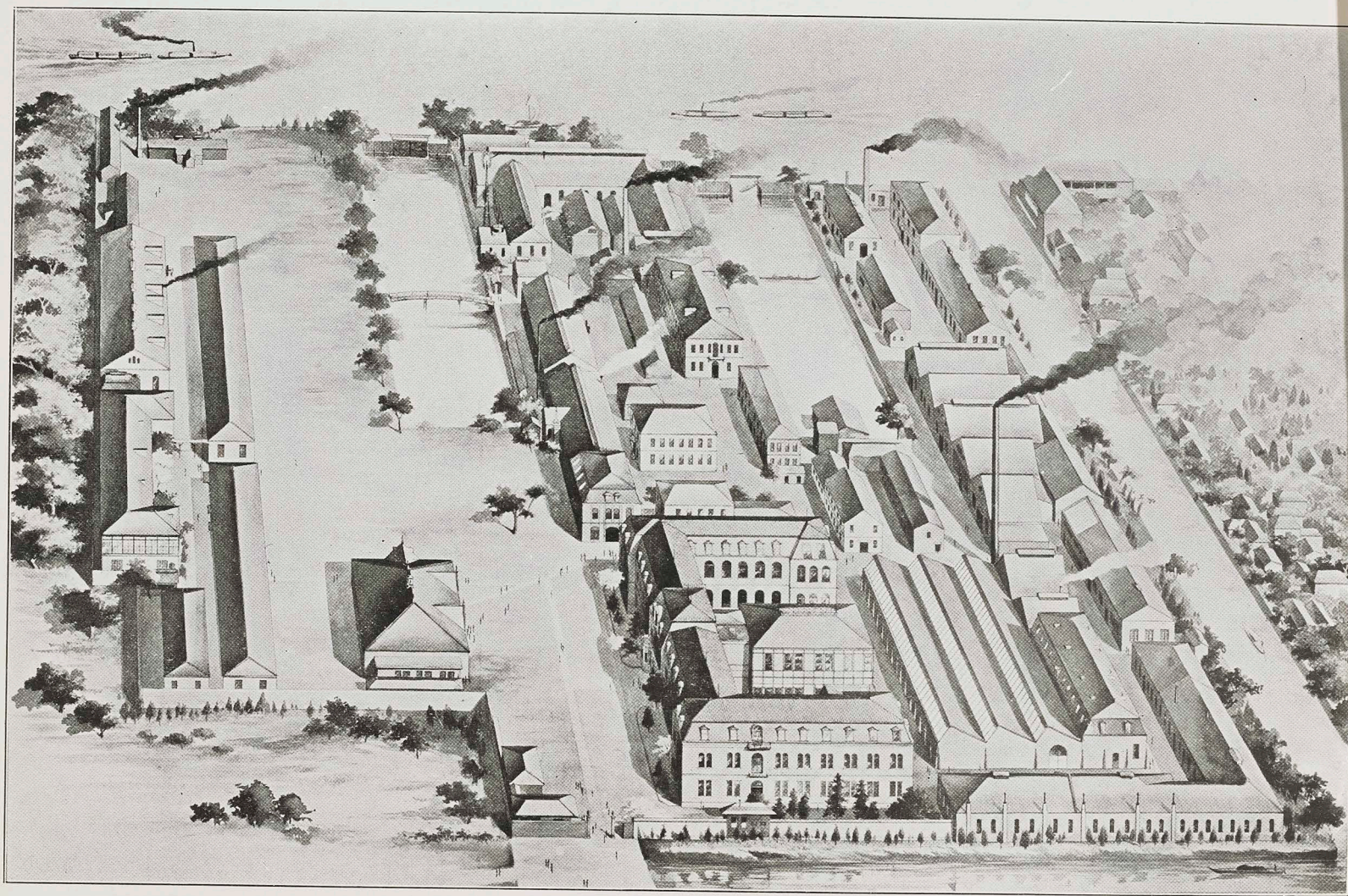
卿工給榮學對木工書

卿工給榮學對木工書

卿工給榮學對木工書

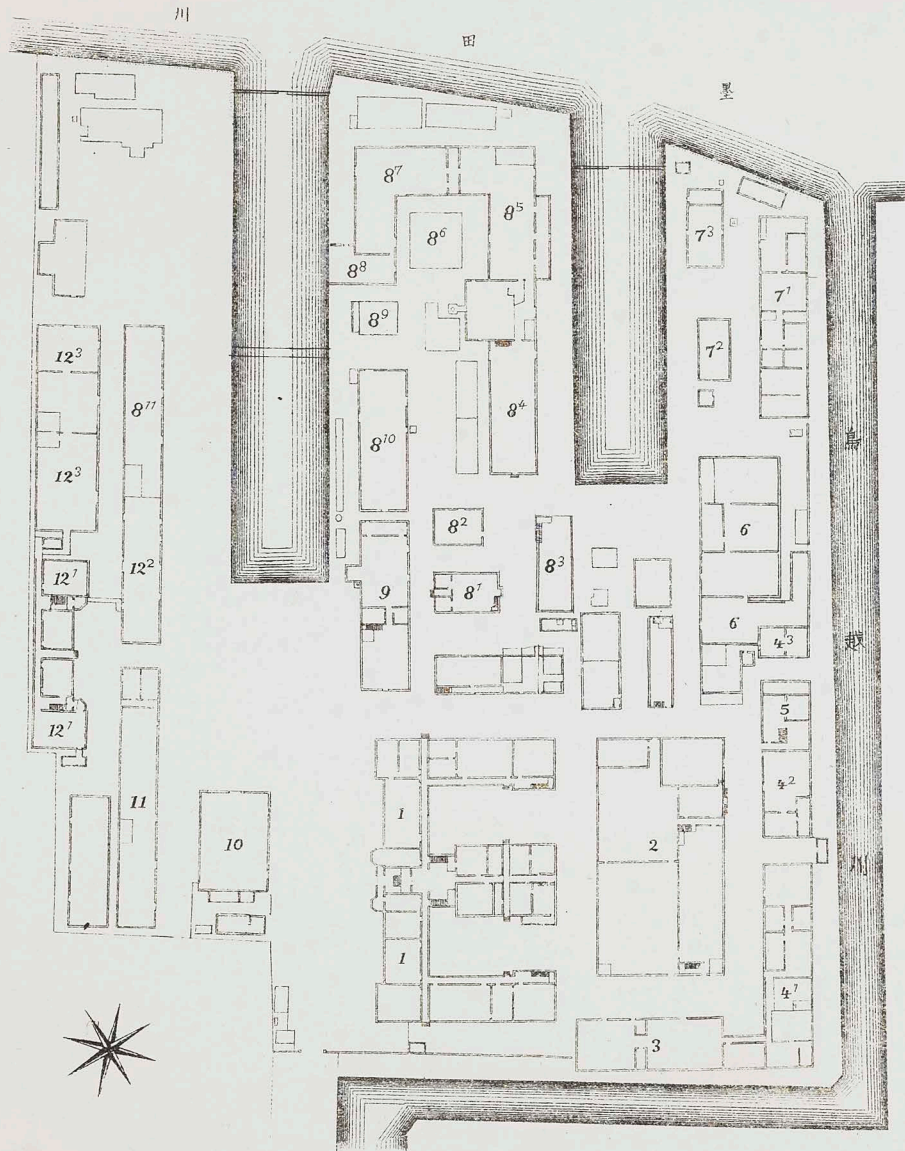
卿工給榮學對木工書





明治三十三年於ルケ校舎及工場

明治三十九年ニ於ケル校舎及工場(二千分ノ二)



8 ³ 同製藥室	8 ² 同材料試驗室	8 ¹ 機械科教室	7 ³ 同窯場	7 ² 同水廠	7 ¹ 窯業科工場	6 色染分科	5 工業園藝科	4 ³ 同木工場	4 ² 同木工乾燥室	4 ¹ 應用化学分科	3 分科室	2 機械分科	1 校舎
12 ³ 同金工場	12 ² 同木工場	12 ¹ 同木工乾燥室	11 建築科	10 生徒控所	9 電気機械分科	8 ⁷ 同金工場	8 ⁶ 同鑄造工場	8 ⁵ 同木工乾燥室	8 ⁴ 同木工乾燥室	8 ³ 同木工乾燥室	8 ² 同製藥室	8 ¹ 同木工場	8 ⁰ 同木工場

東京高等工業學校二十五年史

第一編 總 說

第一章 設立ノ起原及主旨

東京高等工業學校設立ノ起原ヲ詳ニセントセバ先ヅ明治ノ初年ヨリ本校設立ノ當時ニ至ル工業教育ノ一斑ヲ略述セザルベカラズ、抑、我邦ニ於ケル工業教育ノ起原ハ明治ノ初年東京開成學校内ニ製作教場ヲ置カレタルニ濫觴セリ、此ヨリ先キ我邦ノ工業上ニ最モ功勞アル同校教師兼顧問タリシ獨國人ワグネルハ低度ナル工業教育ノ必要ナルコトヲ當時ノ文部卿ニ建議セリ其要ニ曰ク凡ソ一國ノ富ヲ増進スルニハ主トシテ工業ノ發達ヲ圖ルニアリ工業ノ發達ヲ圖ルニハ低度ナル工業教育ヲ盛ンニシテ工業上最モ必要ナル職工長其他技術者ヲ養成スルニアリト乃チ製作教場ノ設立ハ是等ノ意見ニ基因セルモノナリト謂フベシ而シテ同教場ニハ化學、機械等ノ諸科目ヲ置キ修業年限ヲ二箇年トシ卒業生ヲ出スコト二回ニ及ベリ

然ルニ其後東京開成學校ヲ東京大學ト改稱スルニ及ンデ其理學部ニハ化學、機械、土木、探鑛冶金等諸科目ノ設置アリテ之ヲ從來ノ製作教場ニ比スレバ單ニ高尙ニ教授スルニ止マルヲ以テ同教場ヲ存續スルノ必要ナシト爲シ終ニ之ヲ廢止スルコト、ナリタリ然レドモ數年ノ後ニハ再び低度工業教育ノ必要ヲ認メ遂ニ本校ノ設立ヲ見ルニ至リシナリ

本校設立ノ主旨ハ專門技術ノ素養アル善良ナル職工長及ビ工業教員タルベキモノヲ養成セントスルニアリ其當時ノ文部卿ヨリ太政大臣ニ提出セラレタル「職工學校ヲ東京ニ設置スベキ件ニ付伺」ト題スル建議書ニ詳カナリ但是ハ當時ノ工業ハ猶ホ幼稚ノ域ニアリタルヲ以テ其議ノ通過ヲ容易ナラシメンガ爲メニ幾分カ其文辭ヲ斟酌セル所アリ今同建議書ヲ左ニ載録ス

職工學校ヲ東京ニ設置スベキ件ニ付伺

謹デ惟ルニ本邦細民ノ子弟ニ於テハ從來人間普通ノ教育ヲ受クルコトナク稍、成童ニ及ベバ則チ早ク已ニ人ノ雇役トナリ終身人道ノ何物タルヲ知ラ

ザルモノ居多ナリシガ今ヤ教育令ノ制アリテ苟モ本邦ノ人民タルモノハ必ズ就學セザルベカラザルニ由リ全國人民ノ品位ハ漸次上等ノ域ニ進ムベキハ言ヲ俟タズト雖モ彼ノ細民ノ子弟ニ至テハ一タビ小學校ヲ出ルノ後ニ於テ有用ノ職業ニ服スルモノ尠ク矢張從來ノ如ク人ノ雇役トナルガ故ニ復其智德ヲ養成スルノ暇ナキノミナラズ其曾テ小學校ニ於テ折角養成セシ所ノ智德モ年ヲ經ルニ隨テ漸ク消耗シ遂ニ公ニシテハ國家ノ殖益ヲ裨補スル能ハズ私ニシテハ自家營生ノ計ヲ畫立ズル能ハザルニ至ルノ情勢ヲ免レズ蓋シ彼細民トテモ其子弟ヲシテ有用ノ職業ニ服セシメ其智德ヲ養成セシムルヲ欲セザルニハアラズ又其人ノ雇役トナリ終身人道ノ何物タルヲ知ラザルヲ憾ミザルニハアラズト雖モ奈何セン之ヲシテ專門高等ノ學ヲ修メシメントスルモ其力之ニ堪ヘズ之ヲシテ有用ノ職業ヲ學バシメントスルモ其道ヲ得ズ遂ニ心ナラズモ之ヲ雇役ニ終ヘシムルナリ誠ニ慨歎ノ至ニ堪ヘズ今ヤ之ヲ拯フニ緊要ナル方法ヲ按ズルニ新タニ職工學校ヲ設クルニアリ果シテ此校ヲ設立スルコトヲ得バ則チ彼子弟ヲシテコ、ニ就學セシメ常ニ其道德ヲ薰陶シ其智識ヲ磨礱スルニ足ルベキ教員吏員ニ學科技藝ニ接見服習セシメバ必ズ修學ノ際ニ於テ知ラズ識ラズ其品行ヲ醇美ニシ其智識ヲ明敏ニシテ以テ能ク有用ノ職業ニ服スルニ堪フベクシテ其公私ノ裨益ヲ爲スコト鴻大ナルヤ疑ヲ容レズ然ラバ則チ今日ニ於テ職工學校ヲ設クルハ實ニ教育上ノ急務ト云フベシ而シテ又工業上ノ一方ヨリ考フルニ從來本邦ニ於テ職工タラント欲スルモノハ必ズ他ノ老工ノ徒弟トナル慣習ナレドモ其老工ニ於テハ概ネ之ヲ百般ノ雜事ニ使役シ殆ンド奴僕ニ異ナルコトナク且素ヨリ一定ノ規則ヲ以テ其技術ノ要理ヲ教授スルニ非ザルガ故ニ其徒弟ハ大約五年乃至十年ノ光陰ヲ費シ幾多ノ苦辛ヲ嘗メ然ル後僅カニ能ク其手術ヲ窺得ルモ到底其要理ヲ推究スルコト能ハズ故ヲ以テ本邦ノ工藝萎靡振ハズ之ヲ彼泰西ノ工藝ノ年々ニ巧緻ナルニ比スレバ殆ンド天淵相反スルノ狀況ヲ免レズ今ニシテ措テ問ハズンバ恐ラクハ從來美名ヲ海外ニ舉ゲシ我が二三ノ工業モ竟ニ泰西人ノ後ニ落チ其聲價ヲ減ズルハ智者ヲ待タズシテ辨知スベシ

且又維新以來ニ於テ泰西ノ工業ヲ官ニ私ニ採用シ以テ我殖產ノ端緒ヲ開キ

ズ今ニシテ措テ問ハズンバ恐ラクハ從來美名ヲ海外ニ擧ゲシ我ガ二三ノ工業モ竟ニ泰西人ノ後ニ落チ其聲價ヲ減ズルハ智者ヲ待タズシテ辨知スベシ

且又維新以來ニ於テ泰西ノ工業ヲ官ニ私ニ採用シ以テ我殖産ノ端緒ヲ開キシモノ尠カラザリシト雖モ動モスレバ目的ヲ誤リ事業ヲ敗リ其私營者ノ如キハ産ヲ破リ家ヲ亡ボスモノ縷舉スルニ暇アラズ然ル所以ノモノハ職トシテ其學術ニ根據ナク徒ニ模擬ヲ主トセシニ由ラザルハナシサレバ今日本邦ノ工藝ヲ振作シ殖産ノ道ヲ啓カントスルニハ必ず先其學術ヲ修メ然後其實施ヲ圖ラザルヲ得ズ今其學術ヲ修メシムルノ方策ヲ求ムルモ亦必ず職工學校ヲ設クルニアリ果シテ此校ヲ設立スルコトヲ得バ一ハ以テ彼將ニ萎靡衰退セントスルノ工業ヲ挽回スベク一ハ以テ世ノ起業者ニ憑式スル所アラシムベク而シテ本邦殖産ノ道ヲシテ旺盛ナラシムルコト期シテ俟ベキナリ然ラバ則チ職工學校ノ設立ハ工業上ニ於テモ亦實ニ今日ノ急務ト云フベシ前所陳ノ如ク教育上ヨリ論ズルモ工業上ヨリ論ズルモ今日ニ於テ職工學校ノ設ケナカルベカラザルコト明瞭ナリ而シテ此學校ヲシテ果シテ其功ヲ奏セシメ公私ヲシテ普ク其利ヲ享ケシメントスルニハ全國中僅ニ二三校ニシテ足レリトスベカラズ必ず毎府縣其土地ノ情狀ニ隨ヒ一校若クハ數校ヲ設立セザルベカラズ然レドモ本邦未ダ曾テ此種ノ學校ノ以テ他ノ標準トスベキモノアラザルニ由リ府縣ニ於テハ頗ル其制規ニ困ムモノ多カルベク縱令否ラザルモ其教員ニ適當スルモノナカルベキヲ以テ即今直ニ之ヲ起立スル能ハザルノ事情アルベキニ由リ先其標準ヲ舉示シ右教員ヲ養成スルノ主旨ヲ以テ今般本省ニ於テ職工學校ヲ東京ニ設立スルノ儀ヲ許可アランコトヲ希圖シ此旨至急高裁ヲ仰候也

明治十四年四月八日

文部卿 福岡孝弟

太政大臣 三條實美殿

右伺ニ對シ同年五月十二日裁可アリシヲ以テ左ノ如ク公布セラレタリ
第二號

今般職工學校ヲ東京府下ニ設立シ東京職工學校ト相稱候條此旨布達候事

明治十四年五月二十六日

文部卿 福岡孝弟

第二章 東京職工學校時代

第一 當代ニ於ケル工業界ノ概況

本時代即チ明治十四年ヨリ同二十三年ニ至ル約九年間ニ於ケル我邦工業界ノ概況ヲ叙述センニ由來固有工業中ニハ往々見ルベキモノナキニアラザリシト雖モ一般ニ其規模狹少ニシテ未ダ頗ル幼稚ノ境界ヲ脱セズ故ニ本時代前ヨリ官民共ニ力ヲ竭シテ新工業ノ移植振興ヲ圖リタルモ猶ホ土木、建築業ノ如キ經營施設ノ較々見ルベキモノニ至テハ大抵皆外國人ノ手ヲ藉ラザルモノナキガ如シ例ヘバ京濱間鐵道ノ英國技術者ノ手ニ成レルガ如キ又ハ東京銀座市街家屋建築設計ノオートルスニ於ケル印刷局建築ノオートルス及ビボアンビルニ於ケル帝國博物館及ビ鹿鳴館建築設計ノコンダーニ於ケルガ如キ是ナリ其他新工業ト目スベキモノハ時ノ工部省所屬ノ工作局工場、大藏省所屬ノ印刷局工場又ハ官有機械ヲ私人ニ貸付シタル綿糸紡績場及ビ官營ノ製糸業、造船業等ニ過ギザリシナリ又技術者養成ノ機關トシテハ東京大學ニ化學、機械、土木、採鑛冶金等ノ諸學科アルノ外工部大學校ノ設置アリシノミ故ニ中等技術者ヲ養成スルノ設備ハ東京開成學校ニ於ケル製作工場ノ明治十年廢止セラレシ以來復ターノ機關ヲ有セザリシナリ

又產業行政ノ如キモ從來或ハ民部省ニ屬シ或ハ大藏、內務ノ兩省ニ分隸セラレ未ダ獨立ノ主務省ヲ有セザリシガ本校創立ニ先ツ一ヶ月初メテ農商務省ノ設置アリ專ラ本邦產業ノ庶政ヲ主管スルニ至レリ而カモ政府ハ從來ノ官營政策ヲ拋棄シ絹糸、造船、鐵工業等ニ關シテ嘗テ模範トシテ官設セルモノヲ漸次民間ニ拂下ゲタリ當時新式工場ニハ此種ノ拂下ニ係ルモノ、外新タニ民設セラレタルモノ甚ダ寥々タリキ方今最モ隆盛ヲ極メツ、アル綿糸紡績工場ノ如キスラ猶且本時代ノ初期ニ於テハ僅ニ三四ヶ所ノ設置アリシノミ

抑、本時代ノ初期ニ於テハ我邦各般ノ實業ハ概ネ未ダ發達ノ域ニ達セズ從テ工業ノ如キ亦獨リ此境界ヲ脱スルコト能ハザリシハ寧ロ當然ノ事相ト言フベキニ似タリ蓋シ當時ハ明治維新ニ次グニ佐賀ノ變、西南ノ亂ヲ以テシ兵馬倥偬封建ノ思想尙ホ人心ヲ支配シ往々軍事ニ偏重スルニ非ザレバ政治ニ傾注シ

從テ實業ヲ輕視シ工業ノ如キ亦介意スルモノ尠カリシハ過渡時代ノ世態トシ

キニ似タリ蓋シ當時ハ明治維新ニ次グニ佐賀ノ變、西南ノ亂ヲ以テシ兵馬倥偬封建ノ思想尙ホ人心ヲ支配シ往々軍事ニ偏重スルニ非ザレバ政治ニ傾注シ

從テ實業ヲ輕視シ工業ノ如キ亦介意スルモノ尠カリシハ過渡時代ノ世態トシテハ實ニ止ムヲ得ザリシ所ナランサレバ本校開設ノ當時入學志願者ノ僅少ナリシモ亦之ガ爲ナリトス

然ルニ爾後我工業ハ漸次他ノ各般ノ實業ト共ニ進步發達ノ氣運ニ向ヒ内外交通ノ便開ケ新智識ヲ海外ニ求ムルノ容易ナルト同時ニ舶賈ノ輸入品モ亦増加シ往々は等輸入品ノ製造ヲ企畫シテ歐米新式ノ工業ヲ興ス者次第ニ都會ノ地ニ多ク工業ノ組織ニ著シキ進化ヲ見ルニ至レリ是ヨリ新式諸工場ノ設立セラル、モノ年次遞加ノ形勢ヲ現ハシ本時代ノ末期即チ二十三年頃ニ至テハ諸工場ノ數モ著シク増加シ嘗テ十七年末ニ於テ民間ノ工業會社僅々三百七十九此資本金額五百四萬餘圓ナリシモノ二十二年末ニ至テハ其會社數二千二百五十九此資本金額七千十九萬餘圓ノ多キニ達セリ以テ其發達ノ概勢ヲ推知スルニ足ルベシ

斯ノ如ク我工業界ノ漸次進步發達ノ狀勢ヲ示スニ從ヒ本校入學志願者ノ如キモ亦稍々其數ヲ増加セリ、然レドモ世間ノ工場ニシテ本校卒業生ヲ聘用スルモノニ至テハ猶ホ未ダ増加ノ運ニ向ハザリキ蓋シ當時ハ工場組織ニ依リテ多數職工ヲ指導スベキ技術者ヲ要スルガ如キ工業ノ少數ナリシト又世間ニハ未ダ本校ガ技術者養成ノ事ニ任ズルヲ知ルモノ尠カリシトニ依リシナラン

第二章 沿革

東京高等工業學校ハ元ト東京職工學校ト稱シ明治十四年五月二十六日創設セラル當時文部省內ナル修文館(舊建物)ヲ以テ事務所ニ充テ事務ヲ執ル

十四年八月始メテ本校規則ヲ制定セラレ職工學校ノ師範若クハ職工長タル者ニ必須ナル諸般ノ工藝等ヲ教授スルヲ以テ目的トナシ學科ヲ分テ豫科及ビ本科トシ豫科ハ一箇年本科ハ二箇年半通ジテ三箇年半ヲ以テ卒業スルモノトシ其學科課程等ヲ定メラル然レドモ此規則ハ未ダ實施スルニ至ラズシテ翌十五年五月更改セラレ本科ノ卒業期ヲ延長シテ三箇年トシ其他釐革スル所アリタリ

十四年九月文部一等屬正木退藏校長ニ任ゼラル

十五年六月十日文部省ヨリ本校用地トシテ淺草區藏前東片町二十九番地ノ地所五千八百餘坪並ニ淺草文庫ノ建家二百三十餘坪ヲ交付セラレタルヲ以テ本校ハ此ニ移轉シ同文庫ノ書庫ヲ以テ事務所ニ充テ校舍新築ノ工事ヲ起セリ木造ノ舊校舍タリシモノ是レナリ從前文部省所轄ノ諸學校ハ神田區一ツ橋外ニ輻輳セシモ獨リ本校ノ用地ヲ淺草區隅田河畔ニ選定セラレシハ蓋シ工業用材料等運搬ノ便ヲ圖リシニ依ルナラン

同年八月始メテ豫科生徒六十名(內廿名化學工藝科四十名機械工藝科)ヲ募集シ應募志望者百三十三名アリ依テ試驗合格者六十名ヲ入學セシメ十一月一日ヨリ新築中ノ校舍ノ一部ヲ教室ニ充テ授業ヲ開始ス十二月校舍ノ新築工事竣成ヲ告グ

十七年一月中學校トノ聯絡ヲ圖ランガ爲メニ初等中學科卒業ノ者ハ本校豫科ニ無試驗入學ヲ許可スルノ制ヲ定ム同十二月褒賞給費規則ヲ定ム要ハ生徒中前學年ノ成績優等ニシテ且ツ平素品行最モ端正ナル者ニ次ノ一學年間其學級及ビ成績ノ等差ニ依リ月額二圓乃至五圓ノ學資ヲ補給シ俊秀少年ノ入學ヲ獎勵スルニ在リ

十八年四月本科ノ學科目中ニ英語ヲ新設シ卒業後日新ノ學理ヲ攻究スルノ便ニ資セシム七月始メテ授業料ヲ徵收スルコト、シ一學期金五圓トシ九月ヨリ實施ス此ヨリ先キ本校教育ハ猶ホ獎勵ノ時期ニ屬セシヲ以テ授業料ヲ徵收セザリシガ入學生徒ノ増加ニ伴ヒ校費ノ一部ヲ補助センガ爲メニ之ヲ徵收スルコト、セリ

十九年四月十九日本校ヲ帝國大學ニ附屬セラレ又本校規程ヲ定メ委員四名ヲ置カル

同年八月規則ニ大改正ヲ加フ其要ハ本科ヲ各專門ノ學科ニ區別スルコト、豫科ヲ廢シテ修業年限ヲ短縮スルコト、各專門學科中ニ新ニ速成科ヲ置キ其修業年限ヲ二箇年トスルコト等ニシテ一般ニ學科ノ程度ヲ簡易ニシ實技ノ練習ニ重キヲ置クノ方針ヲ執レリ其本科ヲ各專門ノ學科ニ區別セシハ實修期ヲ延長スルノ必要ニ出ヅ從來化學工藝科ノ如キハ第一、第二學年ハ一般ニ應用化

學ヲ講習シ專門ノ實驗ニ從フハ僅ニ最終ノ一年間ニ過ギズ依リテ今後ハ最初

ニ重キヲ置クノ方針ヲ執レリ其本科ヲ各専門ノ學科ニ區別セシハ實修期ヲ延長スルノ必要ニ出ヅ從來化學工藝科ノ如キハ第一、第二學年ハ一般ニ應用化

學ヲ講習シ専門ノ實驗ニ從フハ僅ニ最終ノ一年間ニ過ギズ依リテ今後ハ最初ヨリ各専門ノ學科ニ分チ須要ノ學科ノミヲ課シテ實修ノ時間ヲ延長スルコトトナセリ又豫科ヲ廢セシハ修業年限ヲ短縮シテ就學ヲ簡便ナラシメントスルニアリ速成科ヲ新設セシハ篤志者ニシテ年齒長シ又ハ一定ノ課目ヲ履修スルノ時ヲ得ザル者等ノ希望ヲ滿タサシメントスルノ趣旨ニ出ヅ

二十年三月上野公園ニ於テ東京府ノ開設セル工藝品共進會ニ生徒實修成績品ヲ出陳ス又九月西班牙國バルスローヌ府ニ開設セル萬國博覽會ニ生徒實修成績品ヲ出陳セシニ同會ハ之ニ對シ金賞牌ヲ贈リ來レリ

同年十月四日勅令第五十一號官制ノ發布ニ依リ本校ノ帝國大學附屬ヲ解キ更ニ文部省ノ直轄ニ屬セラル

二十一年當時世間ノ工業ハ比較的發達シタルニ拘ラズ本校卒業者ノ需要多カラザルト政府財政ノ狀況トニ因リ文部省ハ本校ノ存廢ニ就キ委員ヲ設ケテ之ガ調査ニ從ハシメシガ委員調査ノ結果ハ本校從來ノ目的ヲ變更シ尋常師範學校手工科尋常中學校工業科及ビ地方職工學授ノ教員タルベキ者ヲ養成スルコト、シ附屬ノ工場ハ之ヲ民間ニ拂下グベシト云フニ在リ然ルニ當時専門學務局長タリシ濱尾新恰モ海外各種ノ教育事情ヲ視察シテ歸朝スルニ會シ之ヲ我國勢ニ鑑ミ本校従前ノ形態ニテ存續セシムルノ必要ヲ認メ遂ニ調査委員ノ復申遂行セラレザルニ至レリ然レドモ又以テ當時校運ノ悲境ニアリシヲ追想スルニ足ルベシ

二十一年八月褒賞給費規則ヲ廢止ス是レ當初ノ目的ヲ達シ得ザルニ由ル同月規則ヲ改正シ教旨ヲ改メテ「將來工藝教員又ハ工藝技師職工長工場長タルベキ者ニ須要ナル諸般ノ工藝等ヲ教授ス」トナス又選科ヲ設ケ工業者若クハ其子弟ノ實業ニ從事スルコト滿一箇年以上ニシテ其業務ニ必要ナル一課目若クハ數課目ヲ選修セント欲スル者ニ入學ヲ許スコト、シ修業年限ヲ二箇年以內トス其他今回ノ改正ニ依リ工藝部中ノ分科ヲ廢シ又尋常師範學校若クハ尋常中學校卒業生ニシテ地方廳ノ特選ニ係ルモノハ人員ヲ限リ試験ヲ須ヒズ入學ヲ許可スルノ制ヲ設ク是レ將來工藝教員タラントシ又ハ公益ノ事業ニ從事セ

ントスル者ニ便宜ヲ與ヘンガ爲メナリ其他入學試業料ヲ徵收スルノ制ヲ設ケ
タリ

二十二年五月佛國巴里府ニ開設ノ萬國博覽會ニ生徒ノ實修ニ係ル成績品ヲ出
陳セシニ同會ハ之ニ對シ金賞牌ヲ贈リ來レリ

二十二年六月學科課程試業及ビ卒業證書規程其他ノ條章ヲ改正シ且ツ入學試
驗課目ノ程度ヲ高ム

二十三年一月文部省ハ從來高等商業學校ノ附屬タリシ職工徒弟講習所職工科
ヲ本校ニ附屬セシム現今ノ職工徒弟學校是レナリ

同年三月校長正木退藏公使館書記官兼外務省參事官ニ轉任ス同月非職文部省
參事官兼會計局次長手島精一校長ニ任ゼラル

同年三月二十四日勅令第四十三號ヲ以テ本校々名ヲ東京工業學校ト改稱セラ
ル

第三章 東京工業學校時代

第一 當代ニ於ケル工業界ノ概況

本時代ニ於テハ明治二十三年ヨリ同三十四年ニ至ル約十一年間ニ於ケル我工
業界ノ概況ヲ叙述セントス抑、我工業界ハ前十餘年來内治外交ノ靜穩平和ナ
リシヲ以テ前章第一節ニ於テ概叙セルガ如ク漸次進步發達ノ形勢ヲ以テ本時
代ニ移リ益、其發展ヲ期セントセシニ之ニ伴フ弊習トシテ往々洋式ヲ趁フノ
念慮ニ驅ラレ經驗アル當事者ト適當ナル設備トニ缺如セル諸工業興起シ或ハ
漫ニ冗員ヲ使用シ或ハ材料、燃料等ノ濫費ヲ免レズシテ利益ハ豫算ニ達セズ
其他財界ノ不振モ亦與カリテ玆ニ我工業界ハ端ナク沈衰ノ狀態ヲ來セリ是ニ
於テ政府並ニ民間有志者ハ銳意之ガ匡救策ヲ講ジ或ハ各種ノ産業組合ヲ組織
シテ矯正ノ方便ニ供シ或ハ適當ナル技術者ノ供給ニ務メテ其缺欠ヲ補填シ其
他一時苦境ニ陷リタル經驗ニ鑑ミテ營業費ヲ節制シ或ハ製産額ヲ増加スル等
苦心經營ノ結果漸ク此頹勢ヲ挽回スルコトヲ得タリ

是ヨリ以後數年間我工業界ハ再ビ漸次發達ノ傾向ヲ示シ來リシガ日清戰役ヲ

終ルヤ財界ノ膨脹ニ伴ヒ所謂事業熱ナルモノ盛ニ昂騰シテ各地ニ鐵道ノ新設

苦心經營ノ結果漸ク此頹勢ヲ挽回スルコトヲ得タリ
是ヨリ以後數年間我工業界ハ再ビ漸次發達ノ傾向ヲ示シ來リシガ日清戰役ヲ

終ルヤ財界ノ膨脹ニ伴ヒ所謂事業熱ナルモノ盛ニ昂騰シテ各地ニ鐵道ノ新設
ヲ見之ニ次グニ機械ニ關スル工業勃興スルト共ニ化學ニ關スル工業モ漸ク頭
角ヲ顯ハスニ至レリ是ニ於テ技術者ノ需要頓ニ増加シ其養成モ亦忽諸ニ付ス
ベカラザルノ時機トハナリス明治二十八年ニ於ケル第八回帝國議會ハ茲ニ見
ル所アリテ其衆議院ハ議員ノ提出ニ係ル本校規模擴張ノ建議案ヲ可決シ又別
ニ大阪市ニ工業學校ヲ設立スベキノ建議案ヲモ提出可決セリ政府ハ之ヲ時勢
ノ必要ニ應ズベキ措置ト爲シ共ニ之ヲ採納シ其經費ヲ次期議會ニ要求シテ
協賛ヲ得タリ翌二十九年ニ於テ本校ハ臨時費約五萬圓ヲ得テ狹隘ナリシ工場
ヲ増築シ不備ナリシ機械ヲ増設シ稍々規模ヲ擴充シ生徒ヲ增收スルコトヲ得
タリ之ヲ第一次ノ擴張トス又同年大阪工業學校モ其新設ヲ見ルニ至レリ是ヨ
リ先キ二十七年時ノ文部大臣井上子爵ハ全國ニ低度工業教育ヲ施設スルノ急
務ナルヲ熱誠ニ主張シ實業教育費ヲ國庫ヨリ補助シ以テ之ヲ獎勵スルノ案ヲ
具ヘ議會ニ提出セシニ兩議院ハ滿場一致ヲ以テ之ヲ可決セリ當初ノ補助金額ハ年
漸次増加シ三十九年度ハ三十五萬圓トナレリ又該法立案ノ際ハ當時ノ必要ト補助金額ノ多カラザル
ヲ以テ殆んど全額ヲ舉ゲテ工業教育費ノミヲ補助スルノ内議ナリシモ議員ノ意見ヲ容レ農、商教育費
モ共ニ補助スルコトハナリタリ聞ク然レドモ該法文中尙ホ工、農、商ノ實業教
育ト稱シ工ヲ首位ニ置ケルヲ見ルモ當時立法者精神ノ在ル所ヲ察知スルニ足ラン尋テ同法案ノ實
業教育費國庫補助法ノ名ヲ以テ公布セラル、ヤ工業ニ關スル學校ノ設立各工
業地ニ興起シ本時代ノ末期ニ至テハ工業學校及徒弟學校ノ數四十一校ニ上レ
リ是レ實業教育獎勵ノ結果ニ依ルモ亦以テ我工業界ノ漸ク隆興シタルノ反映
ナリト謂フヲ得ベシ

日清戰後諸工業ノ勃興ヲ促シシハ上述ノ如シト雖モ中ニ就キ一時ノ奇利ヲ博
シ若クハ投機心ニ驅ラレ興起シタルモノ、如キハ其基礎ノ鞏固ナラザル等ノ
故ヲ以テ三十一二年ニ至リ悲運ニ際會シ終ニ解散スルノ止ムヲ得ザルニ至レ
ルモノ尠カラズ且ツ當時財界モ亦恐慌ノ聲ヲ傳フルニ至レリ
然ルニ三十三年頃ヨリ我工業界ハ優者ハ榮エ劣者ハ衰ヘ概ネ淘汰セラレタル
ト同時ニ財界モ漸ク順潮ニ復セシヲ以テ其基礎ノ確實ナル工業ハ相率ヒテ進
展シ此間學理ノ應用ハ次第ニ其效果ヲ舉ゲ爲メニ専門ノ知識技能アル技術者
ヲ要スルコト轉々急切ヲ告グルニ至リタレバ本校入學志願者ノ如キモ頓ニ其

數ヲ増シ卒業者ノ需要モ亦遽カニ多キヲ加フルニ至リ健全ナル發達ヲ期スベキノ豫望ヲ以テ本時代ノ工業界ヲ送レリ

第二 沿革

明治二十三年東京ニ開設セル第三回内國勸業博覽會ニ生徒實修成績品ヲ出陳セリ

同年五月委員規程ヲ改正シ委員ノ名稱ヲ改メテ商議委員トナシ且ツ從來四名ノ定員ナリシヲ此改正ニ依リ文部省部内二名農商務省部内二名並ニ商工業ニ從事スル者若干名ト定メラル、同年七月本校規則ヲ改正シ教旨ヲ「職工長又ハ工業教員タルベキ者ヲ養成スル所トス」ト改ム是レ從來ノ教旨中ニ工藝技師云々ノ文字アリシヲ以テ生徒中徒ニ志望ヲ高遠ニ馳セシメ目前ノ實技ヲ忽諸ニ附スルガ如キ弊アルヲ以テ之ガ矯正ヲ圖ルノ主旨ニ出デタリ又各地方工業者ノ子弟ヲ入學セシメント欲シ各地方廳ニ託シ入學試驗ヲ施行スルコト、セリ是レ生徒ヲ募集スルニ本校ノミニ於テスルトキハ入學者ハ概ネ確乎タル目的ヲ有セズ單ニ入學スルヲ以テ榮トシ其志工業ニ存セザルヲ以テ在學中實修ヲ嫌ヒ勤勞ヲ厭フノ弊アリ因テ此弊ヲ矯メンガ爲ニ務メテ工業者ノ子弟又ハ縦ヒ否ラザルモ其志ノ鞏固ナル者ヲ募集セントスルニ外ナラズ又府縣立尋常中學校生徒ニシテ卒業ノ際工業ニ必須ナル學科目ノ定點三分ノ二以上ノ成績ヲ得タル者ハ試驗ヲ須ヒズ入學ヲ許可スルコト、セリ是レ普通學校ト專門學校トヲ聯絡セシムルモノニシテ學政上必要ナレバナリ又授業料ヲ一學年金拾五圓ニ増額ス又染工科ニ機械ヲ新設シテ染織工科ト改稱シ製品科ヲ應用化學科ト改稱シ又機械工藝部中ニ電氣工業科ヲ新設セリ其他各條章中釐革スル所尠カラズ

又此時現業練習ノ制ヲ設ク現業練習ハ生徒卒業後尙ホ一箇年以上現業練習トシテ本校ノ監督ヲ受ケ製造所又ハ實業家ニ就キ職工ノ業務ヲ執テ實地ニ練習スルモノトス又機械工藝部特別生ノ制ヲ設ケ府縣立尋常師範學校卒業生ニシテ府縣知事ニ於テ將來尋常師範學校手工科教員タラシムル目的ヲ以テ推薦スル者ハ特別生トシテ入學ヲ許可スルコト、セリ

同年十月官制改正ノ結果教諭ハ教授、助教諭ハ助教授ト改稱セラル

テ府縣知事ニ於テ將來尋常師範學校手工科教員タラシムル目的ヲ以テ推薦スル者ハ特別生トシテ入學ヲ許可スルコト、セリ

同年十月官制改正ノ結果敎諭ハ敎授、助敎諭ハ助敎授ト改稱セラル

二十四年八月規則ヲ改正シテ私立尋常中學校及ビ高等中學校豫科卒業生無試験入學ノ制ヲ定ム

同年十二月商議委員會規程ヲ改正シ從來商工業ノ經歷アル者若干名トアリシヲ三名以上七名以下トセラル

二十六年北米合衆國市俄古府ニ開設セル閣龍世界博覽會ニ生徒實修成績品ヲ出陳セシニ同會ハ之ニ對シ賞牌ヲ贈リ來レリ

同年十月規則ヲ改正ス其要點ハ地方廳ニ依囑シテ生徒ヲ募集スルノ制ヲ廢スルコト及ビ尋常中學校卒業生無試験入學ノ範圍ヲ擴ムルトニアリ前者ハ地方學校トノ聯絡ヲ通ジ廣ク適當ノ生徒ヲ得ントシ後者ハ市町村立中學校中適當ト認メタル學校卒業生ニハ府縣立學校ト同一ノ資格ヲ與フルノ趣旨ニ出ヅ

二十七年六月規則ヲ改正ス要ハ陶器玻璃工科ヲ窯業科ト改稱スルコト及特別生、選科生ヲ廢止スルニアリ窯業科ノ改稱ハ其名實ヲ整フルニアリ特別生ノ廢止ハ其目的タル師範學校ノ必須科タル手工科ガ師範學校令ニ於テ隨意科ニ改メラレタルニ因リ需要ノ減少ヲ來スベキ傾向アルト選科生ノ廢止ハ其入學者ハ該科目的ノ實業者ニアラズシテ正科ノ入學ニ學力不足ナル者多キヲ占ムルニ至リ設置ノ主旨ニ副ハザルヲ以テナリ

二十八年一月第八帝國議會ニ於テ衆議院ハ時勢ノ趨向上ヨリ本校規模擴張ノ必要ヲ認メ左ノ如ク政府ニ建議セリ

東京工業學校擴張建議

我帝國ハ專ラ商工業ヲ振勵シ以テ國富ノ本源ヲ涵養セザル可ラサルハ通國ノ主論タリ是故ニ之ガ中心タル工業學校ノ如キハ最モ先ヅ其ノ振作ヲ圖ラザル可ラズ然ルニ退テ現時ノ工業學校ヲ觀レバ萎靡トシテ振ハズ其ノ養成スル所ノ人員頗ル少數ニシテ今日社會ノ進運ニ伴ヒ其ノ需用ニ應ズルニ足ラズ寔ニ遺憾トスル所ナリ依テ政府ハ速ニ之ガ振勵ノ道ヲ講ジ其ノ規模ヲ擴張センコトヲ要ス若シ夫レ其ノ擴張費ニ至リテハ國庫財源ノ許ス所ヲ計リ豫算ヲ編成シテ帝國議會ニ提出セラレンコトヲ望ム

右及建議候也

尋テ本校ニ於テモ本校規模擴張ノ理由ニ就キ左ノ意見書ヲ草シテ文部當局及
ビ兩院議員ニ提出シ以テ其參考ニ供シタリ

東京工業學校擴張ノ理由

凡ソ工業教育ノ要ハ工業ノ進度ニ伴ヒ之ニ適應スル技術ヲ授クルニアリ故
ニ其實驗事業ノ如キモ工業ノ發達ニ隨ヒ其設備充實ナラザルトキハ教育ノ
効全カラズ然ルニ本校各科ニ於ケル諸般ノ設備多クハ十餘年前ノ裝置ニ係
リ爾來經費缺乏ノ爲メ頗ル補充ノ便ヲ缺キ漸ク其規模ヲ維持スルニ過ギザ
ルヲ以テ之ヲ今日工業界ノ現況ニ徴スルトキハ時勢ニ後ル、ノ憾ナキ能ハ
ズ且輓近工業ノ發達ニ伴ヒ技術者ノ需要頓ニ増加スルモ卒業生ノ供給ハ其
需要ニ應ズルニ足ラザルノミナラズ其需要ハ今後益々増加セントスルノ趨
勢アリト雖モ各般ノ設備狹少ノ爲メ多數ノ生徒ヲ養成シ能ハザルハ寔ニ遺
憾トスル所ナリ是レ規模擴充ノ已ムベカラザル所以ナリ今之ガ擴充ヲ圖ル
ニ方リ目下學理ノ應用ヲ要スル工業ノ種類多キニ拘ラズ單ニ電氣工業科ノ
實施及ビ機械科實修課目増設ニ止メ他ハ主トシテ既設教科設備ノ補充及ビ
生徒募集人員ノ増加ヲ以テ急務トセシハ幾多ノ教科目ヲ新設シ徒ラニ多岐
ニ亘ランヨリハ寧ロ既設教科ノ設備ヲ充足シ現ニ發達ノ途ニアル工業ノ實
況ニ適應スベキモノヲ養成シ以テ其需求ニ應ズルニ若カザルヲ以テナリ且
ツ以上ノ設備ニシテ實行セラル、ニ至ランカ本校ハ固ト専門ノ教官ニ乏シ
カラザルヲ以テ其教務ノ餘暇ニ於テ目下實業家ノ苦心改善ヲ欲スル諸般ノ
工業ニ就キ實驗研究セシメ而シテ其實績アルモノハ廣ク之ヲ世間ニ發表ス
ルトキハ本校ガ當然ナスベキ教育以外ニ於テ世ノ工業ニ裨益ヲ與フル蓋シ
少カラザルベシ(下略)

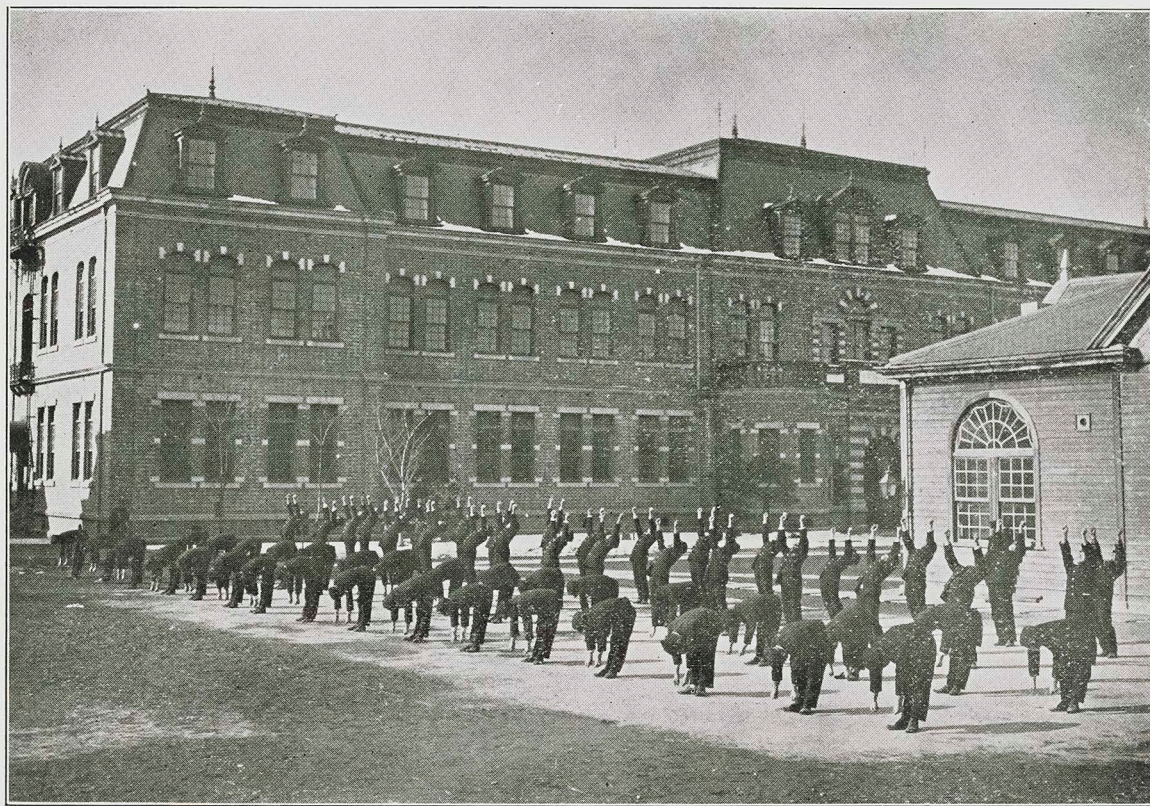
是ニ於テ政府ハ第九議會ニ本校規模擴張費ヲ要求シ其協賛ヲ得タルヲ以テ電
氣工業科ヲ實施シ其他各科ノ設備ヲ擴充シ生徒ヲ増募スルコトヲ得タリ

二十八年新ニ共通學科ノ名稱ヲ置カル共通學科ハ本校ノ授業開始以來各専門
學科以外ニ於テ一年生乃至三年生ニ共通スル學科ヲ總稱スルモノニシテ其主



室驗實學理物科學通共

氣工業科ヲ實施シテ
 二十八年新ニ共通學科ノ名稱ヲ置カル共通學科ハ本校ノ授業開始以來各専門
 學科以外ニ於テ一年生乃至三年生ニ共通スル學科ヲ總稱スルモノニシテ其主



操 體 徒 生

要ナル目的ハ各自専門ノ學科ヲ修ムルノ基礎ヲ作爲スルニアリ此ニ至テ校務分掌規程ニヨリ此名稱ヲ設ケ科長ヲ置カル

二十八年四月京都ニ開設セル第四回内國勸業博覽會ニ生徒實修成績品ヲ出陳シタリ

同年五月文部省ヨリ本校用地トシテ淺草區南元町三十八番地々積三千九百九十二坪六合八勺石造建物五百八十五坪ヲ交付セラル

同年九月副科トシテ工業經濟並ニ工業衛生ヲ追加シ以テ時勢ノ必要ニ應ズルコト、セリ

二十九年五月又規則ノ改正ヲ行フ其大要ハ第一教旨ヲ改ム即チ從來ノ教旨ハ職工長タルベキモノ、養成ヲ以テ主要ノ目的トセシガ卒業者中ニハ諸官衙若クハ官私諸工場等ノ技術者タル者極メテ多クシテ實際名實相副ハザルノ嫌アルヲ以テ此改正ニ依リ單ニ工業ニ從事スベキ者ヲ養成スルコト、セリ第二化學機械兩工藝部ノ名稱ヲ廢止ス今回各科ニ科長ヲ置キ以テ其ノ教務ヲ整理スルコト、セシガ故ニ別ニ部ヲ置クノ必要ナキニ由ル第三染織工科ヲ色染、機械ノ專修課目ニ分ツ染織業ノ發達ニ伴ヒ分業ノ必要アルヲ以テナリ第四電氣科ヲ機械、化學ノ二分科ニ分ツ元來電氣業ハ機械工業ト化學工業トニ屬シ兩者ノ間劃然區分セラル、ヲ以テ各、其專修スル所ヲ分割セリ第五入學試驗程度ヲ改ム本改正ニ於テ入學程度ハ尋常中學校卒業程度ト改メ以テ各中學校トノ聯絡ヲ明ニセリ

三十年十月學資給貸規程ヲ制定ス要ハ工業ノ勃興ニ伴ヒ卒業者ノ需要頓ニ増加セシヲ以テ聘用者ノ豫約及ビ獎學ノ便宜ヲ圖リタルニアリ

同年十一月校長手島精一文部省普通學務局長兼校長ニ任ゼラル

三十一年一月十八日文部省普通學務局長兼本校長手島精一願ニ依リ本官並ニ兼官ヲ免セラル同日教授阪田貞一校長心得ヲ命ゼラル二月八日教授阪田貞一校長ニ任ゼラル

三十二年二月十日校長阪田貞一教授ニ任ジ手島精一校長ニ任ゼラル

同年六月規則ヲ改正ス其要點ハ第一從前學年ヲ二學期ニ分チシヲ三學期ニ分

チ授業上ノ便宜ヲ圖リ第二倫理ノ學科目ヲ新設シテ工業者タルベキ生徒ノ徳義心涵養ニ資シ第三染織科ヲ色染、機織ノ二分科ニ分チ以テ工業ノ進歩分業ノ必要ニ應ジタリ又各科ニ選科生ヲ再興シテ實業者ニ修學ノ門戸ヲ開ク第四工業圖案科ヲ新設シテ工業圖案ノ技術者養成ヲ圖レリ第五在地方中學校卒業生ノ入學試験ヲ當該中學校ニ依囑シ以テ是等卒業生ノ遠ク東京ニ來リ受験スルノ勞費ヲ省クコト、セリ

三十三年佛國巴里府ニ開設セル萬國博覽會ニ生徒實修成績品ヲ出陳ス之ニ對シ同會ヨリ金賞牌ヲ贈リ來レリ

三十四年五月十日勅令第九十九號ニ依リ本校々名ヲ東京高等工業學校ト改稱セラル

第四章 東京高等工業學校時代

第一 當代ニ於ケル工業界ノ概況

本時代ニ於テハ明治三十四年ヨリ同三十九年ニ至ル約五年間ニ於ケル我工業界ノ概況ヲ叙述セントス抑、前時代ノ末期ヨリ好望ヲ以テ進ミ來レル我工業界ハ本時代ノ初期ニ至テ愈、發展ノ狀勢ヲ呈セリ即チ一面ニハ財界ノ順潮ニ歸シタルト共ニ海外輸出ノ増加ニ促サレ益、工業發達ノ氣運ヲ來シ他面ニハ知識技能アル技術者ハ經驗ヲ積ミ愈、學理應用ノ効果ヲ舉グ以テ進歩ノ趨勢ヲ資ケ各種ノ工業ハ顯然見ルベキモノアルニ至レリ

本時代ノ初期即チ三十四年末ニ於ケル工場數七千三百四十九箇所ニシテ内原動力ヲ用フルモノ二千七百六十四箇所、原動力ヲ用ヒザルモノ四千五百八十五箇所ナリシニ三十六年末ニ至リテ工場數八千二百七十四箇所ニ上リ内原動力ヲ用フルモノ大ニ増加シテ三千七百四十一箇所トナリ原動力ヲ用ヒザルモノ稍、其數ヲ減ジテ四千五百三十三箇所トナレリ斯ノ如ク此年間ニ於テ原動力ヲ用フル工場ヲ増加シタルハ其規模ノ擴大ニ赴キタルヲ表明スルモノニシテ其資本金額モ亦頗ル増加セルヲ見ル且又前時代ヨリ引續キ各階級ノ工業技術者養成ノ機關トシテ工業ニ關スル學校ノ設立益、増加シ三十五年ニハ京都

ニ高等工藝學校、三十八年ニハ名古屋ニ、本年ニハ熊本ニ各高等工業學校ノ

テ其資本金額モ亦頗ル増加セルヲ見ル且又前時代ヨリ引續キ各階級ノ工業技術者養成ノ機關トシテ工業ニ關スル學校ノ設立益々増加シ三十五年ニハ京都

ニ高等工藝學校、三十八年ニハ名古屋ニ、本年ニハ熊本ニ各高等工業學校ノ設置アリ其他各地ニ低度工業學校續々相踵イテ起リ今日ニ至テハ此種ノ學校全國ニ於テ百九十七校ノ多キニ達セリ是ニ依リ皆我工業ガ年一年次第二成熟ノ氣運ニ向フト共ニ適良ナル工業指導者及ビ良工缺乏ノ聲ハ益々喧傳セラルルニ至レリ是レヨリ先キ本校ハ工業界ノ前途ヲト知シ其急須ニ應センガ爲メ益々多數ノ生徒ヲ收容シ以テ多數技術者ヲ養成センコトヲ企圖シ第一次ノ擴張ニ次グニ第二次ノ規模擴張ヲ計畫シ之ガ費途ヲ要求セシニ政府ハ第十三回議會ニ於テ其協賛ヲ得三十二年度ヨリ三十五年度ニ至ル四箇年繼續費トシテ建築及ビ機械費ニ於テ四十五萬餘圓ヲ支出セラレ以テ今日ノ校舍及ビ設備ノ較々全キヲ見ルニ至レリ

三十七年日露戰役ノ當初ニ當リ戰役ヲ悲觀シテ國民ノ購買力頓ニ減退シ我諸工業ハ一時屏息ノ狀態ニ沈淪シタリシト雖モ幾クナラズシテ軍用品ノ需要劇增ヲ告ゲタルト我輸出品ノ増加シタルトニ依リ戰役中業ニ既ニ工業發展ノ氣運ヲ現ハシタルモノアリ就中木綿紡績、織物及ビ鐵工業ノ如キハ其最モ較著ナルモノナリ尋テ三十八年戰後ニ於テハ從來戰時ノ故ヲ以テ購買ヲ躊躇セシ内國用品ノ需要ハ俄ニ頻繁ヲ告ゲ東洋貿易ハ次第ニ盛況ヲ呈シ工業ノ發展ハ漸ク將ニ實現セントスルノ氣運ヲ呈セリ輒近本校卒業業者ノ需要益々多キヲ加ヘ三十八年末ニ於テ其ノ就職者ヲ前年ニ比スルニ世間ノ工業ニ招聘セラレタル者數十名ヲ増加シタルモ亦之ガ爲メナリ又本時代ニ於テ特筆スベキハ低利ナル外資ヲ仰テ我事業ヲ幫助經營シ及ビ諸工業會社即チ綿糸紡績會社麥酒會社等ノ如キ同業合同者ヲ出シ其他幹線ヲ有スル私設鐵道業ハ將來國有トスルノ議ヲ本三十九年ノ帝國議會ニ於テ可決セルガ如キ皆小規模ヲ合シテ大規模ト爲スノ施設ニ基ケルモノナリ又方今我工業界ノ趨勢ハ漸ヤク電力ヲ採用スルモノ増加シツ、アリ蓋シ蒸氣原動力ニ比シ電力ノ効率多キニ依ルベシ今ヤ電力ヲ以テ之ニ代フルニ至ラバ其工程ニ應ジテ隨意ニ加減シ得ラル、等ノ利便アリ從テ冗費ヲ節制スルニ至リ工業經濟上一新生面ヲ開クニ至ラン我工業界ノ前途モ轉々有望ナリト謂フベシ

第二 沿革

明治三十四年五月十日本校々名ヲ東京高等工業學校ト改稱セラル是レ本校教育ノ程度ハ高等學校ニ比スベク又各地ニ工業學校ノ設置アリテ本校ト混同セラル、ノ嫌アルヲ以テ本校從來ノ名稱ニ高等ノ二字ヲ附加セラレタルニ外ナラズ之ニ依テ特ニ本校教育ノ程度ヲ高尚ナラシメタルニアラズ即チ本校教育ハ猶從前ノ如ク實技ノ練習ニ重キヲ置キ兼テ學理ヲ修得セシメ適良ノ技術者ヲ養成スルノ主旨ハ敢テ校名改稱前ト異ナルコトナシ

此レヨリ先キ文部省ハ時勢ノ要求ニ應シ第十三帝國議會ニ本校第二ノ擴張案ヲ提出セラル、ヤ本校ハ工業教育振作ノ急務ナル理由ヲ草シ之ヲ當局上司及貴衆兩院議員ニ提供シ以テ其參考ニ資シタリ同草案ハ頗ル詳細ニ涉リ長文ニ屬スルヲ以テ今此ニ其全文ヲ掲載スルコト能ハズ依リテ左ニ其大要ヲ舉グ

方今我邦ノ利源ヲ開發シ國富ノ増殖ヲ圖リ以テ國力ノ伸張ニ資セントセバ我邦ヲシテ工業ヲ振作シ工業國タラシムルヨリ急ナルハナシ蓋シ輿論ノ趨向ト政府ノ方針亦此ニアルベキヲ信ズ然ルニ今日猶ホ學理ヲ應用シタル機械類若クハ化學製品ノ如キ其輸入ハ増加スルモノ一方ノミニ偏セリ且ツ夫ノ海外航路ノ如キ政府ハ銳意之ヲ獎勵セラル、モ我輸出ノ貨物ハ依然トシテ未製品多キヲ占メ又羊毛輸入税ノ如キハ廢止セラレタルモ毛織物ノ輸入ハ却テ増加セルニアラズヤ斯ノ如キ事例ハ枚舉ニ遑アラズ且ツ夫レ方今我邦ノ資本家ハ有利ノ工業ヲ起サントスルノ希望ヲ懷クモノ多キモ逡巡敢テ之ニ著手スルモノ稀少ナルハ何故ゾ是レ他ナシ工業ノ源流タル技藝教育ノ施設完カラズ隨テ適良ノ技術者ヲ得ルコトノ難キニ原因セズンバアラズ今ヤ我邦固有ノ物産中ニハ稍々改良ノ結果ヲ收メタルモノナキニアラズト雖モ尙進ンデ其改良ヲ要スルモノ極メテ多シ固有ノ物産猶ホ且ツ然リ況ンヤ日新工業ノ製品ニ於テヲヤ又諸外國ト改正條約實行ノ結果彼我競争ノ激烈ナルベキハ逆メ賭ルニ難カラズ已ニ現今邦人ノ外國ニ在ルモノハ其工場ノ觀覽ヲ謝絶セラル、ニ至レリ是レ邦人タルモノハ愈々奮勵工業獨立ノ地位ヲ鞏固ニスルノ決心ナカルベカラザルノ秋ナリ而シテ其決心ノ實行ハ先

ヅ技術者養成ノ外ニ求ムベカラズ歐米諸邦工業進步ノ原因皆技藝教育ノ獎

烈ナルベキハ逆メ賄ルニ難ナシニ現ナリ
ノ觀覽ヲ謝絶セラル、ニ至レリ是レ邦人タルモノハ愈々奮勵工業獨立ノ地位ヲ鞏固ニスルノ決心ナカルベカラザルノ秋ナリ而シテ其決心ノ實行ハ先

ヅ技術者養成ノ外ニ求ムベカラズ歐米諸邦工業進步ノ原因皆技藝教育ノ獎勵ニ基クモノ亦故ナキニアラザルナリ

斯ノ如ク技術者ノ養成ハ實ニ刻下ノ急務ニ迫レルヲ以テ我政府モ從來技術者ノ養成ニ關シテハ施設スル所尠カラズト雖モ我國力伸張ノ程度ニ比スルトキハ規模頗ル狹少ナルノミナラズ一般教育系統上ヨリ觀ルモ其施設ハ偏重偏輕ノ憾ナキ能ハズ是故ニ技術者養成ノコトハ他ノ必要ナル國家事業ト駢進ヲ期シ一日モ之ヲ忽諸ニ附スベカラズ

本草案ノ主旨ハ幸ニ當事者ノ贊成ヲ得テ國庫ハ特ニ四會計年度ニ亘リ約四十五萬餘圓ヲ支出スルコト、ナリ遂ニ本校第二擴張ハ之ヲ實現セラル、ニ至レリ而シテ本擴張ノ主ナルモノハ校舍ノ改築實修工場ノ増築並ニ實修用機械ノ設備ヲ充實スルニアリ而シテ此築造ハ三十六年三月ヲ以テ竣成ヲ告ゲ機械モ漸次増購スルヲ得タリ

三十五年九月規則ヲ改正シ從來授業料一學年金十五圓ナリシヲ金二十圓ニ増額ス同月文部省令同省直轄學校外國人特別入學規程ニ依リ入學ヲ許可スルノ制ヲ設ク是レ清國、韓國其他ノ東洋諸國人ハ自國ニ於テ工業教育ヲ修ムルノ途ナキヲ以テ本校ニ入學ヲ志望スルモノ、數ヲ増加シタルニ依レリ

同年十二月規則ヲ改正ス其要點ハ第一建築技術者ノ需要多キヲ以テ本校ニモ建築科ヲ新設セリ但シ設備等ノ關係ヨリ未ダ之ヲ實施スルニ至ラズ第二工業圖案科ノ生徒ハ技術ノ成績如何ニ依リ修業年限ヲ延長スルヲ得ルコト、セリ是レ圖案ノ如キ天稟ノ才能ヲ要スルコト多キモノハ一定ノ年期内ニ成業ヲ期スルコト難キヲ以テナリ第三當時全國中學校ノ數ハ劇増シテ二百數十校ヲ算セラレ其卒業生モ亦饒多ナルヲ以テ一般入學志望者ヲ募集スルノ要ナキニ至リタルニ依リ之ヲ廢止シ中學校卒業生若クハ之ト同等以上ノ學力アリト檢定セラレタル志望者ニ就キ募集スルコト、セリ第四聽講生ノ制ヲ新設シ主トシテ當業者ニ聽講ノ便ヲ與フルコト、セリ但シ當分染織科及ビ窯業科ノ二科ニ限リ之ヲ實施セリ

三十六年四月大阪ニ開設セル第五回內國勸業博覽會ニ生徒實修成績品ヲ出陳

セリ

同年北米合衆國聖路易ニ開設セル萬國博覽會ニ生徒實修成績品ヲ出陳セシニ同會ハ之ニ對シ大賞牌ヲ贈リ來レリ

三十七年一月規則ヲ改正シ入學志望者ハ三箇以內ノ志望學科ヲ指定スルコトヲ得ルコト、セリ是レ從前一學科ノミニ志望ヲ許セシ結果志望者多キノ學科ハ俊秀ノ生徒ヲ得ルニ難カラザルニ反シ其尠キモノハ學力稍、不足ナルノ憾アリテ同一ニ授業スルノ不便ナキニアラザルヲ以テ全生徒ノ學力ヲ均一ナラシメントスルノ主旨ニ出ヅ又中學校及ビ工業學校ノ卒業生ニハ當該學校長ノ推薦者ニ就キ本校ニ於テ適宜ノ檢定ヲ施シ若干名ヲ限リ入學ノ當初ヨリ學資ヲ貸付スルコトヲ得ルノ制ヲ設ク是レ多年教育シタル當該校長ノ推薦ニ重キヲ置キタルニ依ルナリ

三十八年二月授業料ヲ一學年金貳拾五圓ニ増額ス頻年物價騰貴ノ爲メ校費ヲ増加スルノ一助ニ資スルニ在リ同年九月規則ヲ改正ス其主ナルモノハ中學校優等卒業生無試験入學ヲ許可スルニ在リ則チ本校ニ於テ適當ト認メタル中學校ヲ卒業シタル入學志望者ニシテ三學年以上當該學校ニ在學シ及第者中首位ヨリ起算シ全數ノ十分ノ一ニ至ルマデノ席次ヲ有スル者ハ學業ノ成績其他ノ要件ヲ檢定シ試験ヲ須ヒズ入學ヲ許可ス但シ入學ヲ許可スベキ人員ハ各學科募集定員ノ約半數トス是レ在地方受験者ノ試験ヲ中學校長ニ依囑スルハ當ニ彼此ノ煩累多キノミナラズ弊害モ亦生ジ易キモノナレバ同依囑ノ制ヲ廢スルト同時ニ此優等生選抜ノ制ヲ設ケタルナリ而シテ本改正ハ三十九年四月生徒募集ノ時ヨリ實施セシニ此種ノ入學志望者募集總員ノ半數ヲ超過シ檢定ノ結果入學ヲ許可セザリシモノ尠カラズ

本校ハ大略上述ノ經歷ヲ以テ現下職員略ボ充實シ校舍、實修工場並ニ諸般ノ設備等漸ク完整ノ境遇ニ近キタリ

現今本校ハ地積一萬四千四百七十七坪ヲ有シ建造物ノ總積六千六百七十一坪餘ニ涉レリ校舍ハ大別シテ學科ノ授業ニ供スル教室ト製作實驗ニ供スル實修工場ノ二ニ分チ教室ニハ各科專用ノ講義室準備室及ビ圖書教室等二十八室アリ

又實修工場ハ本校所設教科ニ關スル實業ヲ授ケ得ベキ器具機械ヲ備ヘ以テ工

ニ涉レリ校舍ハ大別シテ學科ノ授業ニ供スル教室ト製作實驗ニ供スル實修工場ノ二ニ分チ教室ニハ各科専用ノ講義室準備室及ビ圖書教室等二十八室アリ

又實修工場ハ本校所設教科ニ關スル實業ヲ授ケ得ベキ器具機械ヲ備ヘ以テ工場ノ設備ヲ具有セリ尙ホ建物ノ分類及ビ各科設備ノ概要ヲ舉グレバ左ノ如シ

建物分類坪數

事務所(内二階八十一坪餘) 三七九・九一二^坪

講堂(二階) 一二七・五二〇

教室(内二階二百七十八坪餘三階二百十四坪餘) 八三四・一二〇

書庫、閱覽室(内二階九十三坪餘三階四十四坪餘) 一三八・三三〇

染織科工場(内二階百二十坪) 八八二・〇〇〇

窯業科工場(内二階四十二坪) 三一七・二八〇

應用化學科及電氣化學分科工場 二四五・九九〇

化學分析室 一三四・四六〇

機械科工場(内二階二百坪餘) 一、〇六四・四四八

電氣科工場(内二階六十坪三階四十八坪) 二四一・〇〇〇

工業圖案科(内二階五十四坪三階百五十五坪餘) 二六四・〇七〇

附屬職工徒弟學校事務室(内二階二十坪) 八〇・〇九〇

同教室(内二階百十五坪) 一六五・〇〇〇

同工場 三〇三・〇〇〇

附設工業教員養成所建築科工場 一四〇・〇〇〇

同附屬工業補習學校教室 一五・〇〇〇

倉庫(内二階三十六坪) 七二・〇〇〇

雜建物(内二階四十八坪三階十九坪餘) 七六六・三二〇

上記建物ノ築造ヲ區別スレハ木造二千百十坪四合五勺二才(内二階五百零四坪五合二勺、三階十九坪五合二勺)煉瓦造三千五百二十六坪七勺八才(内二階七百三十六坪四合一勺、三階四百六十一坪七合六勺)木骨煉瓦造十二坪、石造四百五十坪、土藏七十二坪(内二階三十六坪)ナリトス

第五章 獎學金、獎學賞牌

獎學金

工業ハ固ト是レ特殊ノ事業ニ屬シ工業ニ關スル天才アルモノハ之ガ専門ノ教育ニ依リ益々知識技能ヲ發揮シ以テ工業ノ適才タルニ至ラン而シテ此種ノ適才モ亦工業ノ篤學者ナラザルトキハ天才モ何ノ效カアラン然ルニ世ノ工業篤學ノ少年ニシテ家資豐ナラズ若クハ身ハ一時勞働ニ服シ工業ノ教育ヲ修ムルノ學資ヲ貯蓄シタルモノ、中ニハ工業ノ適才タルノ素地ヲ有シ且ツ工業ハ其性質上世ノ辛酸ヲ嘗メ耐忍ニ堪フルモノ其他俊秀ノ生徒ハ共ニ他日ノ成功ヲ期スルニ足ルヲ以テ此輩ノ入學ヲ獎勵スルノ要アリ故ニ本校ハ從前世ノ有志家ニ此種ノ事情ヲ訴ヘ獎學ノ賛成ヲ求メ若クハ有志者自ラ進デ此舉ヲ賛成シ金員又ハ有價證券ヲ寄付セラレ今ヤ其合計二萬四千九百餘圓ニ達セリ本校ハ各寄付者ノ指定セル用途ニ基キ或ハ學資金ヲ貸付シ或ハ金品ヲ賞與シ本校ノ教育ヲ獎勵シ得ルハ是等寄付者ニ向テ謝意ヲ表スル所ナリ今は是等寄付者ヲ舉グレバ左ノ如シ

寄付ノ目的	金	額	寄付者
手島獎學賞品資金	軍事公債額面 勸業債券額面	二〇〇 五六〇	有志者
同		二〇	中川謙二郎
大橋獎學貸費資金		三〇〇	大橋佐平
谷崎獎學貸費資金		三〇〇	谷崎安太郎
手島獎學貸費資金		五〇〇	手島精一
住友獎學貸費資金		三、〇〇〇	住友吉左衛門
日本石油株式會社獎學貸費資金		三〇〇	日本石油株式會社
東京瓦斯株式會社獎學貸費資金		一、〇〇〇	東京瓦斯株式會社
岩岡獎學賞品資金		五〇	岩岡保作
日本麥酒株式會社獎學貸費資金		六〇〇	日本麥酒株式會社
岩崎獎學貸費資金		五、〇〇〇	男爵岩崎久彌
安田獎學貸費資金		一、〇〇〇	安田善次郎
三井獎學貸費資金		五、〇〇〇	男爵三井八郎右衛門

岩崎獎學貸費資金
安田獎學貸費資金
三井獎學貸費資金

一、〇〇〇
安田善次郎
五、〇〇〇
男爵 三井八郎右衛門

山口紀念獎學貸費資金	整理公債額面	二、七〇〇	山口達太郎
森村豐明會優等賞資金	大阪市築港公債額面	一、〇〇〇	森村豐明會
權田紀念賞品資金		五〇	權田みさ
古河獎學貸費資金		三、〇〇〇	古河潤吉
手島獎學賞品資金		一〇〇	匿
間瀬紀念獎學賞品資金		一〇〇	間瀬正信氏遺族
三浦紀念獎學賞品資金	國庫債券額面	五〇	三浦梅之助友人四十七人
川島紀念獎學優等賞品資金	現金	四	總代 池田善四郎
		一〇〇	川島晉遺族
			川島都賀

合計

二四、九三四

以上ノ金額中ヨリ在學生ニ學資ヲ貸付シ爲メニ學業ヲ終了スルコトヲ得タルモノ三十四人現今貸費ヲ受クルモノ三十五人ナリトス年々三年生ノ卒業シテ之レヲ要セザル金額ヲ新入學生ニ充テ其數約十名ノ貸資者ハ新舊交代スルヲ以テ平時約三十名ハ此恩惠ニ浴スルヲ得初メ生徒ニ學資ヲ貸付スルヤ二年生以上ニ非ザレバ其希望ヲ容レザリシガ入學ノ當初ヨリ學資匱乏シ入學ヲ敢テスルコト能ハザルモノアルト貸資出願者タル生徒ヲ從前教育シ且是等出願者ノ才學資性及ビ父兄家計ノ狀況ニ就キ證明シ得ベキ中學校長及ビ工業學校長ノ推薦ニ依リ中ニ就キテ人物ノ優良ナルモノヲ檢定シ貸資ヲ許可スルコト、セシ以來本校ハ更ニ優良ノ生徒ヲ得テ寄付者ノ厚意ニ副ヒタルモノト謂フベシ

又貸付ノ金額ハ近時其出願者尠カラザルヲ以テ概ネ月額八圓以下數圓ノモノナキニアラズ是レ資金ノ有限ナルニ由レバ世ノ篤志家ハ更ニ此獎學ノ舉ヲ賛セラレンコトヲ望ム且ツ貸資金ノ返付ハ生徒卒業後收入アルノ時ヨリ回數納付ノ方法ニ依リ返金シ得ルモノニシテ僅ニ一名ノ死亡者ノ爲メ返金ヲ棄捐シタルノ外餘ハ皆返金ノ義務ヲ怠タラザルナリ

現校長手島精一曾テ本校長ノ職ヲ辭セシニ方リ其知人ハ同校長ノ在職久シキヲ追想シ賞牌賞品ヲ生徒ニ附與スベキ用途ヲ指定シ其資金ヨリ生ズル利子ヲ是等ノ購入費ニ充用スベキ條件ヲ付シ本校ニ寄付シタルヲ以テ手島賞牌及賞

賞牌及賞品

品ト命名シ是等ヲ生徒ニ附與ス賞牌ニ在テハ一學年間(一)遅刻、早退、缺課セザル者(二)日常課業時間ヲ確守シ學業ヲ勉勵シ殊ニ工場實修ニ専心從事シタル者(三)其他總テ紀律ヲ確守シタル者ノ三ヲ具備シタル者ニ之ヲ附與スルコト、シ第一次ニ於テハ銅賞牌第二次ニ於テハ銀賞牌第三次ニ於テハ金賞牌ヲ授與スルモノトス尙ホ附設工業教員養成所本科生徒ニ在テハ四箇年在學スルヲ以テ第四次ニ於テ特別金賞牌ヲ授與スルモノトス昨三十八年ニ於テ賞牌ヲ授與セシモノハ銅賞牌百十人銀賞牌五十一人金賞牌二十八人ニシテ誠實精勤ノ生徒ヲ獎勵スルノ效果ハ多カラズトセズ又賞品ニ在テハ學業優等品行善良ナル者ニ授與スルモノニシテ是亦生徒ヲ獎勵スルノ效果ハ空シカラズ

紀念獎學資金

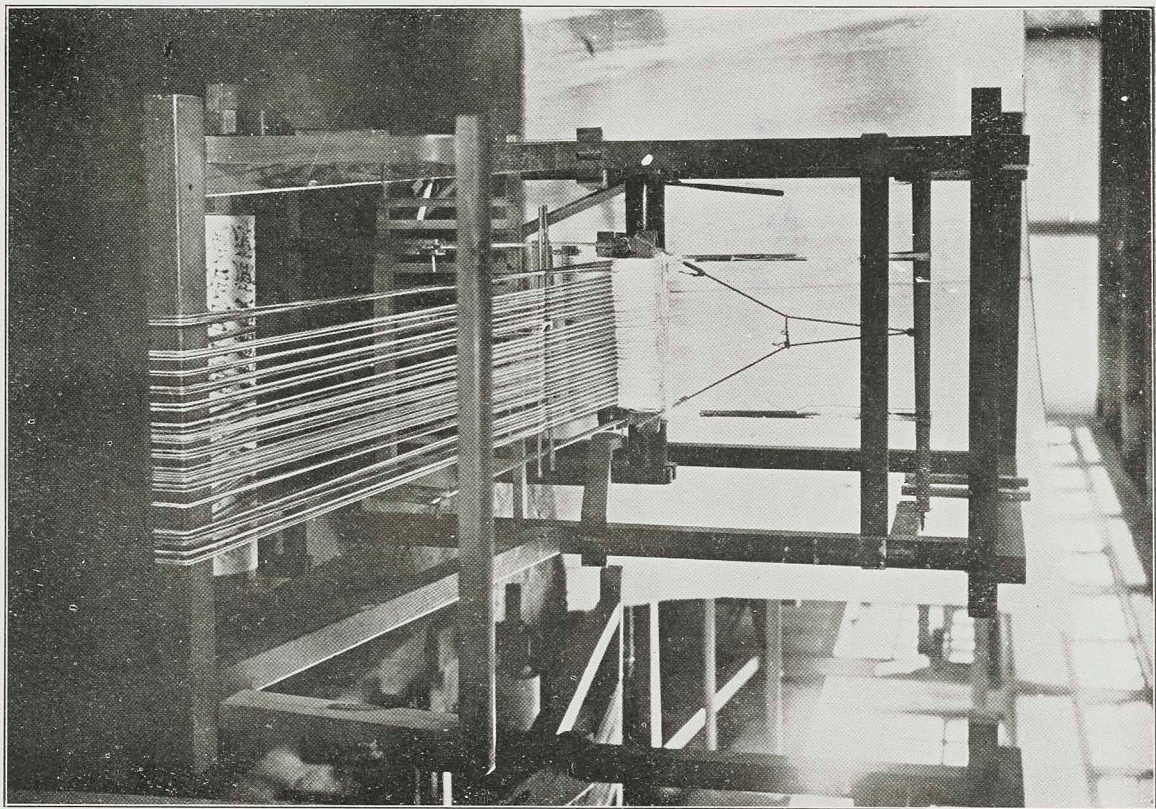
本年ニ於テ本校ハ創立滿二十五年ニ當ルヲ以テ本校ニ關係厚キ有志者發起トナリ紀念獎學資金ヲ募集シ本校出身者ハ勿論世間ノ有志者工業會社等モ此舉ヲ贊シ金員有價證券若クハ機械類等寄付ノ申告アルモノ、金額及評價ハ合計六萬圓三十九年五月十四日迄ニシテ尙目下陸續寄付ノ申告アルヲ以テ其總額ハ創立紀念ノ當日ニ於テ本校ニ寄付スルノ時ニ方テハ七萬圓内外ニ達スベシト豫期セラル而シテ本資金ハ凡テ利子ノミヲ支消スルモノニシテ俊秀生徒ニ授與スベキ獎學金品及ビ學術研究費ニ充用スルノ用途ヲ指定シ本校ニ寄付シ其利子ノ分配法ハ本校ニ一任セラルベキヲ以テ本校ハ熟議ヲ遂ゲ其分配ヲ定ムベシト雖モ俊秀生徒ニ授與スベキ賞金ハ約一萬圓ニ對スル利子ヲ以テ之ニ充用シ學術研究ニ要スル費額ハ多々益々効用多キヲ以テ殘餘ノ金額ニ對スル利子ハ悉皆研究費ニ支出スルハ敢テ不當ノ分配ナラザルベシ是レニ依リ凡ソ生徒十名ニ對シ年々五六百圓ヲ賞與シ數千圓ヲ研究費ニ充用シ得而カモ本校ハ誠實ニ是等ノ費途ニ留意シテ寄付者ノ厚意ヲ空フセザランコトヲ期セントス

第二編 各科及ビ附屬學校

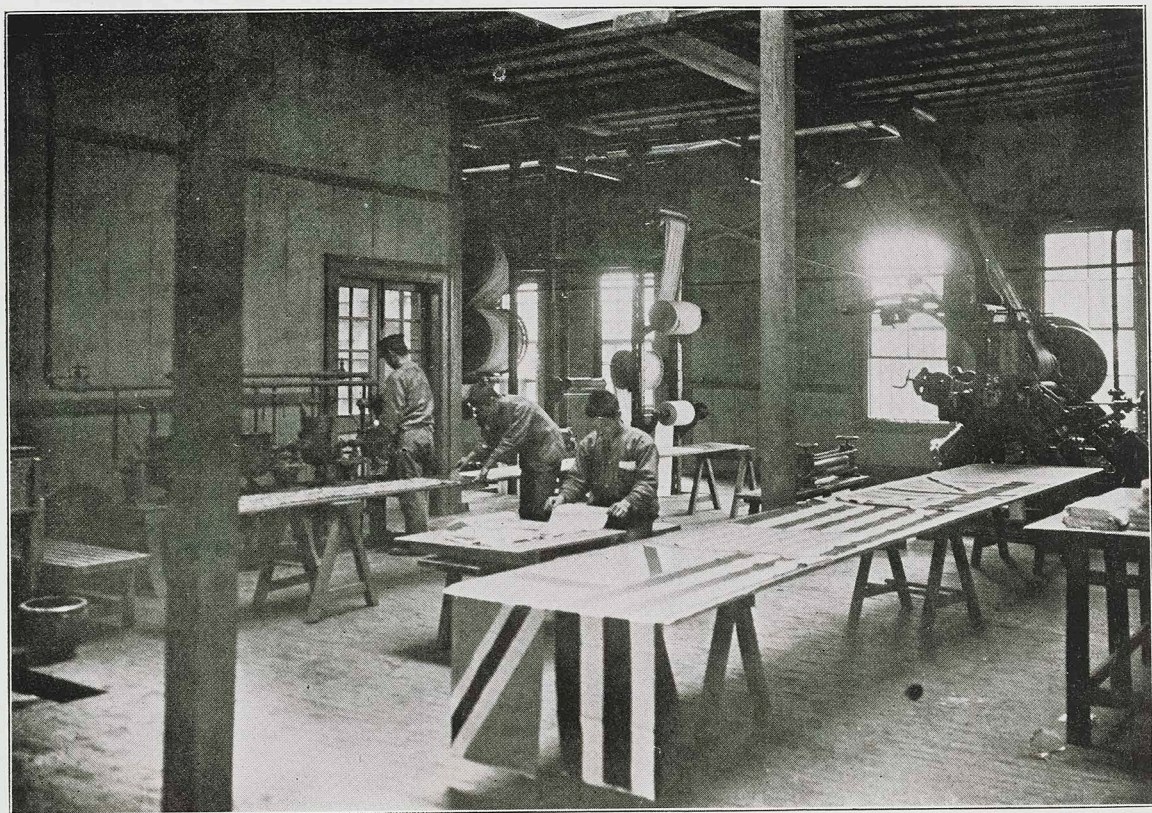
第六章 染織科

沿革

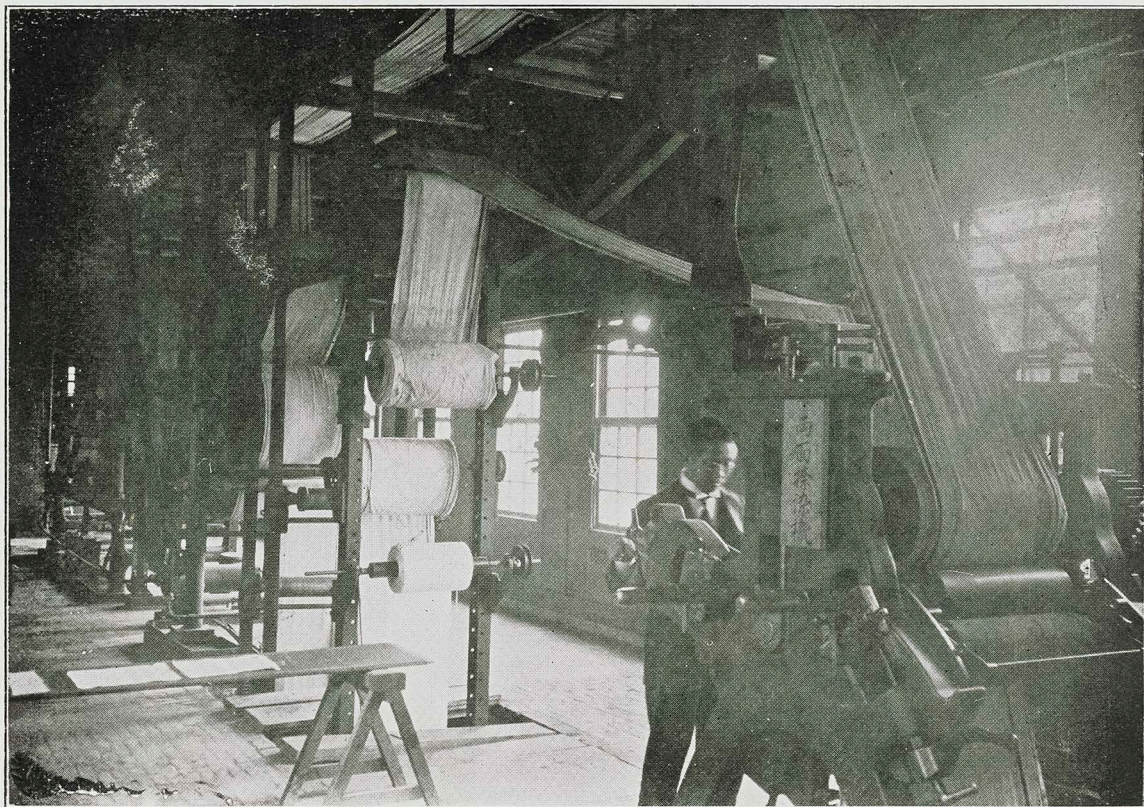
本科ノ設立ハ明治十四年五月本校創立ノ際化學工藝科中ノ一專修科目トシテ



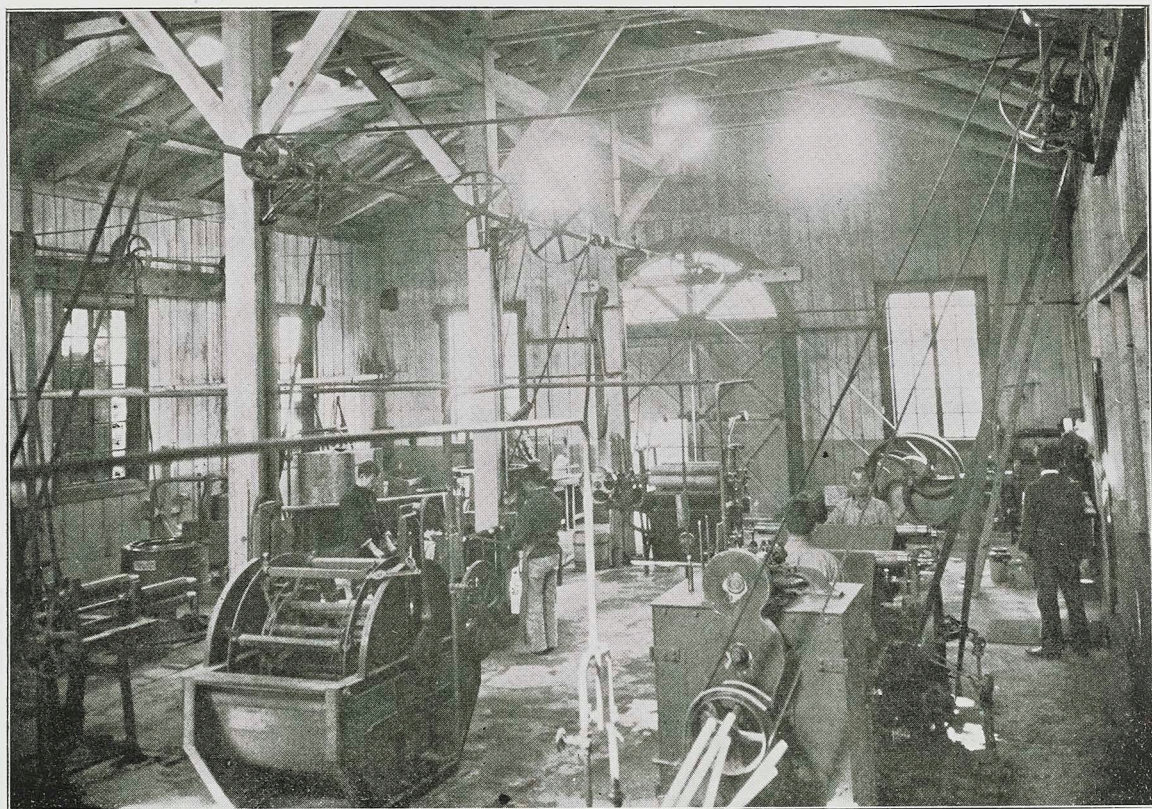
臺機ノ附備(年三十二治明)時當ノ設新業機



染織科染色科分捺染工場



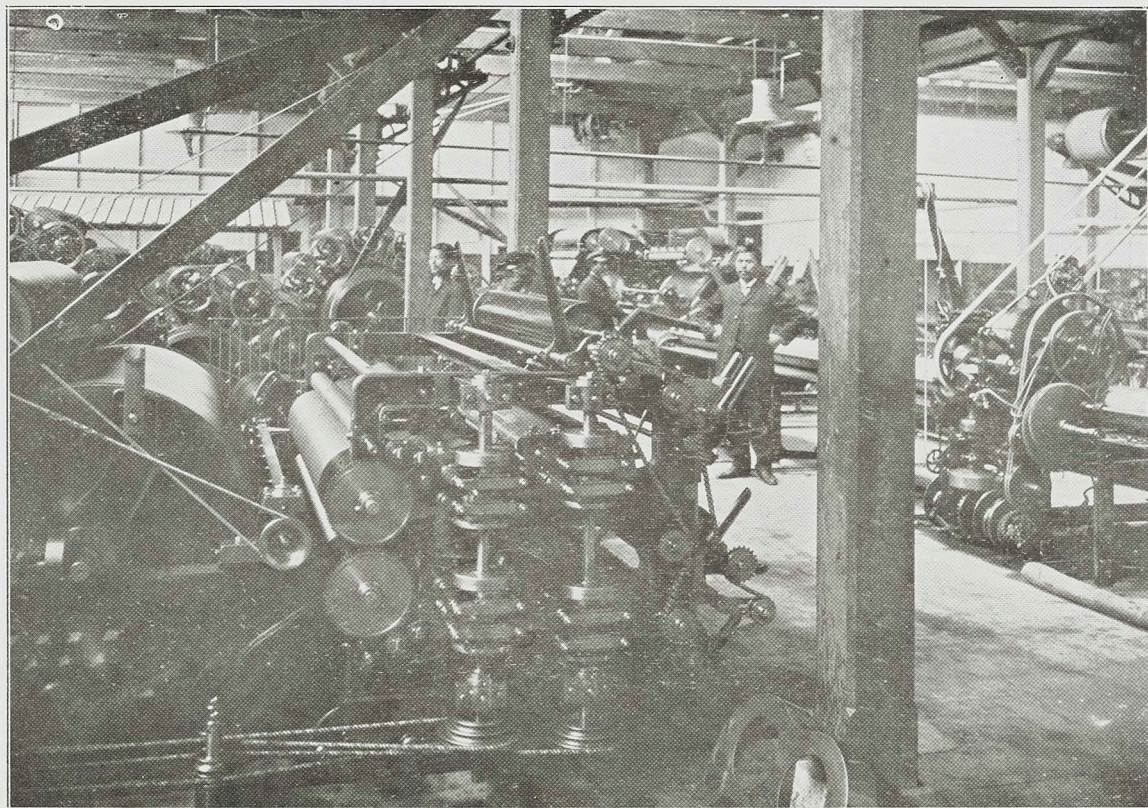
機染捺面兩附備科分染色科織染



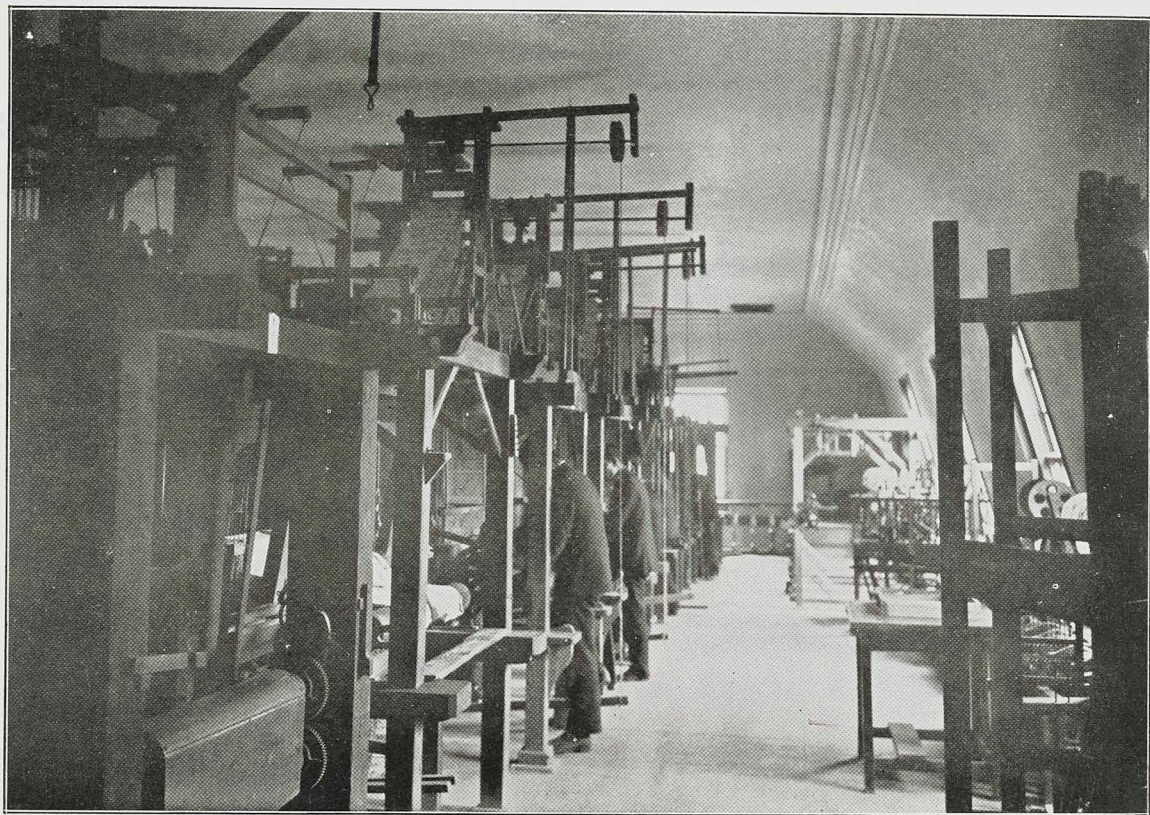
染織科染色科分科浸染工場



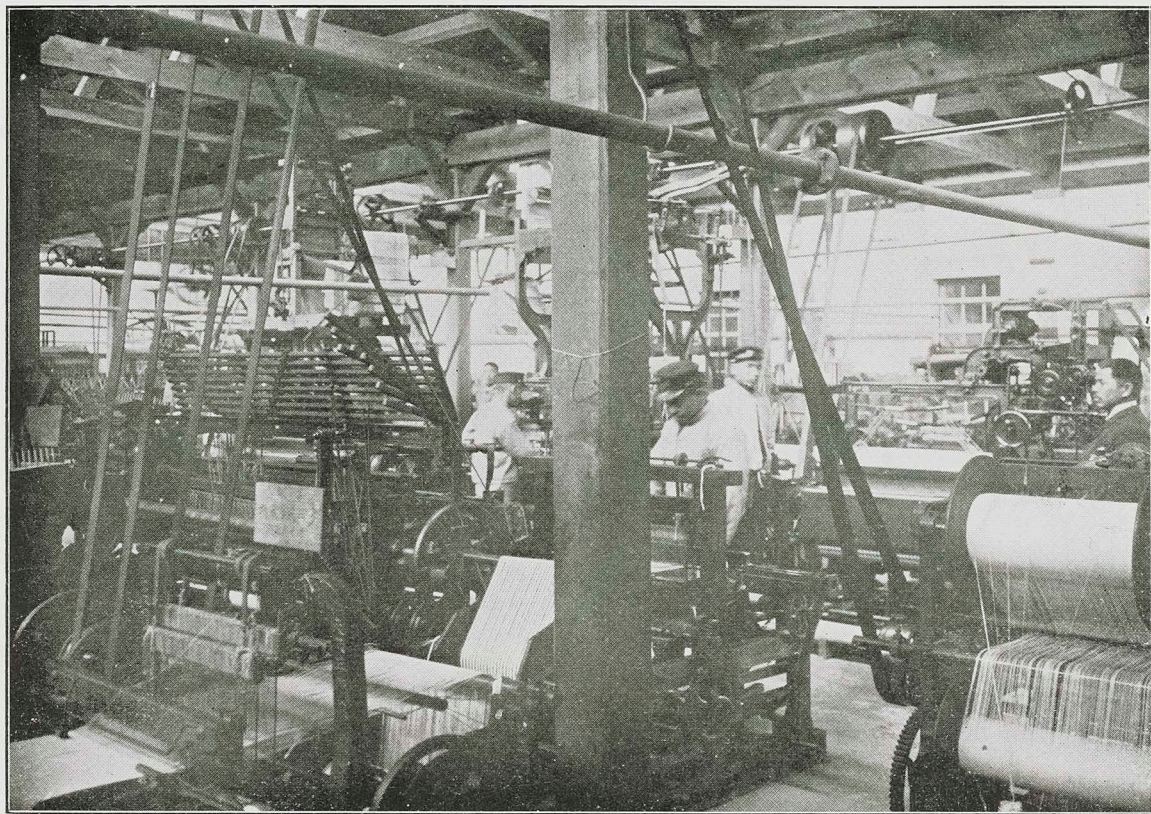
染織科機械分科燃系工場



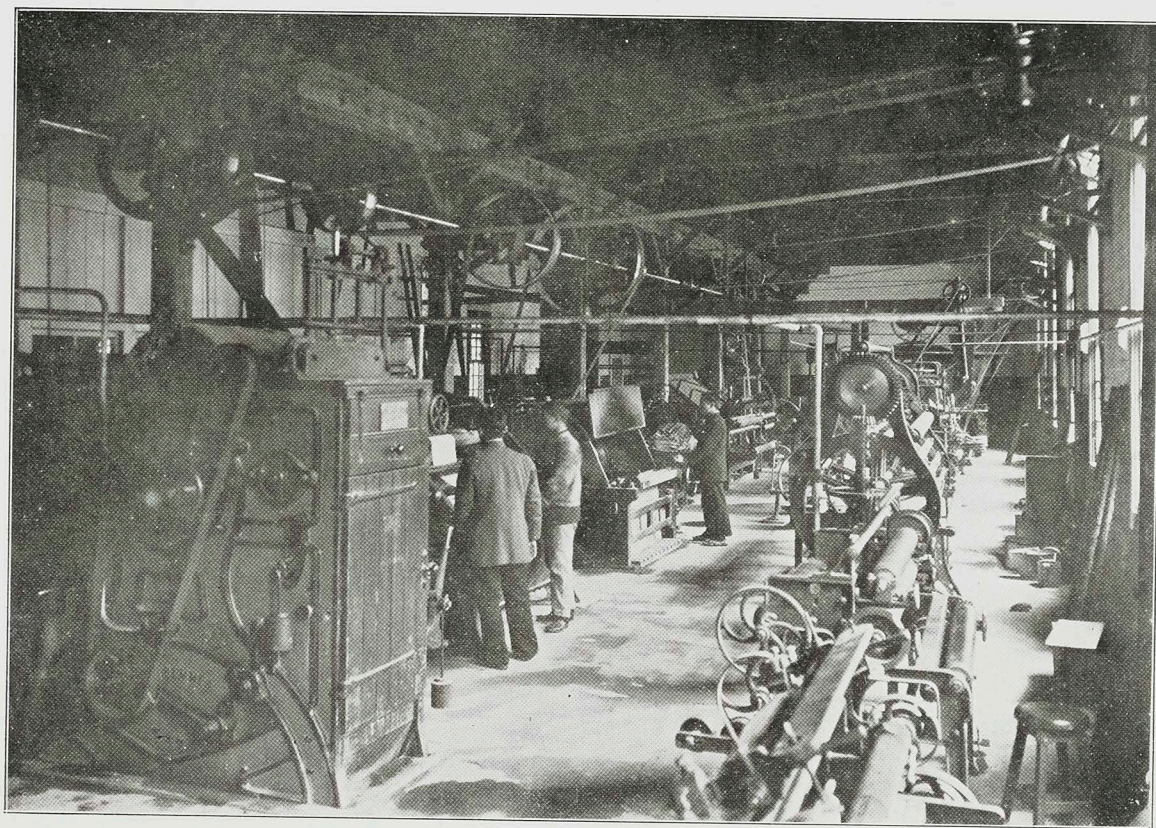
染織科機械分科紡績工場



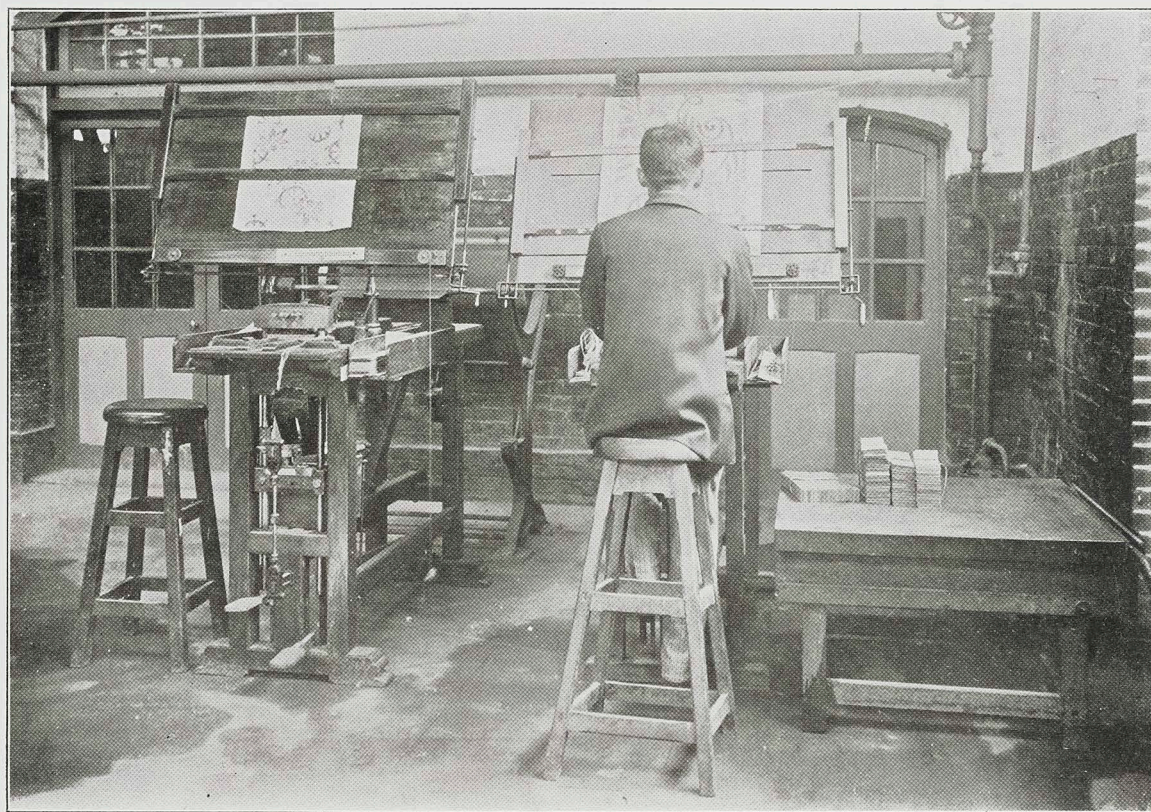
染織科機械分科手織工場



染織科機械分科力織工場



染織科機械分科織物仕上工場



器孔穿紙紋科分織機科織染

設置セラレタルニ濫觴ス

十九年八月始メテ化學工藝部中ニ染工科ノ名稱ヲ付シテ本學科ヲ設置セラル
二十三年七月本學科中ニ機械ノ一科目ヲ増設スルニ及ビ染織工科ノ名稱ヲ付
セラル是レ當時本邦染織界ノ實況ハ其當業者ノ數極メテ多ク殆ンド全國ニ散
在スルモ營業ノ規模ハ狹少ニシテ往々色染業者ニシテ機械業ヲ兼ヌルアリ故
ニ本科ニ於テ單ニ色染業ヲ修學シタルモノ、需要甚ダ尠キモ亦已ムヲ得ザリ
シナリ殊ニ織成品ハ概ネ色染ノ工程ヲ要スルニ在レバ色染ト機械トハ相互密
接ノ關係ヲ有スルヲ以テ機械ノ一科目ヲ増設スルコト、セリ而シテ染織業ヲ
學校ニ於テ教授スルハ實ニ本校ヲ推シテ嚆矢トス爾後二十七八年以降染織學
校ハ陸續地方ニ設置セラル、ニ當リ之ガ教員ノ供給及ビ我染織業ノ進歩ニ伴
ヒ當該ノ技術者ヲ輩出シ得タルハ本校ガ早ク既ニ色染ニ加フルニ機械ノ科目
ヲ以テシタルモノ與カリテ力アリト謂フベシ

三十二年六月本科ヲ色染機械織ノ二分科ニ分チ染織科ト改稱ス由來我色染、機
織ハ殆ド手工業ニ屬スルモノ、ミニシテ隨テ皆家内の工業ナリシモ機械ハ漸
次力織機ノ効果ヲ識認スルニ至リ色染モ時ニ機械力ヲ應用スルモノナキニア
ラズシテ漸ク工場的工業ニ推移スルノ趨勢ヲ示セリ是ニ於テ色染機械ノ各專
業ニ堪能ナル技術者ヲ要スルハ又染織界ノ要求ナルベキヲ以テ分テ二科トナ
シ各別ニ工場ヲ備ヘ以テ專門ノ技術者ヲ養成スルコト、セリ

此ヨリ先キ本科ニ於テハ木綿、絹、毛等各種ノ原料ニ就キ授業シ來リシガ文
部省ハ京都ニ高等工藝學校名古屋ニ高等工業學校ヲ新設シ此二校ニモ染織二
科ヲ併置セラレ本校ノ染織科ハ毛織物京都ハ絹織物名古屋ハ木綿織物ニ主力
ヲ注グコト、ナリタルヲ以テ本科ニ於ケル授業ノ方法及ビ備付ノ機械類ハ毛
織物ヲ主眼トセリ

尙ホ本科ニ關シ一言ノ要アルハ三十二年度ニ於テ本校ノ規模ヲ擴張スルニ當
リ最モ主力ヲ注ギタルハ染織科ノ一科ナリトス蓋シ染織業ハ我主要ナル工業
ニ屬スルモ製造ノ方法猶幼稚ニシテ外ニハ絹織物ノ輸出多カラズ内ニハ木綿
毛織物ノ輸入尠カラザルハ一ハ適良ノ技術者ニ乏シキノ結果タランカ是ヲ以

テ國庫ハ十三萬七千餘圓ヲ支出シ機織工場ノ新築及染織機械ノ增購ニ供シタ
レバ染織教育上ノ便益多キハ前日ノ比ニアラザルナリ

色染分科
ノ設備

明治十八年四月染工場新築落成セシカバ茲ニ始メテ實修授業ヲ開始セリ是レ
現今ノ浸染室等二棟及ビ外ニ藍甕室等ニシテ之ニ設備セル諸器械ハ何レモ動
カヲ要セザルモノナリ

二十八年英國ヨリ二色捺染機ヲ購入シ之ヲ以テ綿布捺染ノ試験ヲ行ヘリ抑、
本機械ハ我邦ニ於ケル捺染機ノ嚆矢ナルヲ以テ大ニ當業者ノ注意ヲ喚起シ爲
メニ爾後大規模ノ機械捺染工場ノ設立ヲ見ルニ至リタリ

本科ニ機織ヲ併置セラレタル後漸次機械ヲ増設シ隨テ工場ノ狹隘ヲ告グルニ
至レリ依リテ再三増築ヲ行ヒタレドモ猶ホ充分ナラザリシヲ以テ別ニ色染工
場(現今ノ應用化學科精糖釀造實驗場)ヲ建築シ二十九年此ニ移轉セリ

三十年頃脫水機等ヲ又三十四五年ノ交捺染、浸染等ノ機械ヲ外國ヨリ購入シ
タリ

三十六年新築ノ機織工場落成シタルヲ以テ之ニ機織分科ヲ移シ其從來機織工
場タリシモノヲ改造シテ色染工場トナス現今ノ色染工場是レナリ

機織分科
ノ設備

明治二十三年七月染工科ニ機織ヲ増設セラル此時機織工場ニ供用セルハ僅ニ
間口六間奥行八間ノ物置小屋ヲ修補シテ之ニ窓ヲ設ケ日光ヲ通シタル粗造狹
隘ノ工場ニシテ茲ニ從來ノ手織機小幅物ヲ織ルモノ四臺大幅物ヲ織ルモノ四
臺都合八臺ヲ据付ケテ木綿及ビ絹織ノ授業ヲ開始セリ此外ニ又洋式機臺一臺
ヲ据付ケ之ニ「ジャカード」機械ヲ裝置シ以テ紋織ノ「ハンカーチ」ヲ織出
セリ

二十四年ヨリ二十五年ニ亘リ漸次洋式手織機臺ヲ増設シ且ツ同時ニ「ジャカ
ード」ヲ使用シテ絹紋織ヲ織成スルコト、ナリ茲ニ始メテ機織工場ノ設備
稍、其ノ面目ヲ改メントスルノ傾向ヲ生スルニ至レリ是ニ於テ工場ノ狹隘ヲ
告ゲタルニ依リ從來染工場ノ捺染施行ニ供用シタル室ヲ修補シテ機臺ヲ据付
ケタリ此ノ工場ノ圖ハ當時北米合衆國市俄古ニ開設セル萬國博覽會ニ出陳
セリ

二十六七年ニ於テ益、機臺ヲ増設セシ爲ニ工場ハ復タ狹隘ヲ告グルニ至リ從

ケタリ此ノ工場ノ圖ハ當時北米合衆國市佛古ニ開設
セリ

二十六七年ニ於テ益々機臺ヲ増設セシ爲ニ工場ハ復タ狹隘ヲ告グルニ至リ從來應用化學科ノ工場タリシモノヲ以テ之ヲ本科ノ工場ニ供用シ此ニ全部ノ機臺ヲ移セリ

二十八年染織工場ヲ新設セリ是ハ從來ノ染工場ト機織工場トノ間ニ更ニ一工場ヲ設ケ三棟ヲ合併シテ一工場トナシタルモノナリ此合併工場ハ都合百八十坪ヲ有スル工場ニシテ此ニ機臺ヲ増設セリ

此歳又力織機一臺ヲ英國ヨリ購入シテ瓦斯發動機ヲ据付ケ同時ニ木綿力織機ノ附屬品タル管卷機械、糸繰機械等ヲ購入シ力織機ノ實地授業ヲ開始セリ

三十年更ニ力織機三臺及ビ準備機械ヲ獨逸、瑞西ノ二國ヨリ購入セリ

三十一年佛國ヨリ絹撚糸機械ヲ購入シテ捺染工場ト力織機工場トノ間ニ更ニ一棟ノ工場ヲ増設シ此ニ撚糸機械ヲ据付ケ爾來撚糸ノ實地授業ヲ開始セリ

三十四年更ニ獨逸ヨリ力織機ヲ購入セリ

三十四五年ノ交獨逸、白耳義、佛蘭西ノ諸國ヨリ毛織物仕上機械ヲ購入セリ

三十六年機織工場ノ新築竣成ヲ告グ是ニ於テ織物及ビ仕上機械全部ヲ舉ゲテ此新工場ニ据付クルコト、ナレリ

三十九年毛ノ紡績機械ヲ購入シ紡績ノ實修ヲ開始セリ

此ヨリ先キ本科ハ上記ノ設備ニ對シ機織工場ノ汽機、汽罐等ヲ外國ヨリ購入シテ新工場ノ竣成ト共ニ据付ケヲ了シ茲ニ本科ノ設備ハ略ボ其完成ヲ告グルニ至レリ

色染分科
ノ研究試
驗

明治十八年本科ニ染工場ヲ設置セル時ニハ民間ニ於ケル色染業ノ狀況未ダ甚ダ幼稚ニシテ染料ノ如キモ其種類極メテ少ク且ツ其應用法ヲ辨識セザルモノ多カリキ

鹽基性ノ色素ハ本校開設前ヨリ我邦ニ輸入セルモノナレドモ民間ノ實業者ハ未ダ適當ニ之ヲ應用スルコトヲ知ラザリシヲ以テ本科ハ之ガ啓發指導ニ力メタル結果此等ノ應用法ハ始メテ世間ニ紹介セラル、ニ至レリ

「アリザリン」ヲ以テ赤色ヲ染ムルコト及ビ絹ノ黒染ニ「ログウト」ヲ使用ス

ルコトハ共ニ平賀教授ノ研究試験ニ出デタルモノニシテ後ニ民間實業界ニ傳ヘラレタリ其ノ他外國流ノ捺染ヲ日本流ニ應用スルコト「アニリン」黒ノ捺染法ヲ實驗セシハ高松教授ノ研究ニ出デタルモノニシテ其結果ハ總ベテ之ヲ世間ニ紹介セリ

二十四年ヨリ二十六年ノ交印度藍靛ノ輸入年々次第ニ増加スルノ傾向アリシヲ以テ本科ハ蓼藍ヨリ藍靛ヲ製造スルノ方法ヲ研究シ之ガ爲ニ高松教授ハ沖繩地方ニ出張シテ其調査ヲ遂ゲ其他諸方面ヨリ之ガ研究ノ歩ヲ進メ其結果蓼藍ヨリモ藍靛ヲ製造シ得ラル、コトヲ確メタレドモ未ダ充分ナル成績ヲ得ルニハ至ラザリキ

二十九年農商務省ノ依囑ニ依リ黃麻、麥稈、蘭草ノ染色試験ヲ行ヒ左ノ結果ヲ得タリ

黃麻ヲ染色スルニハ實用上ニ於テハ酸性又ハ鹽基性ノ染料ヲ使用スルヲ可トストス

麥稈ヲ染色スルニハ鹽基性染料ヲ使用スルヲ可トス

蘭草ヲ染色スルニハ鹽基性染料ニ非ザレバ染色シ能ハザルコト及ビ染浴中ニ醋酸又ハ膠、石鹼等ヲ加フレバ好結果ヲ得ルモノトス

又本分科ニ於テハ左ノ試験ヲ行ヒタリ

第一 「シルケツト」(光澤綿糸)ノ試験

本試験ハ本科ニ於テ行ヒタルモノヲ以テ我邦ニ於ケル該試験ノ嚆矢トス其成績ヲ世ニ發表シタル結果今ヤ汎ク世ニ行ハル、ニ至レリ

因ニ云フ「シルケツト」ナル語ハ平賀博士ガ命名シタルモノナリト傳ヘラル蓋シ「シルク」即チ絹ノ如ク光澤アルモ之ニ亞ク即チ「エツト」ノ意ナランカ

第二 日本藍ト印度藍トノ比較

本試験ノ結果染色上ニ於テ日本藍ヲ使用スルトキハ價格ノ不廉ナルト工程ノ困難ナルトノ缺點アレドモ染色ハ堅牢ナリトス又印度藍ト人造藍トハ其結果相同ジキ事實ヲ確メ得タリ

第三 絹増料ノ試験

本試験ノ結果ハ絹ノ増料ハ或ル程度マデハ糸質ヲ損セズ又染色ニ影響ヲ及ボサレモ、ニシテ實料割、ハ、易、之、ハ、

第三 絹増料ノ試験

本試験ノ結果ハ絹ノ増料ハ或ル程度マデハ糸質ヲ損セズ又染色ニ影響ヲ及ボササルモノニシテ増料劑トシテハ錫化合物ト磷酸曹達トヲ使用スルヲ以テ最モ適當ナリトス然レドモ操作ノ如何ニ依リテ糸ノ強弱ニ影響ヲ及スモノトス

第四 石鹼ノ比較試験

本試験ハ農商務省ノ依囑ニ依リ行ヒタルモノニシテ其結果ハ絹ノ精練ニハ石鹼ノ性質ヨリモ寧ロ石鹼ニ含マレタル水量ノ多少ニ關係スルモノナルコトヲ確メタリ

第五 軍服用「カーキ」色ノ試験

本試験ノ結果ハ染料トシテ鐵及ビ「クローム」ノ化合物ヲ用ヒテ好成績ヲ得ルモノトス

第六 精練漂白ニ耐フル綿糸赤染ノ試験

本試験ノ結果ハ染料ハ「アリザリン」ヲ用ヒテ染色シ染法ノ如何ニ依リテ堅牢ニ染メ得ルモノトス

第七 絹精練ノ試験

本試験ノ結果ハ從來絹精練ノ良否ハ石鹼ノ性質如何ニ依ルモノナリトハ世間一般ニ認メラレタル所ナリシガ實際ハ石鹼以外操作ノ工程如何ニモ依ルモノナルヲ確メタリ

第八 染色ノ工程ガ絹糸ノ強靱ニ及ス影響ノ試験

本試験ハ頗ル複雑ニ涉リ茲ニ概記スベカラザルヲ以テ別ニ詳細ナル報告ヲ發表スルコト、セリ

機織分科
ノ研究試
驗

機織分科ガ研究試験セル主ナルモノヲ舉グレバ左ノ如シ

第一 柞蠶及ビ天蠶等ノ原糸ヲ織物ニ應用スルノ試験

柞蠶及ビ天蠶等ノ原糸ヲ以テ織物ニ應用スルコトヲ研究シ且ツ同時ニ染色試験ノ結果精練、漂白及ビ種々ノ色合ニ染ムルコトヲ得並ニ紋織等ニ應用シ得ルコトヲ確メタリ

第二 蝙蝠傘地ノ試験

明治二十三年頃マデハ本邦ニ於テ未ダ精良ナル蝙蝠傘地ヲ織出スコト能ハザリキ故ニ優美ナル蝙蝠傘ハ皆之レヲ海外ノ輸入ニ仰ガザルヲ得ズ就中佛國ヨリ輸入スルモノ最モ多カリキ是ニ於テ本科ハ其ノ前年佛國ヨリ若干ノ蝙蝠傘地標本ノ送付ヲ受ケ同年中之レガ試験ニ從事セシガ分解試験ノ結果トシテ撚糸法、染法、織法等ニ至ル諸般ノ方法ヲ研究シ得タリ

斯ノ如ク僅カニ一回ノ試験ニ依リテ製出セル蝙蝠傘地ハ全ク從來輸入ヲ仰ギツ、アリタル外國製品ニ劣ラザル優等品ヲ製出スルニ至レリ即チ其防水力ノ如キハ外國製品ヲモ凌駕セリ其後益々進ンデ種々ノ染色法ヲ研究シ又織方ヲ改善シ之ヲ當業者ニ示シテ其製造ヲ誘導セシガ爾來民間ニ於テ此物品ヲ製造スルモノ漸ク多キヲ加ヘ海外ニ輸出スルニ至レリト聞ク今日ハ此傘地ヲ當業者間ニハ通稱シテ學校傘地ト云ヘリ

第三 各種蠶糸ノ染織試験

本試験ハ農商務省ノ依囑ニ依リ施行セシガ之ガ試験ノ結果ニ依リ蠶糸ノ種類ノ異ナルニ從ヒ織物ノ地合色彩等ニ大ナル影響ヲ與ヘ異種ノ蠶卵ヲ飼育シテ混同スルノ不可ナルヲ示セリ

第四 女學生用袴地ノ試験

從來本邦ニ於ケル女學生用ノ毛織薄地袴ハ總テ之ヲ外國ノ輸入品ニ仰ギ稀ニハ之ヲ製造スル者ナキニアラザリシガ工程ノ不完全ナルガ爲ニ外國品ニ代フベキモノヲ製出スルニ至ラズ是ニ於テ本科ハ其ノ適當ナル代用品ヲ製出センコトヲ企圖シ三十四年中ヨリ之ガ試験ニ從事シ充分ナル仕上ヲ施シタル結果袴地トシテ極メテ適當ナルモノヲ製出セルヲ以テ爾來民間ノ當業者ニ於テモ本科ニ其仕上ヲ依頼スルモノアルニ至リ民間ニ於ケル此製造業ハ今後益々擴張ノ形勢ヲ示セリ

第五 絨氈手織製造ノ試験

二十六年中ヨリ之ガ試験ニ從事シ爾來繼續近時ニ至リ「カーペット」ヲ本式ニ製造スルコトニ着手セリ

第六 天鵲絨製造ノ試験

天鵲絨ハ輸入額多額ニ上ルモノナルヲ以テ、

二十六年中ヨリ之ガ試験ニ從事シ爾來綿織品ノ製造式ニ製造スルコトニ着手セリ

第六 天鵝絨製造ノ試験

天鵝絨ハ輸入額頗ル多額ニ上ルモノナルヨリ本科ハ夙ニ之ガ製造ヲ企テ二十八年ニ至リ佛國ヨリ其器具ノ一部ヲ取寄セ研究上大ニ好結果ヲ得爾來繼續試験ニ從事シツ、アリシガ舊來ノ方法ニテハ到底其製造高ノ僅少ナルコトヲ免レザルガ故ニ三十二年ニ至リ佛國ヨリ二枚織ノ手機ヲ購入シテ參考ニ供シ其後三十六年ニ至リ機械織ノ天鵝絨織力織機ヲ購入シテ其授業ヲ開始シ近日其結果ヲ見ルニ至ルベシ

第七 羽二重織ニ力織機應用ノ試験

三十四年ヨリ三十五年ニ亘リ羽二重織ニ力織機ヲ應用スルノ試験ヲ行ヒ極メテ良好ナル成績ヲ得シガ爾來尙ホ之ヲ繼續シテ大ニ當業者ノ注意ヲ喚起セリ

第八 毛織物製造ノ試験

近時本邦ニ於テハ毛織物ノ需用次第ニ増加シ隨テ海外ノ輸入益々多額ニ上ルニ拘ラズ之ガ製造ニ從事スルモノハ極メテ少シ蓋シ是レヨリ先キ往往試験セルモノナキニアラザレドモ其結果概ネ皆不良ナリシガ故ニ之ヲ中止セシニ由ルナラン而シテ本科ハ其不良ノ結果ニ了リタルハ多クハ適當ナル仕上ヲ施サマルニ由ルモノナルコトヲ看取シ三十五年中ヨリ當業者ヲ誘導シテ本科ニ設置セル機械ヲ用ヒテ之ガ仕上ゲヲ施シタルニ果シテ其仕上ノ爲ニ外國輸入品ニ劣ラザル製品トナリタルヲ以テ爾來民間ノ機業家ニ於テモ毛織物ノ製造額ヲ増加シ而シテ其仕上ハ東京又ハ附近ニ於ケル製品ハ多ク本科ニ於テ之ヲ施シ此種織物ニ一新生面ヲ開キタルモノ、如シ

卒業者ノ就職

本科ノ卒業者ハ創設以來明治十九年ニ始メテ九人ヲ出シ同三十八年マデニ總數二百三十人ヲ出セリ内死亡者十四人アリ現今ニ於ケル就職者ノ類別ヲ舉グレバ左ノ如シ

職業別	纖維業 (民向工場 等ニ從事 スルモノ)	教員	技術官吏	兵役	染織ニ關 スル商業	海外留學	研究生	合計
明治三十九年 二月末日調	九〇	六二	三七	一三	八	五	一	二一六

第七章 窯業科

沿革

本科ハ明治十四年五月本校創立ノ際化學工藝科中ノ一專修科目トシテ設置セラレ、ニ創マレリ

十八年四月本科實修工場ノ新築竣成ス同年小玻璃窯一基ヲ築造シ專ラ玻璃熔融試験ニ供ス同年又石炭燒成磁器窯一基ヲ築造ス本窯ハ磁器ヲ石炭ニテ燒成セントスル爲メニ造リ石炭及ビ薪材ニテ燒成シ得ル階段火床ヲ有スル倒焰式角窯ナリトス

二十年四月農商務省ノ陶器試験ヲ本校ニ託スルニ當リ教師獨國人ワグ子ルハ其赤坂葵町ニ設置セル陶器試験所ノ事業ニ從事セシガ其建物工具等ヲ擧ゲテ之ヲ本科ニ移セリ是ニ於テ本科ノ設備ハ漸次實驗上ノ利便ヲ得ルニ至レリ即チ窯場、水簸場及ビ畫工場ヲ附設シ窯場ニハ錦窯二基及ビ「フリット」窯一基ヲ築造シ水簸場ニハワグネルノ考案ニ成レル改良水簸槽及獨逸ヨリ購入セル粘土壓搾機ヲ備フルコト、ナリシモ窯ハ少數ナルノミナラズ其規模モ僅ニ小試験ヲ爲スニ過ギザルヲ以テ生徒ヲシテ實地試験燒成ヲ爲サシムルコト極メテ稀ナリキ

二十三年七月本科ニ陶器玻璃工科ノ名稱ヲ附セラレ

ワグ子ル一旦歸國シテ二十五年一月再ビ來朝シ本科ノ授業ヲ擔當スルヤ新知識及ビ各種ノ標本ヲ應用シテ設備並ニ授業上ニ改善ヲ力メ新ニ石炭窯大小二基骸炭窯、「フリット」窯、「セメント」窯各一基ヲ新設ス又試験窯、瓦斯窯及ビ最新試験用器具等ヲ獨逸ヨリ購入シ始メテ其使用ヲ示セリ

二十六年瓦斯燒成玻璃試験窯一基ヲ築造ス

二十七年十月本科々名ヲ更ニ窯業科ト改メラル

二十八年九月ノ交本科築造物ノ一部ヲ煉瓦造トシ及ビ木造ノ工場ヲ新築ス是レ

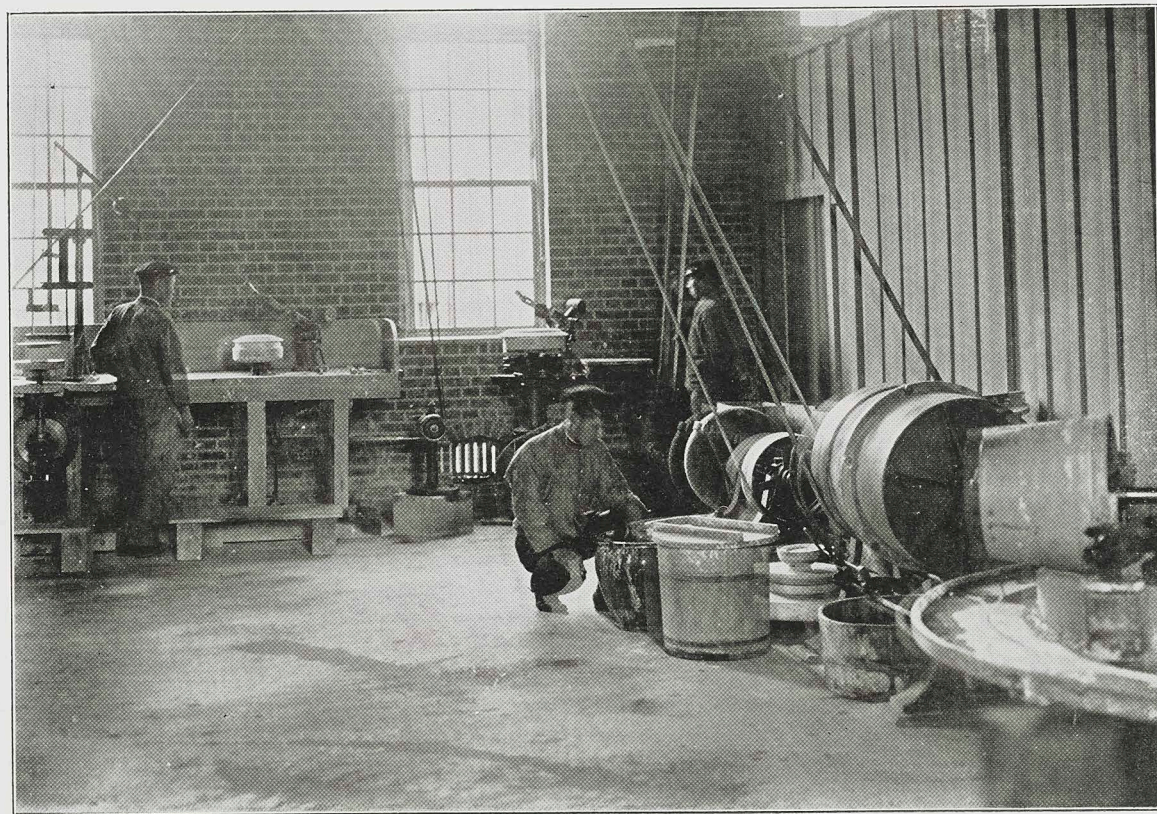
二十七年十月本科々名ニ夏ニ望美科
二十八九年ノ交本科築造物ノ一部ヲ煉瓦造トシ及ビ木造ノ工場ヲ新築ス是レ



ルネグラ・ポーリフトツニ故



窯業科實修場



場工轆轤械機及械機製調料原科業窯



窯業科繪付場



窯業科窯場

本校擴張ニ際シ従前本科工場ノ校内ニ散在セシモノヲ一地區ニ移轉スルガ爲メナリ

三十一年大形石炭燒成磁器窯ヲ新築ス本窯ハ五室ノ連續窯ニシテ内三室ハ直接燃焼二室ハ瓦斯燃焼ヲナスモノニシテ稍々大規模ニ於テ石炭ヲ燃料ニ供スルノ試験ヲナサンガ爲メナリ

三十二年三月二十三日夜火ヲ失シ本科ノ窯場三棟及ビ畫工室、標本室並ニ之ニ設置セル諸機械ハ大概烏有ニ歸セリ

三十二年中本科實修工場、職員室、畫工室、標本室ノ煉瓦造二階家ヲ從來ノ煉瓦工場ニ接續増築ス又別ニ煉瓦造窯場ノ一字及ビ烟突ヲモ新築シ同時ニ玻璃融試験ノ爲メ「ジーマン」窯式ノ瓦斯窯ヲ増設セリ是等新築費ニ國庫ハ約三萬圓ヲ支出シ火災後ニ於ケル本科ノ設備ハ大ニ其面目ヲ革メタリ

三十四年窯業原料處理ニ要スル機械類ヲ舊煉瓦室ノ西隣ニ増築シタル工場ニ移設シ數馬力ノ發電機ヲ使用シテ原料粉碎等ノ用ニ供セリ蓋シ當時ニ至ルマデ窯業モ亦手工業ニ屬スト雖モ勞銀ノ騰貴ト均一精確ノ製品等ハ機械力ニ藉ラザルベカラザルヲ以テ漸ク機械ヲ要スルノ時期ニ至レリ是ニ於テ本科ハ世間ニ率先シテ輕便ノ機械ヲ設備セルヲ以テ目下往々世間ニ行ハル、窯業機械ノ中、範ヲ本科ノ機械ニ取リタルモノ尠カラズ

又三十六年動力使用ノ水簾場ヲ機械室内ニ設ク三十八年ニ至リ試験窯倒焰式圓窯ヲ新設セリ

研究試験

本科ニ於テ研究試験シタル事項中其主ナルモノヲ舉グレバ左ノ如シ

第一 玻璃ノ化學的研究及ビ適切ナル熔融窯築造ノコト

本項ヲ説明スルニハ先ヅワグチルノ功績ノ多大ナルヲ忘ルベカラズワグチルハ玻璃ノ成分ヲ學術的ニ研究シ之ガ應用ヲ力メ本邦產ノ原料各種ノ玻璃調合ヲ示シ且ツ本邦ニ適切ナル小規模ノ熔融窯ヲ考案シ實業家ノ參考ニ資セシコト頗ル多シ

第二 本邦陶磁器ヲ科學的ニ説明シタルコト

從來泰西ノ學者其ノ他陶磁器ニ就キ科學的ニ研究シタルモノアリシト雖

モ本邦固有ノ陶磁器ヲ科學的ニ説明シタルモノハワグネルヲ以テ嚆矢トナス

第三 陶磁器製造試験ノコト

本邦ニ於ケル陶磁器製造ノ業ハ其由來久シト雖モ甚ダ小規模工業ニシテ舊來ノ製造法ヲ墨守シ曾テ學理ヲ應用スルヲ知ラズ到底日進月歩ノ時運ト相伴ハズ然ルニ此時ワグネルハ銳意熱心以テ能ク本邦ノ陶磁器製造業ヲシテ漸次進歩發達ヲ遂ゲシムベキ基礎ヲ築キタルモノト謂フベシ
旭焼ト稱スル一種ノ陶器ハ初メワグネルガ理學士植田豐橋ト共ニ研究シテ創始セルモノニ係リ爾後本科ニ於テ繼續其歩ヲ進メテ製造試験ニ從事セルモノナリ

旭焼ノ特色ハ釉下ニ色彩ヲ出スモノニシテ紙又ハ絹地等ニ畫キタルト均シク繪具ヲ其儘ニ現ハシテ毫モ神韻ヲ喪失セズ以テ裝飾用トシテ本邦ノ陶器界ニ一段ノ光彩ヲ添ヘタルモノナリ又近時淡路燒陶器畫ノ旭焼ニ髣髴シ大ニ見ルベキモノアルハ蓋シ旭焼ヲ參考シタルニ依ルカ

又陶磁器ノ素地及釉藥ノ製造上ニ學理ヲ應用スルノ研究モ本科ニ於テ之ヲナセリ即チ從來本邦ノ窯業家ニハ曾テナカリシ石灰石ヲ使用シテ製造費ヲ節減セルコト並ニ陶磁器用各種ノ繪具ヲ試験シタルコト等ハ皆ワグネルノ功績ニ歸セザルベカラズ

第四 陶磁器ヲ石炭ニテ燒成スル試験ノコト

陶磁器ヲ石炭ニテ燒成スルノ試験ハ從前專用セル薪材ニ代フルニ石炭ヲ以テシ燃料ノ代價ヲ輕減スルコト多ク實ニ本邦ノ陶磁器界ニ根本的革新ヲ與ヘタルモノト謂フベシ殊ニ染付磁器ヲ燒成スルコトヲ試験的ニ成功シタルモ經費ノ都合上之ヲ實際ニ施行スルコト能ハザルハ頗ル遺憾トスル所ナリ然レドモ此法一タビ發表シテヨリ各地ニ於テ之ヲ實地ニ應用セシコトヲ試験シツ、アリ又本科ニ於テモ三十一年中農商務省ノ囑託ニ依リ之ガ試験ヲ行ヘリ其成績ハ三十二年及三十四年ノ二回農商務省商工局臨時報告ニ詳カナリ

第五 硬質陶器試験ノコト

本邦ニテハ古來諸種ノ陶器ヲ製セシト雖モ其質軟弱ナリ且チ其形亦不整ナリ故ニ其用途ニ限リテ用テシタルモノナリ

第五 硬質陶器試験ノコト

本邦ニテハ古來諸種ノ陶器ヲ製セシト雖未ダ歐米ノ如キ日用食器等ニ供スベキ硬質陶器ヲ製出セシコトナカリシヲ以テ例ヘバ肉皿等ノ如キモノ皆之ヲ海外ノ輸入ニ仰カザルベカラザルノ状態ニアリタリ然ルニ本科ニ於テハ夙ニ此缺欠ヲ遺憾トシ研究試験ノ結果能ク斯種ノ硬質陶器ヲ製出スルニ至レリ

第六 「マジヨリカ」製造試験ノコト

「マジヨリカ」ハ陶器ノ一種ニシテ歐米各國ニ於テ中等裝飾品及ビ裝飾日用品トシテ盛ニ需用セラル、モノナリ本品ノ製造ハ敢テ規模ノ廣大ヲ要セズ加フルニ釉藥ヲ施スニ人工ヲ要スルコト多キモノナレバ本邦ノ如キ勞銀低廉ナル邦國ニ在テハ最モ適當ノ製造業ナルヲ以テ尙之ニ本邦固有ノ意匠ヲ參酌應用セバ他日米國市場等ニ販路ヲ求ムル望アルモノナレバ本科ハ之ガ製造試験ヲ行ヒシニ其製品見ルベキモノアリ

第七 陶磁器製造上鑄込應用試験ノコト

現今歐米各國ニ於テ陶磁器ヲ製造スルニハ石膏ノ母型ニ鑄込ヲナスモノナリ本邦ニ於テモ從來鑄込法行ハレザルニアラザリシモ未ダ頗ル幼稚ノ境域ヲ脱セザリシヲ以テ本科ニ於テ之ガ研究ニ從事シ其成績不可ナラザルナリ

第八 陶磁器製造ニ機械ヲ應用スルコト

從來本邦ニ於テモ陶磁器ノ製造ニ機械ヲ應用セシモノ一二之ナキニアラザリシモ往々其撰定宜シキニ適セズ又用法ニ熟セザルヲ以テ機械ノ効用稍、多カラザルノ憾ナキニアラズ故ニ本科ハ我陶磁器製造ニ最モ適切ナル獨逸製ノ最新輕便ナル機械ヲ選擇購入シテ之ヲ本科ニ据付ケリ是レ本邦陶磁器ノ革新ヲ促シ以テ改良ニ資セシコトナシトセズ今下ニ數種ヲ列舉ス機械輾轆ノ成形、粉碎器、水簸及原料ノ調合ニ機械ヲ應用スルコト、素地土ヲ煉製スルコト、乾式法ヲ以テ電氣用ノ小磁器ヲ壓搾成形スルコト

第九 試験窯改良ノコト

窯業ニ於テハ適良ノ窯ヲ築造スルハ一大要件ト爲スヲ以テ本科ノ研究改良ニ係リタル試験窯ヲ築造シタルコト少カラズ地方窯業學校窯業家等窯上參考資料トナリタルモノ蓋シ多カラズトセザルナリ

卒業就職
本科創設以來明治十九年始メテ卒業者二人ヲ出シ同三十八年マデニ總數七十一人ノ卒業者ヲ出セシモ内ニ死亡者九人アリ今其就職者ノ類別ヲ舉グレバ左ノ如シ

職業別	窯業 (民間工場 等ニ從事 スルモノ)	技術官吏	教員	兵役	海外留學	合計
明治三十九年 二月末日調	三三	一六	一〇	二	一	六二

第八章 應用化學科

沿革

本科ハ明治十四年本校創立ノ際化學工藝科中ノ一專修科目トシテ設置セラレタルニ創マレリ

十八年四月木造ノ製品工場新築落成セシヲ以テ實修授業ヲ開始セリ

十九年八月本校ノ規則ヲ改正スルニ方リ製品科ト稱セシガ二十三年七月ヨリ

應用化學科ト改稱ス

二十六年硫酸精製室新築竣工ス翌二十七年三月煉瓦造分析室實修工場ノ新築落成ス

二十九年分析室ノ増築及ビ三十二年實修工場ノ増築落成ス又製糖及ビ酒類醸造ハ本邦ニ於ケル重要ノ化學工業ニ屬スルヲ以テ本科モ亦是等ニ重キヲ置キ特設ノ工場ヲ要スルニ至レリ故ニ三十二年從前色染工場ニ使用シタルモノヲ舉ゲテ是等兩業ノ實修工場ニ充用ス而シテ以上ノ分析室及ビ實修工場ハ數次ニ新築又ハ増築シタルモノニシテ其ノ建築費二萬四百餘圓ヲ計上セリ是レ化學工業ノ進歩ニ伴ヒ生徒ノ增收ヲ要シ隨テ設備ノ擴充ヲ要スルニ依ルモノナリ

尙ホ本科ニ關シ一言ノ要アルハ本邦ハ寒暖各種ノ季候ニ亘リ隨テ種々ノ天産



應化科學第三年生實修場

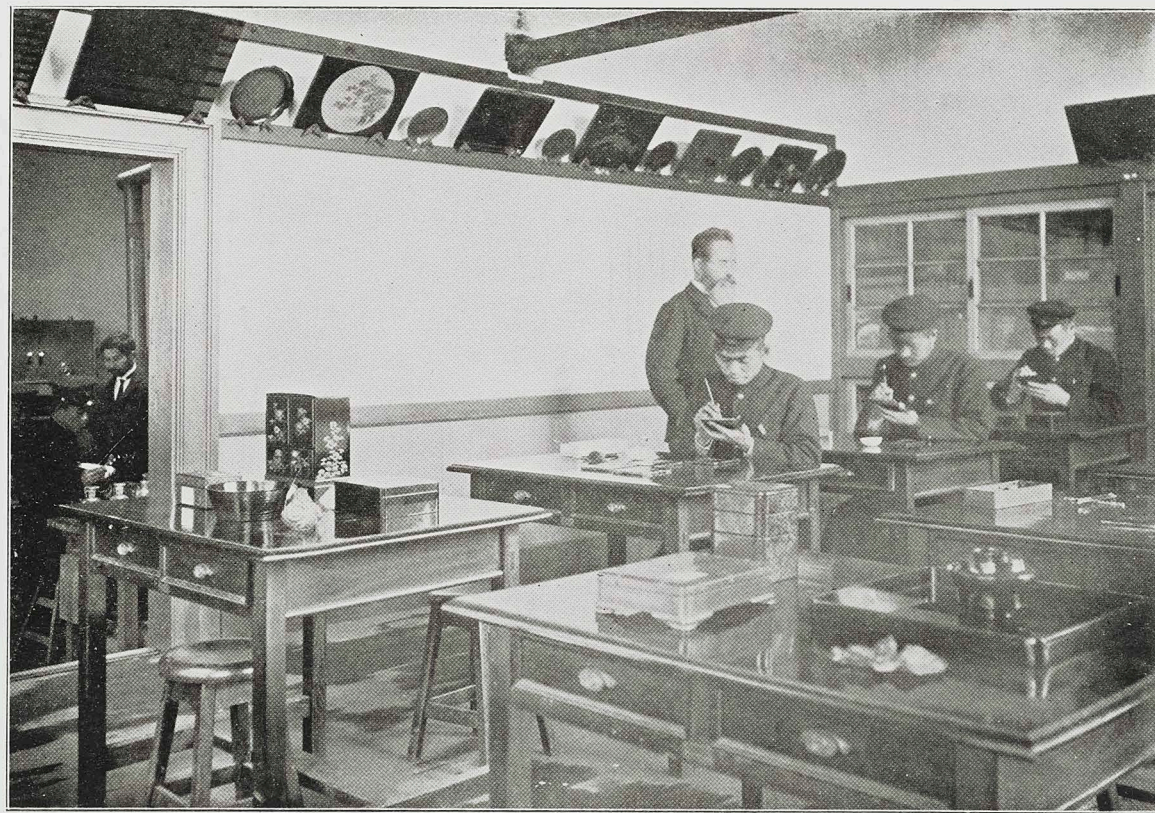
リ
尙ホ本科ニ關シ一言ノ要アルハ本邦ハ寒暖各種ノ季候ニ亘リ隨テ種々ノ天産



應 用 化 學 第 二 年 生 實 修 場



室鏡微顯內場工糖精造釀科學化用應



應 用 化 學 科 漆 工 實 修 場

物ヲ生ジ化學工業ニ於ケル原料豐富ナラザルニアラズト雖モ機械ニ關スル工業ニ比シ振ハザルハ一ハ適良ノ技術者乏シキニ依ラズンバアラズ是ヲ以テ本科ノ設備ハ從來ヨリ面目ヲ革メタルモノ尠カラザルモ更ニ進ンデ設備ヲ全クシ良技術者タルベキモノヲ養成スルノ要アラン

本科ニ於テ創設以來化學工業ニ關スル諸般ノ研究試驗ニ從事シ斯業ノ啓發指導ニ力メ其發展ニ資セシモノ尠カラズ今其重ナルモノヲ舉グレバ左ノ如シ

第一 海草ノ試驗

本邦ハ四面環海ニシテ何レノ所ニテモ容易ニ多量ノ海草ヲ得ラルベシ故ニ之ヲ利用シテ沃素、臭素及ビ其鹽類ヲ製スルコトハ本科ノ夙ニ實驗ニカメシ所ナリシガ今ヤ之ガ輸入ヲ杜絶セシノミナラズ却テ其輸出ヲ見ルニ至レルハ本科ノ實驗與リテ力アリト云フベキカ

第二 魚油及ビ魚膠ノ試驗

本邦ニ於テハ多量ノ魚油ヲ產スレドモ其應用少キハ一種不快ノ臭氣ト暗褐色ヲ有スルヲ以テナリ故ニ本科ニ於テ之ガ脫色及ビ脫臭ノ方法ヲ試驗シ又通常廢物ト看做サレシ魚鱗ヲ利用シテ魚膠ノ製法ヲ試驗シ何レモ好結果ヲ得タリ

第三 牛骨ノ試驗

牛骨ヨリ脂及ビ膠等ヲ分離シ其殘渣ヨリ骨炭及ビ過燐酸石灰ヲ製スル法ヲ試驗セリ

第四 木材乾餾ノ試驗

木材ヲ乾餾シテ木炭、木醋、木「タール」ヲ製出シ更ニ此等ヨリ木精、醋酸、醋酸鹽類、「アセトン」、「クレオソート」及ビ「タール」油等ヲ製造スル試驗ヲ行ヒ其結果今ヤ廣ク世上ニ實施セラル、ニ至レリ

第五 石油ノ試驗

我邦石油ノ產額ハ近來大ニ其數量ヲ増加ス故ニ本科ニテハ原油ヲ分餾シ因テ生スル揮發油、燈油及重油ノ精製應用ヲ試驗シ兼テ其廢棄酸液ヲ利用シテ「イヒチオール」、丹礬及ビ明礬等ヲ製出スルノ法ヲ試驗セリ

第六 樟腦ノ試験

樟腦ハ本邦ノ外他ニ產出スルモノナク隨テ之ガ輸出モ亦多額ナルヲ以テ本科ニ於テハ夙ニ之ガ研究ニ從事シ其製造法ノ改良試驗及ビ従前ハ數十年以上ヲ經タル樟材ノミヨリ樟腦ヲ採集セシガ尙樟葉ヨリ之レヲ製スル法ヲ研究シ其他樟腦油蒸餾法ヲ實行シ好成績ヲ舉ゲ爲メニ當業者ニ資スル所尠シトセズ

第七 「コールター」ノ試験

石炭瓦斯製造業ノ盛大ニ赴クニ隨ヒ「コールター」ノ產出量益々増加スレバ「コールター」ニ就テ試験ヲ行フコト最モ必要ナリ本科ニ於テハ之ヲ分餾シテ「アムモニア」、「ベンゾール」、「クレオソート」、「石炭酸」、「ナフサリン」、「アンスラシン」油等ノ製出法ヲ試験セリ

第八 化粧品及ビ顏料ノ試驗

社會ノ進步ニ伴ヒ化粧品ノ需要モ亦増加スベキガ故ニ石鹼、香油、香水等其主ナルモノ、試験ヲ行ヒ又顔料ニ就テハ「ペイント」、「インキ」等ノ必須原料タル群青、朱、鉛白並ニ「レーキ」類ノ製造法ヲ試験セリ

第九 麥稈漂白ノ試驗

麥稈ハ我邦重要輸出品ノ一ナルニ拘ラズ從來行ハル、漂白法ノ缺點ハ漂白後日ナラズシテ原色ニ復スルニアリ故ニ本科ニ於テハ通常使用スル亞硫酸ノ外過酸化「ソデウム」、次亞硫酸曹達及漂白粉等ノ溶液ヲ用ヒテ漂白法ヲ試験セリ其結果過酸化「ソデウム」ニ於テ最良好ナル成績ヲ得タリ

第十 砂糖精製ノ試験

砂糖精製ニ於テハ最容易ニ糖液ノ色ヲ脱スルヲ以テ目下ノ必要ナル研究事項トス本科ニテハ之ガ爲メ各種骨炭ノ比較脱色力、電氣漂白法及ビ機械的並ニ化學的ニ脱色スル方法等ヲ試驗シ得ル所尠カラズ殊ニ本製品ハ國民生活ノ程度上進ニ伴ヒ其需要益々増加シ從テ斯業ノ振起ハ技術者需要ノ多キヲ加フベキヲ以テ本科ニ於テハ益々之ガ研究ニ留意シ以テ生徒ノ養成ニ資セントス

第十一 釀造ノ試驗

麥酒、葡萄酒、木禽酒、覆盆子酒

需要ノ多キヲ加フベキヲ以テ本科ニ加シテ
徒ノ養成ニ資セントス

第十一 釀造ノ試験

麥酒、葡萄酒、林檎酒、覆盆子酒等ノ實驗ヲ行ヒ殊ニ清酒釀造ニ關シテハ夙ニ之ガ研究ニ留意シ數年前大藏省釀造試験所ノ創設ヲ見タルハ世間當業者ノ爲メニ試験ヲ要スルコト多キニ因ルト雖モ亦本科ニ於ケル研究ハ實ニ之ガ端ヲ發シタリト謂フモ亦過言ナラザルナリ

第十二 漆器ニ關スル試験

漆地改良試験 從來用ヒラレシ木材漆地ハ其乾燥不完全ナルカ爲メ塗漆後龜裂破損ノ虞アルニ因リ此等ノ缺點ヲ防ガンガ爲メニ蒸材法ヲ應用シテ樹液ヲ除去シ後火力ヲ以テ之ヲ乾カシ僅少ナル時間ニ於テ完全ニ乾燥セシムルヲ得タリ又木材及ビ紙製「ボール」以外ニ鑄鐵、「アンチモニー」、「ブリッキ」、陶器(素焼)等ヲモ漆地トシテ應用シ好成績ヲ得タリ蓋シ漆器ノ漆地ハ概ネ木材ノミヲ使用スルノ慣習ナリシガ良好ナル漆地ノ種類多キニ至ラバ漆器ノ形狀等多様案出セラレ從テ其需要モ亦多カラシカ下地改良試験 漆器下地法ニハ繁簡種々ノ方法アレドモ何レモ得失アルヲ免カレズ本科ニテハ漆代用品トシテ土壓青、松脂、石膏ヲ用ヒ美濃紙麻布ノ代用品トシテ澁紙ヲ用ヒ又足踏作用ニ依リテ自由ニ研磨シ得ベキ鑄研キ器械ヲ創製シ大ニ之ヲ改良スルヲ得タリ

髹漆改良試験 從來ノ髹漆法ニテハ金屬及ビ陶器ニ漆ヲ應用スルコト困難ナリシガ種々研究ノ結果漆液ニ高熱ヲ與ヘテ乾燥セシムルトキハ完全ニ固著セシメ得ルコトヲ發見シ大ニ髹漆ノ範圍ヲ擴張セリ又當業者ノ苦心シツ、アル漆液乾燥劑ニ就キ研究ノ結果炭酸「アンモニヤ」、「グリソリン」、豆汁、糖蜜、鉛丹等ノ適當劑ヲ得タリ

蒔繪改良試験 從來ノ蒔繪ニハ平蒔繪高蒔繪研出シ蒔繪等種々アレドモ何レモ手數ヲ要スルヲ以テ彫刻ヲ施シタル謾判、銅版、型紙等ヲ用ヒテ簡單ニ且ツ完全ニ各種ノ蒔繪ヲ製作スルヲ得タリ又寫眞蒔繪法ヲ研究シテ自由ニ塗漆面ニ山水、人物ヲ描寫スルヲ得又顏料撒布器ヲ製作シテ「ボカシ」模様ヲ美麗ニ現ハス等蒔繪工程上ニ一進歩ヲ與ヘタリ

色漆研究試験 從來漆ニテ色彩ヲ現ハスコト甚ダ困難ニシテ色漆ハ僅ニ數種ニ過ギザリシガ研究ノ結果白漆其ノ他ノ色彩ニ於テモ得ル所尠カラズ

卒業者ノ就職
本科創設以來明治十九年始メテ三人ノ卒業者ヲ出シ爾來三十八年マテニ總數百七十八人ノ卒業者ヲ出シ内死亡者十二人アリ今其就職者ノ類別ヲ示セバ左ノ如シ

職 業 別	化學 工業 (民間工場等モモル)	技術官吏	教 員	鑛 業	兵 役	海外留學	合 計
明治三十九年 二月末日調	八七	四一	一三	一一	九	五	一六六

第九章 機 械 科

沿革

本科ノ創設ハ東京職工學校創立ノ際機械工藝科中ノ一科目トシテ設置セラレタルニ淵源シ十八年四月木工、鍛工、鑄造、仕上等ノ實修工場落成ス十九年八月本科ヲ機械科ト命名セラル二十二年五月製圖場及ビ工場監督室ノ建築竣成ス

二十七八年ノ交製圖場、木工場、鑄造場、仕上工場ノ實修工場設備稍、整フルニ至レリ是レ世間機械業ノ進歩ニ伴ヒ生徒ノ實技練習モ亦之ニ後レザランコトヲ期スルニ在リ

二十九年五十噸材力試驗機ヲ新設ス本機ハ工業用ノ鐵、木材其他材料ノ強弱ヲ測定スルノ用ニ供スルモノニシテ橋梁、機械、車輪等苟モ工作ヲ施スモノノ材料ノ強弱ハ豫メ測定スルノ要アルト生徒ノ練習ニモ必要ナルヲ以テナリ且廣ク世間ノ需ニ應ジテ其試驗ヲ行フヲ以テ府下ノ橋梁用鐵材汽罐用鋼鐵等本科ノ檢定ヲ經タルモノ尠カラズ

三十二年鋼鐵試驗場ヲ設ク是レ世間鋼鐵ノ需要益、多キニ際シ此種製造ニ從事セントスルノ生徒ヲシテ製鋼ノ實修ニ供セシメンガ爲メナリ

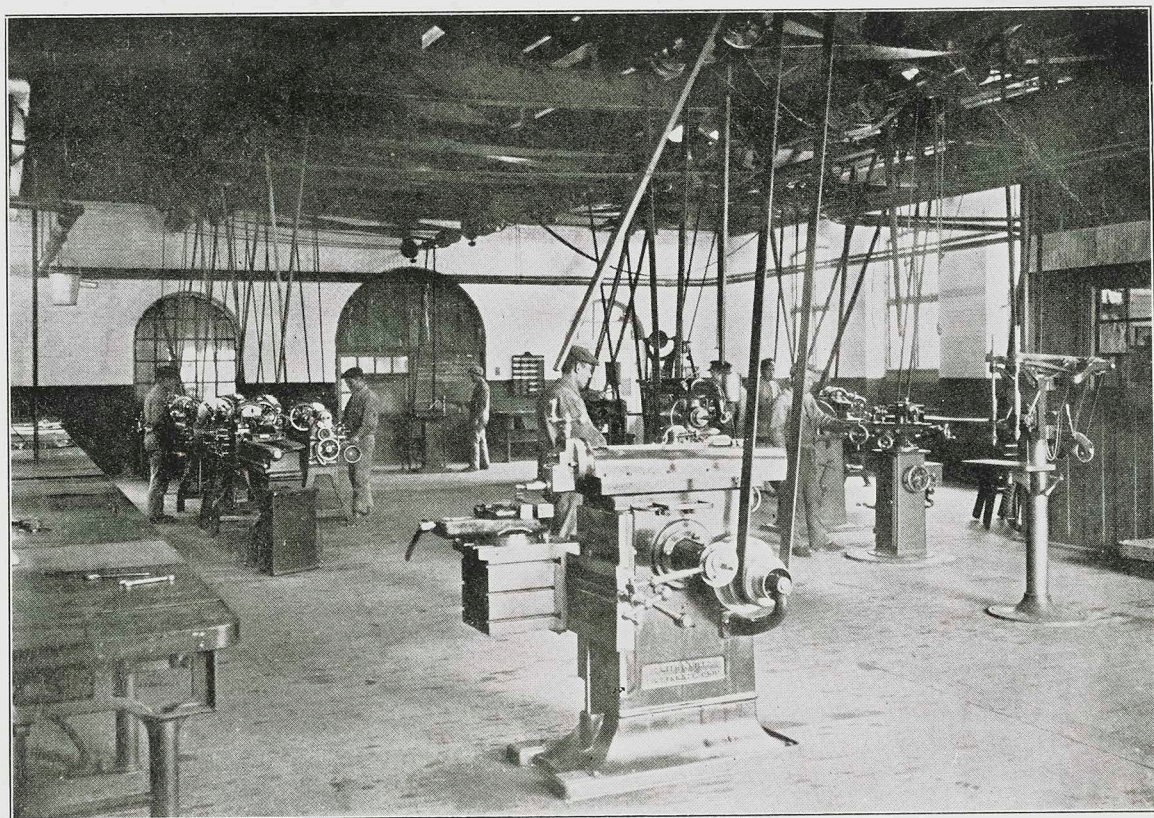
同年本校ノ擴張ヲ議定セラル、ヤ本科ハ染織科ニ亞ギテ主力ヲ注ギ規模ヲ擴大ニシ機械ヲ増設セリ三十二年ヨリ三十三年ニ亘リ鍛工場ヲ増築シ木工場ヲ



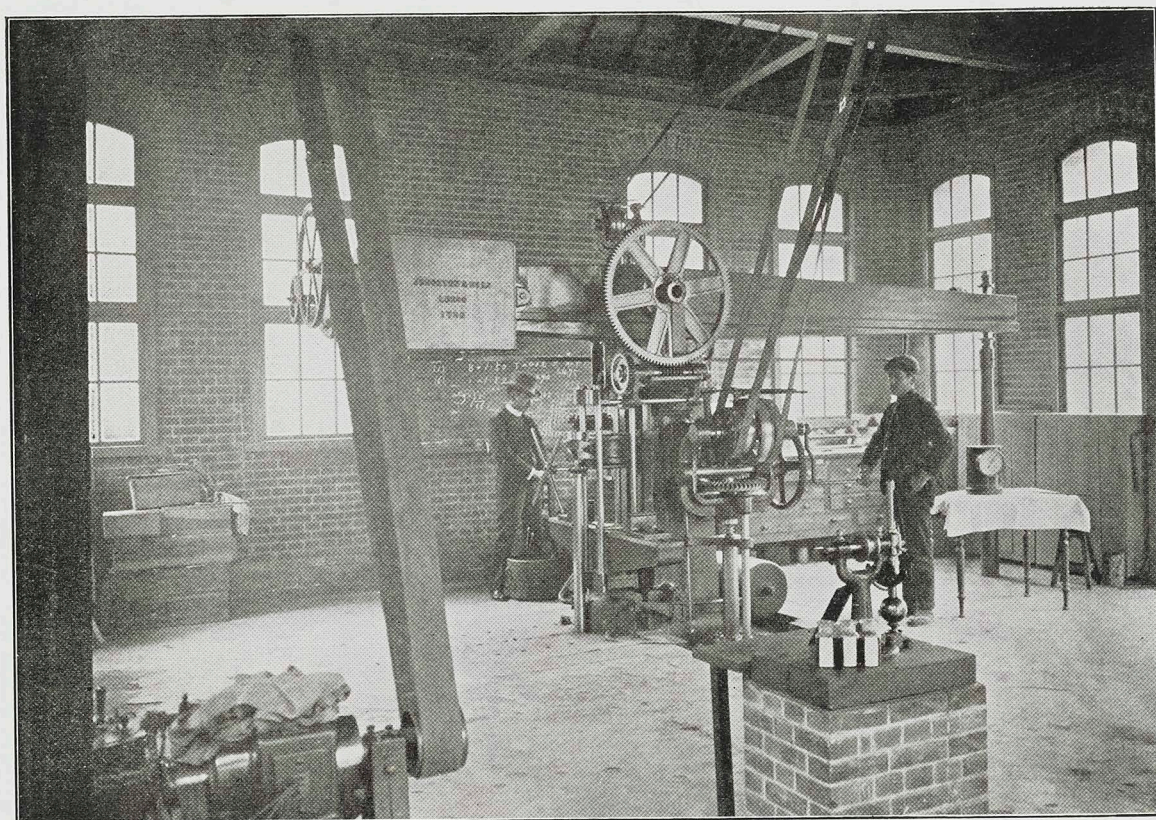
場工物鑄科械機



機 械 科 鍛 工 場



場 工 上 仕 科 械 機



機械材料試驗室

二階建ニ改築シ及ビ水力試驗場ヲ新築シタル等ノ工事ヲ竣工シ三十三年ヨリ三十四年ニ亘リ是等工場ニ諸種ノ新式機械ヲ増置シテ本科工場ノ面目ヲ革メ生徒ノ實技練習上ニ稍、遺憾少キヲ得タリ今機械ノ主要ナルモノ二三ヲ舉ゲシニ水力試驗場ニハ唧筒、水車等ノ効率測定試驗ニ要スル機械類ヲ設置シ將來電力ノ需要ト共ニ益、利用セラレントスル水力ノ研究ニ資スルモノナリ又仕上工場ニハ米國製ノ機械工具ヲ備ヘ機械類ヲ精確ニ製造スルノ用ニ供ス今ヤ本邦ニモ此ノ種機械ノ需要多カルベキヲ以テ他日是等ヲ製造スルノ素因タラシメントス増築ノ鍛工場ニハ吸下通風鍛工機ヲ新設シ煤煙ノ室内ニ飛散スルヲ防止スルト共ニ燃料ノ節制ヲ圖レリ

三十五年始メテ米國ノ機械仕上師ヲ招聘シテ機械製造ニ就キ生徒ニ傳習セシメ授業ノ餘暇主トシテ精確機械ノ部分ノ製造ニ當リ兼テ本科ノ職工ヲモ指導セシム是レ米國ハ機械工具ノ製造上一大進歩ヲ爲シシモ我邦ハ却テ退歩ノ狀ヲ呈シ海外國ヨリ此等機械工具ヲ購致スルノ止ムヲ得ザルモノ尠カラズ是レ將來益、機械ノ需要多カラントスル工業界ニ處スルノ途ニアラザルヲ思惟シ玆ニ米國機械師ヲ雇傭セシガ之レガ爲メ機械製造上ニ一生面ヲ開キタルコト尠カラズ宋ダ世間ノ機械製造業ニ好影響ヲ與ヘタルモノ多カラズト雖モ此等ノ指導ヲ受ケタル生徒ガ他日世間ノ工業ニ從事スルモノ多キニ及ハハ機械業ヲ裨補スルコト蓋シ尠カラザルベシ

本科ハ本校ニ於テ比較的多數ノ生徒ト巨大ノ工場ト有シ世間モ亦本科卒業生ヲ歡迎スルモノ多キハ本科生徒ノ知識技能廣ク諸種ノ工業ニ應用セラルベキニ因ルナラン故ニ技能ノ練習ニ資センニハ本科ノ設備ヲ完成シテ世間ノ希望ニ背カザランコトヲ期セントス

研究試驗
本科ハ創設以來各種ノ研究試驗ニ從事シ之ガ効果ノ見ルベキモノ尠カラズ今其重ナルモノヲ左ニ列舉ス

第一 凡物鋼ノ製造法試驗

凡物鋼ハ機械製作上必要ナル材料ニシテ之ガ良否ハ仕上工場ノ工程ニ多大ノ利害關係ヲ有ス即チ品物ヲ切削スルニ適當ノ凡物鋼ヲ用フレバ切削

速度若クハ切削面積ヲ大ニシ隨テ製作工費ヲ節省シ得而シテ機械仕上ノ効果ヲ良好ナラシメントセバ精密ナル工作機械ト適當ナル工具用鋼ヲ用フルヲ要ス前者ハ歐米工業先進國ニ於テ之ヲ求ムルヲ便トシ後者ニ至テハ我邦產出ノ材料ヲ用ヒテ之ガ製造法ヲ研究スルヲ要ス此製造法ノ研究ハ製鋼法實驗ノ一部トシテ必要ナルヲ以テ本科ハ夙ニ之ガ研究試驗ヲ遂ゲ好果ヲ收メタリ

第二 各種合金ノ鑄造法試驗

工業上ニ用フル金屬ハ合金トシテ必要ナルモノ多シ此合金ナルモノハ單ニ調合量ヲ知リシノミニテハ所要ノ合金ヲ製スルコト能ハズ鑄造ノ際種種ナル變化ヲ生ズルニ依リ時ニ其技術ヲ研究スルノ必要アリ本科ハ之ガ研究試驗ヲ遂ゲタリ

第三 各種銅器ノ色附法研究

凡テ器物ハ製作法ノ良好ナルノミナラズ又外觀ノ美ヲ添フルノ必要アリ且場合ニ依リテハ酸化ヲ防グノ用意アルヲ要ス故ニ本科ハ金工小細工ノ一部トシテ此方法ヲ研究セリ

第四 米國製工作機械ノ應用研究

凡テ機械ハ勞銀ノ昇騰ト共ニ其必要ヲ増加スルモノナリ我邦ニテ從來用フル工作機械ノ多クハ其效果現時ノ需要ニ伴ハザルノ憾アリ依リテ本科ハ米國製ニ係ル斬新ナル工作機械ヲ購入シテ勞力節省上之ガ應用ヲ研究セリ然レドモ精良ナル機械ヲ廉價ニ且精巧ニ製作スルニハ單ニ良好ナル工作機械ノミヲ以テナシ得ベキニアラズ必ズヤ熟練ナル良職工ヲシテ之ヲ使用セシメザルベカラズ故ニ本科ニ於テ米國新式工作機械ヲ購入スルト同時ニ米國機械師ヲ僱聘シテ實地ニ新機械ヲ使用セシメ該機ノ效果並ニ工作法ヲ研究セリ

第五 各種型板及計規ノ用法研究

型板ハ製作物ノ形狀ヲ刻シタルモノニシテ機械仕上場ニ於テ多ク用ヒラル、モノナリ又計規ハ大サヲ測定スル爲メニ缺クベカラズ凡テ同一ノ物

品ヲ多數ニ製作スル場合ニハ此工具必要ナルガ故ニ本科ハ之ガ用法ヲ研

型材ノ製作ハ形狀ニ依リテハ、モノナリ又計規ハ大サヲ測定スル爲メニ缺クベカラズ凡テ同一ノ物

品ヲ多數ニ製作スル場合ニハ此工具必要ナルガ故ニ本科ハ之ガ用法ヲ研究セリ

第六 各種機械ノ創製

本邦ノ機械工業ガ今日ノ如ク盛況ナラザル時代ニ於テハ本科ノ實修工場ハ單ニ生徒ノ實修場ノミナラズ一種ノ模範工場タラザルベカラザルノ必要アリ故ニ其ノ製作品ハ生徒實修用機械ノミナラズ世ノ需ニ應ジテ新機械ヲモ製作シ且ツ教官研究上數種ノ新機械ヲ製作セリ就中本科ノ創製ニ係ルモノハ「ロール」研磨機、滑車平衡機、「タービン」等ヲ以テ其ノ主要ナルモノトス

第七 瓦斯、石油機關等ノ製造法研究

此種内燃機關ガ始メテ我邦ニ輸入セラレシ當時ハ其運轉方法サヘ辨識スル者尠カリシガ此ノ機關ハ其簡便ナルト且ツ小動力ノ場合ニ經濟ナルトヲ以テ現今ニ至テハ原動機トシテ各種工業ニ使用セラル本科ハ夙ニ此ニ見ル所アリ十數年前之ガ製作法ヲ研究シ其製作セシ機關ハ或ハ博覽會ニ出品シテ世人ニ其効用ヲ示シ或ハ私立會社ノ需ニ應ジテ之ヲ製作シ實地ニ使用シテ其成績ヲ研究セリ此等機關ノ製作法ヲ研究セシハ實ニ本科ヲ以テ嚆矢トス

第八 材料試驗機ノ試驗

本校ニ於テ教授スル専門學科ハ皆實地ト關係ヲ有シ或ル種ノ科目ニ至リテハ講義ノミニテハ到底生徒ヲシテ充分其知識ヲ會得セシムルコト能ハザルモノアリ材料強弱論ノ如キ殊ニ然リトス是ニ於テ英國ヨリ五十噸材料試驗機ヲ購入シ種々ノ材料ニ就キ實驗シ其結果ヲ學理ト對照セシメ且廣ク世間ノ需ニ應ジテ汽罐、橋梁、鐵骨建築等ノ材料ノ強弱ヲ試驗シ已ニ其ノ數三千餘ニ達セリ此等ノ試驗ハ工業上最モ必要ニシテ若シ之ヲ缺クトキハ或ハ過大ノ材料ヲ徒費シ或ハ材力過小ニシテ破損シ易キ虞アルヲ以テ本試驗ハ本科ノ率先施行セシ所ニシテ世間上記ノ汽罐其他ヲ注文スルニ當リ之ガ材料ノ強弱ハ本校ノ檢定ヲ經タルモノナルヲ仕様書ニ記

載シ往々世間ヲ裨益シタルコト尠カラズ

第九 油試験機、壓力試験機ノ試験

機械工業ニ於テハ整滑料トシテ各種ノ油ヲ使用ス而シテ若シ之ガ選定ヲ誤ルトキハ器械ノ磨滅ヲ速ナラシメ保存期限ニ影響スルコト多シトス故ニ規模ノ稍大ナル工場ニ於テハ之ガ選定ハ大ニ必要ナル事項ニ屬ス本科ニ備フル油試験機ハ軸受ニ試験油ヲ注入シ磨擦係數並ニ溫度ノ上昇ヲ測定スルナリ其他引火點粘度ヲモ之ニ關聯シテ實驗ス、壓力計試験機ハ普通壓力計並ニ真空壓力計ヲ誤正スルノ用ニ供スルモノナリ元來壓力計ハ之ヲ製作セシ當初ハ正確ナルモノナリト雖モ時ヲ經ルニ從ヒ多少ノ狂ヒヲ生ズルコトヲ免レズ故ニ時ニ之ヲ試験スルノ要アリ又新調ニ係ルモノモ其良否ヲ檢定スルヲ可トス本機ハ獨リ生徒ノ實驗用ニ供スルノミナラズ世ノ需ニ應ジテ工場用壓力計ヲモ檢定セリ

第十 木材乾燥ノ試験

充分乾燥セザル木材ヲ以テ物品ヲ製作スルトキハ製作後變形ヲ免レズ故ニ之ヲ防グニハ豫メ木材ヲ乾燥スルヲ要ス本科所設ノモノハ所謂蒸氣乾燥法ニシテ先ヅ液汁ヲ含有スル木材ヲ罐内ニ入レ直接蒸氣ニ觸レシメ適當ノ時間經過ノ後液汁ノ流出ヲ待テ之ヲ取出シ蒸氣室ニ入レ其殘餘ノ水分ヲ除去スルナリ

本乾燥ハ本科工場實修用木材ニ應用スルノ外廣ク世間ノ需ニモ應ゼリ

第十一 水力ノ試験

水力ハ原動力トシテ大ニ利用シ得ベキモノナリ殊ニ本邦ハ山岳多ク天然ノ水利ニ富ミ又輓近石炭ノ高價ヲ來シタルガ故ニ將來ニ於テハ此種原動力ハ益々工業上ニ應用セラルベシ故ニ之ガ實驗ヲナスコトハ極メテ急務ニ屬スルヲ以テ水力ノ學理ヲ實驗シテ生徒ニ說示シ確固タル知識ヲ會得セシムルコト、ス而シテ其實驗事項ハ流出系數、各種唧筒ノ効率「ペルトン」式水車ノ試験等ニシテ水力利用ヲ促スニ裨補スルコトヲ得ン

ルトン」式水車ノ試験等ニシテ水力利用ヲ促スニ務ムルニ行
カ

第十二 風車ノ試験

本邦ハ風力少カラズト雖モ未ダ之ヲ原動力ニ應用シテ成功シタルモノアルヲ聞カズ然ルニ今ヤ燃料ノ騰貴ト勞銀ノ上昇トニ隨ヒ無償ノ風力ハ之ヲ風車ニ應用シ以テ原動力ト爲スノ要アラン而シテ風車ノ特性ハ農業用吸水唧筒其他力量ノ不同ヲ厭ハザルモノ、原動機ニ適ス故ニ米國和蘭國等盛シニ農業用ニ風車ヲ供セリ本科ニ備フルモノハ米國ヨリ購入セル最新式風車ニシテ尙ホ之レニ製作ヲ加ヘ裝置ヲ終リタルモ日淺クシテ之ガ成績ヲ發表スルコト能ハザルヲ遺憾トス

卒業
就職者ノ
本科創設以來明治十九年始メテ卒業者十人ヲ出シ爾來卒業者ノ總數三十八年マデニ七百六十二人ニ達シ内死亡者四十七人アリ今其就職者ノ類別ヲ舉グレバ左ノ如シ

職 業 別	機 械 業		技 術 官 吏	教 員	兵 役	造 船	海 外 留 學	特 許 代 理 生	研 究	建 築	未 定	合 計
	民間 工場 等 モ ス ニ エ	官 署 モ ス ニ エ										
三十九年 二月末日調	五〇八	五六	四七	四四	三〇	一八	四	三	二	三	七一五	

第十章 電 氣 科

沿革

明治二十三年時ノ文部大臣榎本子爵ハ本校ニ電氣科設置ノ必要ヲ認メラレ特ニ機械設備費ヲ交付セラル、ノ訓令アリ同年七月本校規則改正ノ時機械工藝部中ニ電氣工業科ヲ附加セラル、コト、ナレリ但シ當時創設ノ際ニハ其設備未ダ完カラザリシヲ以テ獨立ノ一科トシテ其授業ヲ開始スルニ至ラズ依リテ唯ダ應用化學、機械ノ兩學科中ニ於テ其梗概ヲ教授スルコト、セリ

二十三年九月ヨリ電氣工場ノ新築ニ著手シ翌二十四年三月竣功セリ是レ即チ現在ノ電氣機械分科發電室ニシテ坪數六十六坪ヲ有シ之ニ汽機、汽罐、發電機、蓄電池等ヲ備ヘ爾來數年間單ニ機械科生徒ノ電氣實修場ニ供用セシガ二十九年五月ヲ以テ初テ電氣工科ノ工場ト爲シ其一部ヲ電氣機械分科工場其一部ヲ電氣化學分科工場ニ充テタリ當時ハ現今ノ電氣機械分科教官室ノ階下ヲ以テ電氣科教官室、製圖室、實驗室トナシ現今ノ發電室ヲ以テ發電室及ビ電

電氣化學分科工場トナセリ

同月本校規則ノ改正アリ化學工藝部機械工藝部ノ名稱ヲ廢シ同時ニ本科ノ名稱ヲ電氣工科ト改メ且ツ電氣機械、電氣化學ノ二分科ニ分チ同年九月ヨリ獨立科トシテ授業ヲ開始セリ此ヨリ先キ電氣機械ノ増設ト生徒ノ増員トヲ要スルニ依リ三十年九月ヨリ在來ノ工場ヲ増築シ現今ノ電氣機械分科工場ナル三階室ノ工事ニ著手セリ

三十一年六月本科ヲ電氣科ト改稱セリ

三十二年十二月電氣化學分科工場ヲ應用化學科工場内ニ移シ發電機、蓄電池等ヲ轉置シ發動機ヲ据付ケ配電盤ヲ新設シ電氣機械分科ノ送電ニ依リテ電動機ヲ回轉シ之レヨリ直ニ發電機ヲ回轉シテ生スル電流ヲ諸種ノ實驗ニ使用スルコト、セリ

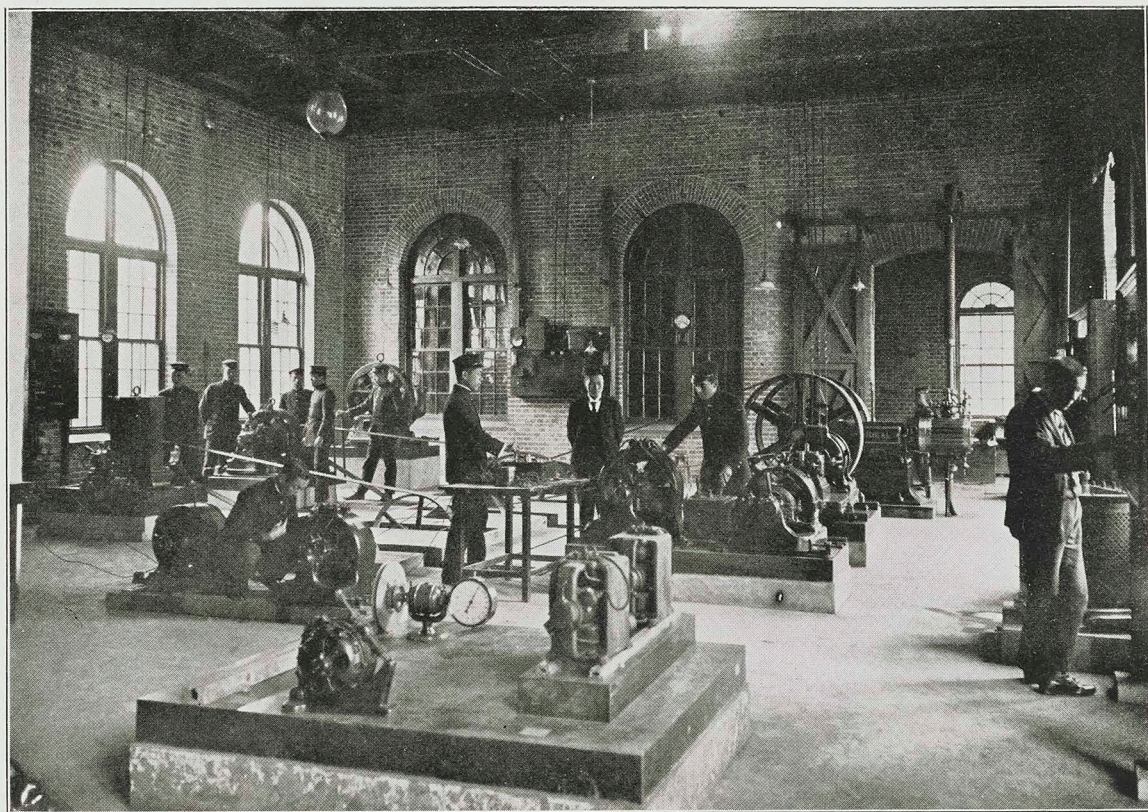
三十三年電氣機械分科工場ナル三階室ノ増築竣功セリ此増築坪數ヲ在來ノモノト合算スレハ二百十三坪トナル是ニ於テ敎官室、製圖室、實驗室等ヲ舉ゲテ増築家屋ニ移轉セリ現今ノ電氣機械分科是レナリ

又電氣化學分科工場ハ應用化學科工場ニ連接スルヲ以テ普通ノ諸器具ハ共用ノ便アリト雖モ特殊ノ器械ハ極メテ僅少ニシテ實驗上不便ナレバ電氣化學工業ノ發達ニ伴ヒ漸次研究ニ必要ナル機械ヲ備ヘント欲ス

本科ハ爾後益々生徒ノ數増加シテ工場ノ狹隘ヲ告グルニ至リタルヲ以テ三十六年九月更ニ増築擴張シテ現狀ニ至レリ

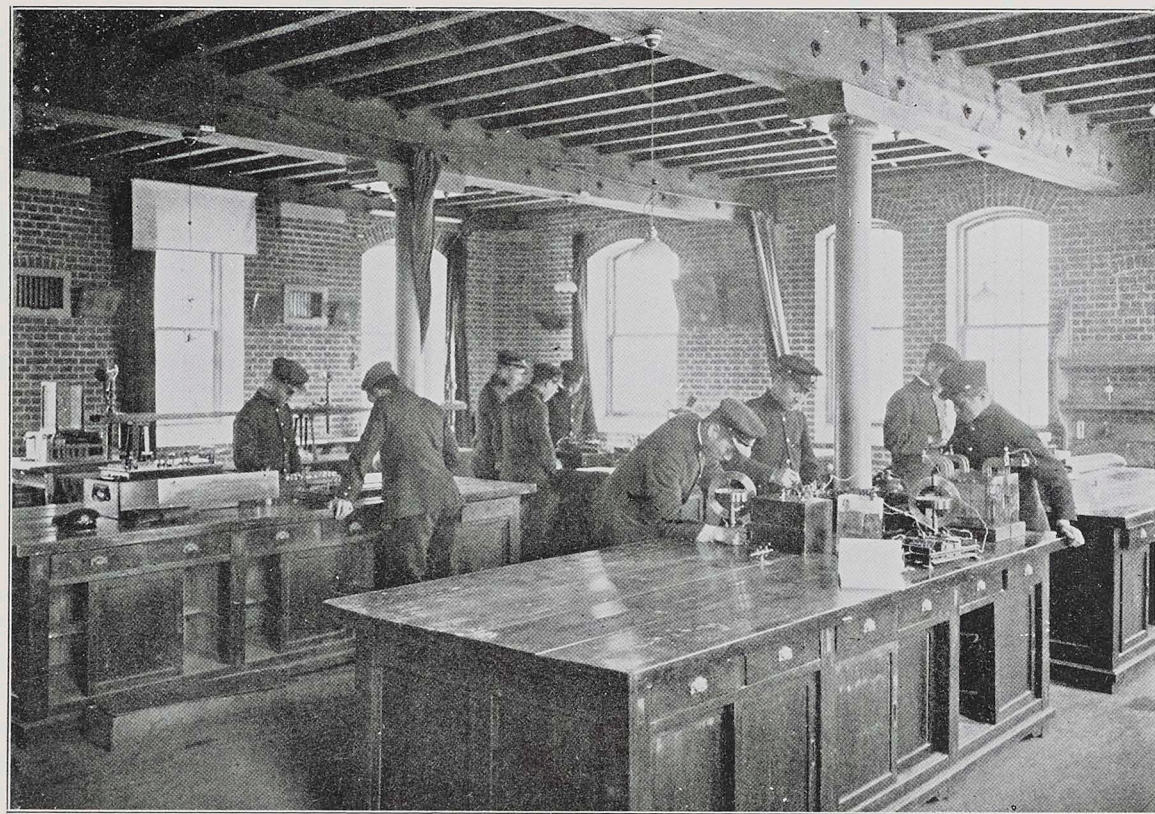
本科ノ設備ハ校内ニ於ケル各種ノ電氣業ニモ應用シ校内各所ニ電話ヲ設置シ工場ニ諸種ノ發電機、蓄電池ヲ備ヘ他ノ工場ニ電力ヲ輸送シ又敎室、事務室等ニ電燈ヲ點シ其他電氣機械ノ設計及ヒ製造ヲナシ以テ生徒實修ノ用ニ供セリ

今ヤ電氣ノ應用ハ水力ノ利用ト共ニ日ニ月ニ益々開ケ電力ハ各種ノ動力ニ代テ諸般ノ工業ニ應用セラレントスルヲ以テ技術者ノ需要益々多カルヘク又歐米諸國ニ於ケル種々ナル電氣機械類ノ發明最モ多キヲ以テ本科生徒ノ増員機械ノ増購ハ愈々急要ニ迫レリ故ニ本科ノ擴張ハ成ルヘク速ニ實行センコトヲ



室電發科分械機氣電科氣電

米諸國ニ於ケル種々ナル電氣機械類ノ發明最モ多キモノニシテ
 械ノ増購ハ愈々急要ニ迫レリ故ニ本科ノ擴張ハ成ルヘク速ニ實行センコトヲ



室驗實科分械機氣電科氣電



場修實科分學化氣電科氣電

期セリ

研究試驗

電氣機械分科ニ於テハ電氣機械、器具、測定器、蓄電池等ノ製作ニ關スル諸種ノ試驗研究ヲナシ直流、交流電動機、測定機、電氣器具、蓄電池等モ既ニ試作セシモノニシテ日常使用シツ、アルモノ或ハ試作中ノモノモ尠カラズ然レドモ本科ハ創設日尙ホ淺キヲ以テ新發明モ亦隨テ少シト雖モ今ヤ擔任ノ教官ハ其研究試驗ニ從事シツ、アルヲ以テ其結果ノ發表モ遠キ將來ニアラザルベシ

電氣化學分科ニ於テハ設置以來研究試驗セシ事項尠カラズ中ニ就キ主ナルモノヲ舉グレバ左ノ如シ

第一 蓄電池製造ノ試驗

從來本科備付ノ蓄電池ハ外國製品ニシテ其價格廉ナラザルガ故ニ本科ニ於テ之ガ製作試驗ニ從事セリ其結果價格ノ廉ナルハ勿論使用ノ成績モ亦良好ナルモノヲ得ルニ至レリ

第二 電氣爐使用ノ試驗

電氣爐ハ電氣ニ依リテ生ズル高熱ヲ利用スルモノニテ此爐ノ發明セラレシ後諸種ノ化學工業ニ一大進歩ヲ來セリ而シテ電氣爐ヲ用ヒテ還元シ或ハ化合セシメ得ルモノ數多アリト雖モ本科ニテ實驗セルハ炭化石灰、「カーボランダム」、「アルミニウム」合金等ノ製造ニシテ就中炭化石灰最も好結果ヲ得タリ當時本邦ニ於ケル炭化石灰製造業長足ノ進歩ヲナシ其產額モ亦尠少ナラズト雖モ往年始メテ舶齎セシトキ之ガ實驗ヲナセシハ本科ニシテ現今有名ナル某製造所ハ實ニ本科出身者ノ實驗ニ基クモノナリ

第三 電解漂白ノ試驗

電流ヲ以テ分解セル食鹽溶液ハ其作用漂白粉ト大差ナシト雖モ其効力ニ至リテハ同日ノ比ニアラザルナリ本科ニ於テ諸物質ノ漂白試驗ニ此液ヲ使用セシガ（木綿、麻、製紙原料、三桎、襪襪）燐寸軸木等最も好結果ヲ得タリ

第四 鹽類及ビ顏料等ノ製造試驗

諸種ノ鹽類ヲ分解シ或ハ化合セシムルニ電流ヲ用フルトキハ極メテ簡單ニ且ツ迅速ニ成功シ得ベキ理ナレドモ之ヲ實行スルニ當リテハ種々ノ障礙起リ其効ヲ奏セザルコト亦少カラズ本科試驗事項中好結果ヲ得タルモノハ鹽酸加里、沃度、沃度「ホルム」及ビ諸種顏料ノ電解製造、砂糖ノ電氣精製等ニシテ電氣鞣皮、電氣「アルカリ」製造等ハ當時實驗中ナリ

第五 電氣鍍金ノ試驗

現今我邦ニ於テ金、銀、銅、「ニッケル」等ノ電氣鍍金業盛ナリト雖モ其製品ヲ歐米ノ製品ニ比スレバ未ダ遜色ナキ能ハズ本科ニ於テハ此等ノ研究ヲナスト同時ニ眞鍮、青銅等ノ合金電氣鍍金法、鍍金著色法及ヒ非金屬（陶磁器、木材、貝殻類）電鍍法ヲ實驗シ何レモ好成绩ヲ得ルニ至レリ

第六 電鑄及ヒ電氣象嵌法ノ試驗

電鑄法ニ依リテ印刷用銅版ヲ製スルハ廣ク坊間ニ行ハル、所ニシテ敢テ珍トスルニ足ラズト雖モ本科ニ於テハ此等銅版ノ外種々ナル器物（額面、置物、盆類）ノ電鑄製作法ヲ實驗シ又銅ノ電氣象嵌法ヲ實驗シ好結果ヲ得タリ

卒業者ノ就職

本科創設以來卒業者ハ明治三十二年ニ始メテ十八人ヲ出シ同三十八年マデニ總數百三十七人ニ達シ内死亡者五人アリ現今ニ於ケル其就職者ノ類別ヲ擧グレバ左ノ如シ

職業別	電氣業 (民間工場 等ニ從事 スルモノ)	技術官吏	兵役	海外留學	研究生	教員	未定	合計
明治三十九年 二月末日調	八七	一七	一六	四	四	二	二	一三二

第十一章 工業圖案科

沿革

本科ハ明治三十年三月附設工業教員養成所内ニ於ケル工業圖案科ノ創設ニ濫



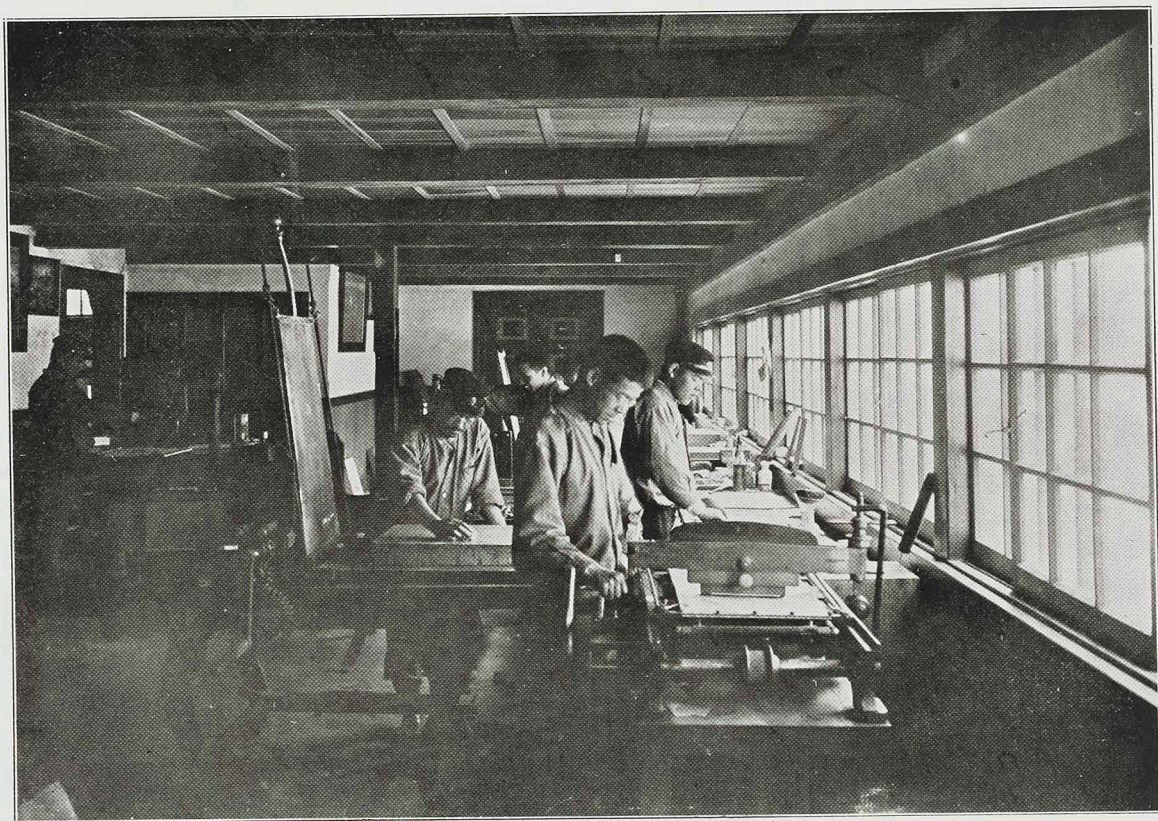
室修實案圖工金及織染科案圖業工



室修實案圖器漆及業窯科案圖業工



室修實畫在自科案圖業工



工場修實刷印部版製科案圖業工



室列陳品考參科案圖業工

觴シ三十二年九月本科ノ設置ヲ見ルニ至レリ
三十四年本科ニ新ニ製版工場ヲ附設シ特ニ志望ノ生徒ヲシテ之ヲ研修セシム
ルコト、セリ

始メ工業圖案科ノ名稱ヲ以テ本科ヲ新設シタルノ要旨ハ我工業ノ發達ニ伴ヒ
同一多數ノ物品ヲ製造シ之ガ販路ヲ擴ムルノ一方便トシテ適應ナル意匠圖案
ヲ施スニ在リ由來美術工藝品ノ如キ意匠奇拔ニシテ之ヲ内外ニ誇ルニ足ルモ
ノ尠カラズト雖モ捺染「ロール」、陶磁器ニ應用スル轉寫版ノ圖案ノ如キ一型
ヲ以テ多數品種ニ應用シ得ルノ技能ヲ有シ且ツ製造上ノ學理ヲ知悉シタル圖
案者ノ乏シキハ實ニ三十年頃ニ於ケル狀態ナリトス殊ニ地方ノ染織、窯業學
校ノ如キ圖案ヲ科目中ニ置キシモ適良ナル教員養成ノ途缺如セルヲ以テ先ツ
本科ヲ工業教員養成所ノ學科中ニ併置シ圖案科ノ上ニ冠スルニ工業ノ二字ヲ
以テシ主トシテ普通工業品ニ於ケル圖案者ヲ養成スルノ意ヲ明カニセリ故ニ
本科生徒ニハ意匠圖案ヲ授クルニ止マラズ各自志望學科ノ工場ニ於テ實技ヲ
練習セシメ其圖案ハ必ズ實物ニ應用セラルベキモノヲ作製セシムルニアリ
又三十四年ニ製版工場ヲ附設シタルハ石版其他各種ノ印刷術ハ輓近進歩シ尙
ホ將來ニ於テ人文ノ開明ト共ニ寫真轉寫、書籍插畫其他ノ印刷業ハ益々進歩
ヲ要スルモノアルニ拘ラズ僅ニ民間ノ工場ニ於テ此種當業者若干名ヲ養成ス
ルノ外同業者ニシテ印刷ノ技能ヲ有シ兼テ印刷ノ原版タル寫真術ノ實技ヲモ
能クスルモノヲ養成スルノ途絶無ナルハ頗ル恨事ナルヲ以テ本工場ニ於テ製
版、印刷、寫真ノ諸實技ヲ教授シ此缺陷ヲ補ハント期セリ

研究試驗

本科ハ創設以來年ヲ閱スルコト未ダ久シカラズ隨テ社會ニ貢獻セル効果モ亦
未ダ顯著ナルモノ尠シト雖モ今本科ノ研究試驗ニ關スル事項ヲ舉グレバ左ノ
如シ

本科製版工場ニ於テハ寫真ヲ漆器ニ應用スルコトヲ研究成功シタリ是レ本邦
ニ於テハ未知ノコトニシテ本科ノ研究ニ依リテ之ヲ創製シタルモノナリト
ス

又石版印刷畫ヲ陶器ニ應用スルコトハ從來本邦ニモ一二之レナキニアラザリ

シガ本科ノ研究ニ依リテ其畫線ヲ太ク明晰ニ且ツ些小ノ筆致ヲモ喪失セザラシムルコトヲ得タリ是レ亦本科ノ創製ト云フモ敢テ失當ナラザルベシ此等ハ未ダ工業的圖案トシテ廣ク行ハル、ニ至ラズト雖モ蓋シ他日ノ流行ハ期待シ得ラル、コト、信ズ

其他三色版印刷ヲ工業的ニ應用スルコトハ本科ニ於テ目下猶ホ研究中ニアリト雖モ其成功ハ蓋シ遠キ將來ニアラザルベシ

又「ヘリオグラビール」(光線彫刻法)ノ應用ハ現今歐米ノ重モナル都府ニハ之レアリト雖モ我邦ニ於テハ則チ唯一ノ本科アルノミ

本科ハ創設日猶淺キヲ以テ卒業者ハ明治三十五年ニ始メテ八人ヲ出シ同三十八年マデニ總數二十五人ヲ出セリ現今ニ於ケル其就職者ノ類別ハ左ノ如シ

卒業者ノ就職

職業別	圖案業 (民間工場 等ニ從事スルモノ)	教員	技術官吏	研究生	兵	役	海外留學	合計
明治三十九年 二月末日調	九	七	三	三	二	一		二五

第十二章 附設工業教員養成所

本所ハ明治二十七年六月十四日文部省令第十二號工業教員養成規程ニ據リ設立シ東京工業學校長ノ管理ニ付セラル其目的ハ工業學校、徒弟學校ノ校長又ハ教員タルベキ者ヲ養成シ兼テ工業教育ノ方法ヲ研究スルニアリ抑、我邦ノ如ク諸工業ノ未ダ充分發達セザル邦國ニ在テハ最モ力ヲ工業教育ノ普及ニ盡サマルベカラズ而シテ工業教育ノ普及ヲ圖ルハ則チ之ガ教育ノ任ニ當ルベキ恰當ナル教員ノ養成ニ待タザルベカラズ是レ本所設立ノ止ムベカラザル所以ナリ

今や農、商業兩教員養成所モ設置セラル、ト雖モ工業教員養成所ハ他ノ養成所ニ先キダツコト數年ニ設置セラレタリ是レ工業教員ノ供給ハ特ニ急要ナルニ依レリ

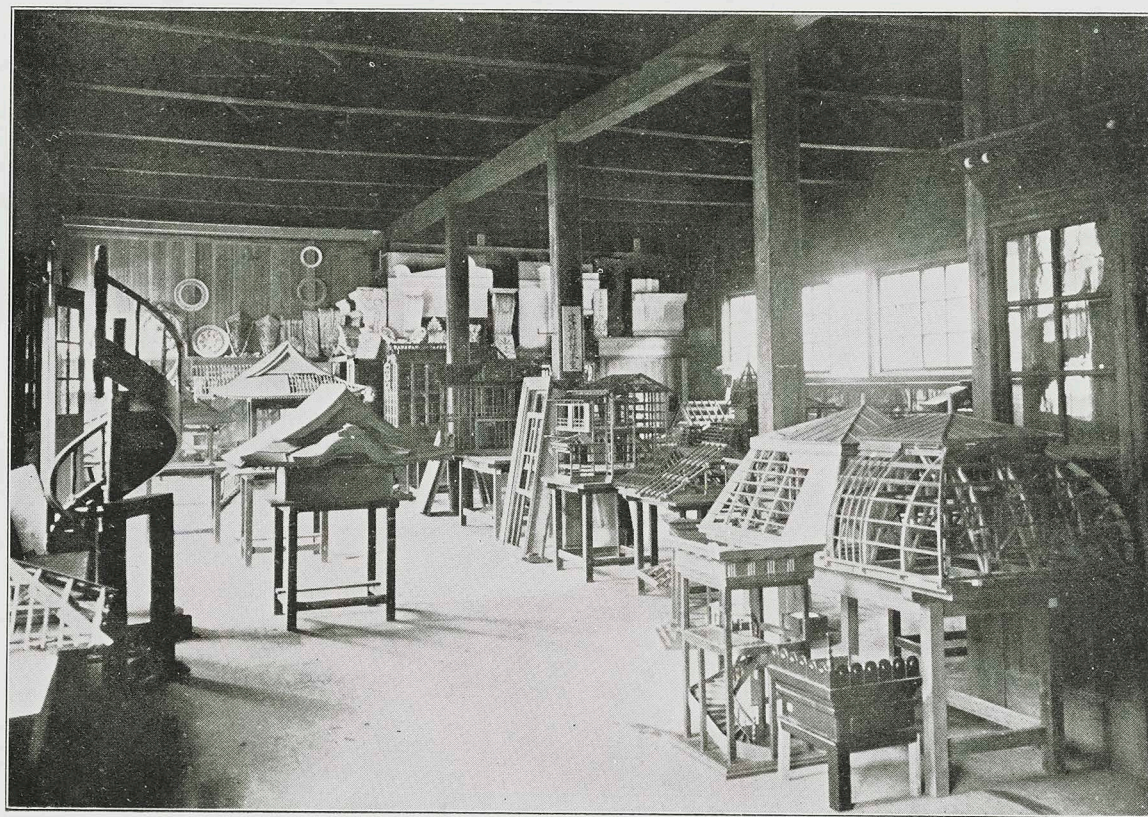
當初本所ニ本科及ビ速成科ヲ置キ本科修業年限ヲ二箇年トシ速成科修業年限ヲ一箇年トス又本科ノ教科ヲ分チテ金工科、木工科、染織工科、窯業科及ビ應用化學科ノ五科トシ速成科ノ科目ヲ金工、木工、染色、機織及ビ陶器ノ五種トス

本所ハ所屬東京高等工業學校ト學科ニ於テ唯電氣科ノ一科ヲ缺キ建築科ノ一



室 圖 製 科 築 建

種トス
本所ハ所屬東京高等工業學校ト學科ニ於テ唯電氣科ノ一科ヲ缺キ建築科ノ一



室 本 標 科 築 建

科ヲ加フルノミニシテ他ハ皆同一ノ學科ニ屬シ其授業ハ同校教官之ヲ擔任シ
教室、實修工場、器具、機械、標本等ニ至ルマデ悉ク共用スルヲ以テ其沿革
ノ如キモ概ネ之ニ伴隨スルモノトス

建築科ハ明治二十七年六月本所創設ノ際木工科ノ名稱ヲ以テ設置セラレ所屬
學校内ナル舊米廩ノ石造倉庫ヲ改修シテ其實修工場ニ充テタリ

二十九年五月本所規定ヲ改正ス其要旨ハ從來本科修業年限二箇年ナリシヲ三
箇年トナシ其他學科目ヲ増設スルニ在リ其修業年限ヲ延長シタルハ從來ノ修
業年限ニテハ學業技術兩ナガラ熟練ヲ缺クヲ以テナリ

三十年三月本所規程ノ改正ニ依リ工業圖案科ヲ新設セリ

三十二年三月文部省令第十三號實業學校教員養成規程ノ發布ニ依リ本所附屬
トシテ工業補習學校ヲ新設セラル六月本所規程ヲ改正シ入學者ノ資格中本科
ニ工業學校卒業生ヲ速成科ニ徒弟學校卒業生ヲ加ヘ及ビ地方長官ノ薦學生ニ
對シテモ入學試驗ヲ施行スルコト、セリ

三十五年三月文部省直轄諸學校官制ヲ改正セラレタル結果本所ハ從來東京高
等工業學校長ノ管理ナリシヲ改メテ同校ノ附設トセラレ同時ニ本所ニ主事ヲ
置カル十二月本所規程ヲ改正シ從來本科ノ修業年限三箇年ナリシヲ三學年二
學期間ニ改メタリ其二學期間ニ在テハ生徒卒業後就職スベキ學校所設ノ學業
ニ就キ特修ヲ主トスルコト、セリ又此改正ニ於テ金工科ヲ機械科ト木工科ヲ
建築科ト改稱セリ

三十八年九月本所規定ヲ改正ス其主ナルモノハ師範學校ヲ卒業シタル者ニシ
テ最終學年ノ學科成績其學級ノ及第者中首位ヨリ起算シ全數ノ十分ノ一二至
ル迄ノ席次ヲ有スル者ニ就テハ地方長官ニ於テ英語、三角法ノ學科目ニ對シ
中學校卒業ノ程度ニ依リ試驗ヲ行ヒ其試驗問題及ビ答案ヲ添ヘ薦舉シタルト
キハ該試驗ノ成績及ビ在學中ノ學業其他ノ要件ヲ檢定シテ入學ヲ許可シ又中
學校卒業生ニシテ前顯ノ席次ヲ有スル者ハ無試驗入學ヲ許可スルコト、セリ
但此等ノ入學ヲ許可スル者ハ各科募集定員ノ約半數トス

本所生徒ハ入學ノ當初ヨリ毎月金五圓ヲ學資金トシテ國庫ヨリ補給シ卒業後

ハ在學年數ニ一ケ年ヲ加フル期間ハ敎職ニ從事スベキ義務ヲ付セラル令ヤ各地ノ工業學校及ビ徒弟學校ノ敎員ハ皆本所ヨリ卒業者ノ供給ヲ受ケ本所設立ノ目的ハ漸次之ヲ達シツ、アリ

卒業者ノ就職

本所卒業者ハ明治二十八年始メテ十六人ヲ出シ同三十八年マデニ總數二百七十七人ニ達シ内ニ死亡者十七人アリ現今ニ於ケル其就職者ノ類別ヲ舉グレバ左ノ如シ

職業別	教員	民間工場等ニ於テ各專門業ニ從事スル者				
		技術官吏	兵	役	海外留學	未定合計
明治三十九年 二月末日調	一六九	五七	一七	七	六	四
						二六〇

第十三章 附屬職工徒弟學校

設立ノ要旨

工業ノ進歩ニ資センニハ先ヅ直接製造ニ從事スル良工ヲ得ルヨリ急ナルハナシ凡ソ製造業ハ其ノ設計及ビ指導者タル技術者モ亦必要ナリト雖モ職工ニシテ善良ナラザルトキハ適良ノ技術者モ何ノ効カアラン且ツ我工業モ漸次大規模ニ推移シ家内の工業者ノ數ヲ減ズルト共ニ從來是等當業者ガ年期徒弟トシテ自家ニ於テ養成セシモノ、數ヲモ減ジ之レニ反シ諸工場ニ於テ幼年職工トシテ使役スルモノ、數ハ大ニ増加セシト雖モ幼年職工ハ年期徒弟ノ如ク親方トシテ一定ノ指導者アルコトナキヲ以テ往々年長職工ノ爲メニ雜役ニ使役セラレ技術練習ノ途頗ル缺如シ是等幼年職工ガ他日成年職工トナルノ時ニ於テ其技術ノ巧拙如何ヲ想フトキハ寒心ニ堪ヘザルモノアリ加之我邦ニ於テ學ヲ修ムルモノ、風潮ハ勞働ニ資スベキ實學ヲ厭ヒ坐業ニ益スベキ虛學ヲ尊ブノ弊ハ往々全國ニ瀰漫シ產業界有爲多數ノ人ヲ要スルノ世態ニ於テ却テ是等ノ人ヲ減ゼントスルノ傾向アリテ多數良工ノ輩出ノ如キハ遽ニ望ムベカラザルヲ思フトキハ工業界ノ前途ハ轉々憂慮ニ堪ヘザルモノアリ

以上ノ理由ニ依リ小學校トノ聯絡ヲ有スル低度工業學校ニシテ將來良工タラントスルモノヲ養成センガ爲メ職工徒弟學校ヲ附屬セラレ且ツ其創設ノ當時ニ於テハ各地方低度工業學校ノ設ケナカリシモ本校ノ成績佳良ナリシニ鑑ミ

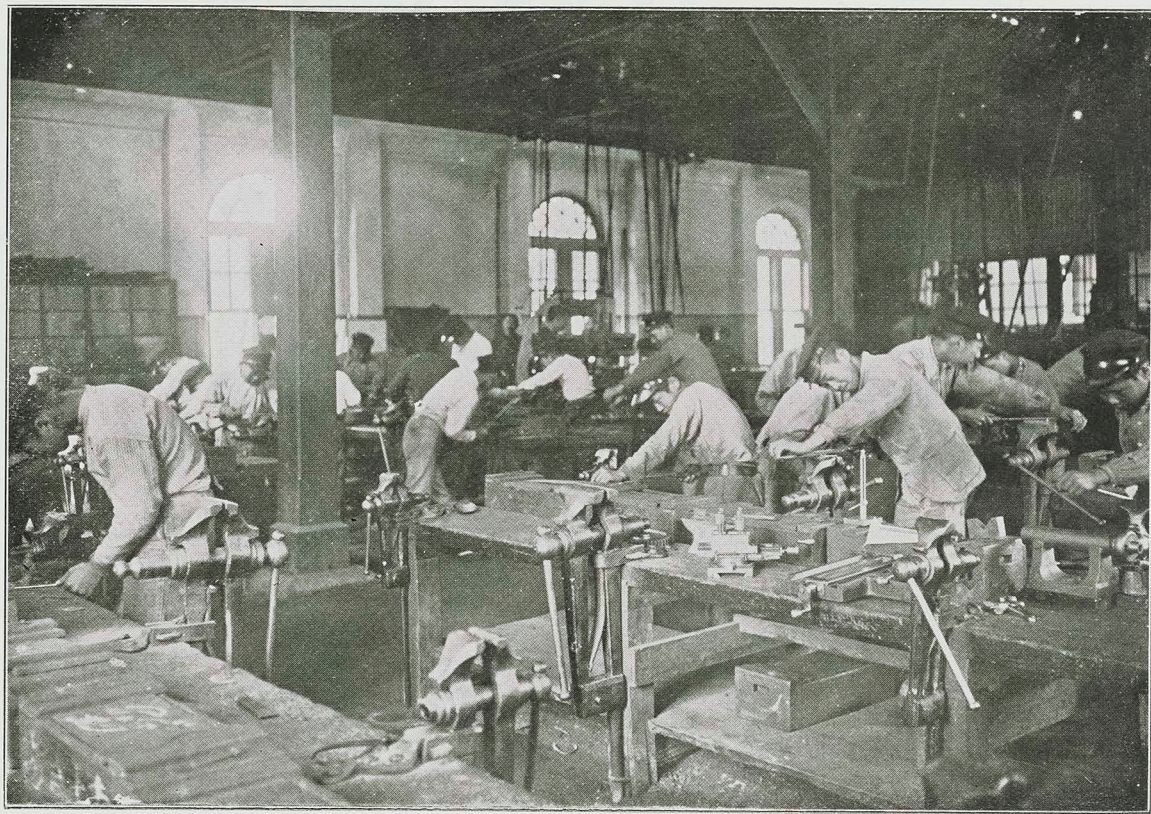


職工徒學校木工科工場

ントスルモノヲ養成センガ爲メ職工徒學校ヲ附屬セラレ且ツ其創設ノ當時
ニ於テハ各地方低度工業學校ノ設ケナカリシモ本校ノ成績佳良ナリシニ鑑ミ



職工徒弟學校木工大工實修建築



職工徒弟學校金工科仕工場

爾來地方ニ多數創設セラレシ工業學校ハ本校ノ事跡ヲ參考セザルモノナシ是レ本校ガ間接ニ地方工業教育ニ貢獻シタル効果ト謂フヲ得ベキカ

本校ハ明治十九年一月高等商業學校附屬商工徒弟講習所内ニ職工科トシテ設置セラレタルモノニ濫觴ス同年十月始メテ徒弟ヲ募集シ翌二十年十一月ヲ以テ授業ヲ開始シ主トシテ大工タルベキ者ヲ養成セリ當時教科ハ單ニ木工ノ一科ニ過ギズ授業料ヲ徴收セズ却テ生徒ニ筆墨紙ヲ支給スルコト、爲セリ是レ當時定員ノ生徒數ヲ得ベカラザリシガ爲メナリ

二十三年一月文部省ハ本科ヲ職工徒弟學校ト改稱シ東京職工學校ノ附屬タラシム爾來木工場、仕上場及鍛工場ハ所屬學校ニ於ケル從前ノ生徒控所ノ内部ヲ改修シテ之ニ充用シ教場モ亦同校ノ教場ヲ使用シ又鑄造場及ビ銅工場ハ一時同校機械科工場ヲ使用シテ實修ニ供シタリ

同年同月更ニ職工徒弟學校ト改稱シ規則ヲ制定シ新ニ金工科ヲ置キ鑄工、鍛工、鍛工、仕上ゲノ各業ヲ教授スルコト、ス且ツ此時始メテ授業料月額五拾錢ヲ徴收スルコト、ス是レ入學者稍々多キヲ加フルヲ以テナリ

二十四年勅令第三百三十七號ヲ以テ文部省直轄諸學校官制改正ノ時ヨリ特ニ教官中ヨリ主事ヲ命ズルコト、ス

二十五年八月鑄造場及ビ銅工場ノ新築ニ着手シ同年十一月落成セリ

二十六年七月規則ヲ改正シテ從來ノ如ク木工、金工各數種ノ實技ヲ併修セシムルコトヲ止メ更ニ木工科ヲ大工、指物、木型ノ三分科ニ又金工科ヲ鑄造、鍛冶、仕上、板金工附鉛工ノ四分科ニ區分シ最初第一年ニ限り各其一般作業ヲ豫修セシメ第二年ヨリ志望ノ一科ヲ專修セシムルコト、セリ又授業料ヲ半減シテ月額二十五錢トナシ第一年生ノ外ハ之ヲ徴收セザルコト、ス但シ當時ニ於テモ適當ノ入學者ヲ得ルノ多カラザルヲ以テ一學年在學シタルモノニ對シ獎勵ノ意ヲ寓シタルニ依レリ且ツ職工認定證書授與ニ關スル規定ヲ設ケ本校ヲ卒業シタルモノハ職工ニ適當ナル證明ヲ與ヘ本校教育ノ効果ヲ世間ニ明示シ卒業者ノ就職ニ便ニス

三十一年九月ヨリ工業教員養成所生徒實地授業練習ノ爲メ本校教科ノ一部ヲ

教授セシムルノ制ヲ定ム

同年十二月本校教場ヨリ失火シ校舍及ビ工場ノ一部ヲ延焼シ器具、機械、圖書、記錄ノ類殆ンド皆烏有ニ歸セリ

三十二年十二月校舍及ビ煉瓦造工場ノ新築竣功ス現在ノ建物_レナリ其建築費三萬餘圓ハ國庫ヨリ支出セラレタルモノニ係レリ此ヨリ先キ徒弟教育ノ如キハ官民共ニ之ニ重キヲ置カズ從テ入學志望者多カラズ當局者モ此種教育ノ設備等ニ留意スルコト尠カリシガ是ニ至テ我工業ノ發達ハ良工ヲ需求スルノ急ナルト共ニ入學者モ増加シ工業ニ對スル世論一變ノ時機ヲ生ジタルハ實ニ此時代ヲ以テ然リトス本校ヲ改築スルニ當リ數萬圓ヲ投ジ又機械ヲ増設スルヲ得タルガ如キハ人心變遷ノ一兆トシテ見ルヲ得ベキカ

三十四年四月規則ヲ改正シテ從來木工科ニ屬セル木型科ヲ金工科ニ移シ更ニ木工科ニ建築製圖ノ一科ヲ加ヘ前來設置ノ大工、指物ノ二科ト併セテ三分科トシ又金工科ニ機械製圖ノ一科ヲ加ヘ前來設置ノ鑄造、木型、鍛冶、仕上、板金工附鉛工ト併セテ六分科トナス

三十七年三月更ニ機械科ヲ増設ス其要旨ハ今ヤ力織機漸ク行ハレントスルニ際シ實技ト學理トヲ兼修シタル職工缺如セルモ幸ヒ所屬學校ノ機械工場ハ力織機ノ設備充實シ實技練習ノ便多キヲ以テ本校ノ一科トシテ併置セリ

同年七月規則ヲ改正シテ鑄造、木型、板金工附鉛工、建築製圖、機械製圖ノ五分科ヲ廢止ス是レ鑄造、木型共ニ入學者少數ナルヲ以テナリ鉛工ハ板金業ト共ニ授業シ建築機械ノ兩製圖科ハ世間多少製圖ヲ修ムルノ途アルノミナラズ實際製造ノ技ニ通ズルモノヲ養成スルノ更ニ急ナルニ依レリ又同時ニ授業料ヲ増額シテ月額五十錢トス其他學業獎勵トシテ成績優等ノ者ニ授業料ヲ免除シ實技ニ勵精ノ者ニ金品ヲ給與スルノ制ヲ定メタリ

生徒ノ概況

本校設立以來規則ノ改正ニ伴ヒ定員ノ増減アリシガ明治三十九年三月末日ニ於ケル生徒數ハ木工科ノ大工分科四十七人家具分科三人金工科ノ仕上分科七十三人鍛工分科十七人機械科十六人合計百五十五人ナリ是等生徒ノ家業別ヲ見ルニ左表ノ如ク過半數ハ工業ニ從事スルモノ、子弟ナリ之ニヨリテ現今工

業家ガ徒弟教育ノ必要ヲ認識スルヲ知ルニ足ラン

生徒父兄職業別

十三人鍛工分科十七人機織科十六人合計百五十五人ナリ是等生徒ノ家業別ヲ見ルニ左表ノ如ク過半数ハ工業ニ従事スルモノ、子弟ナリ之ニヨリテ現今工

業家が徒弟教育ノ必要ヲ認識スルヲ知ルニ足ラン

生徒父兄職業別

職業別	木工科	金工科	機織科	計	百分比
工業ニ従事スルモノ	三三	五一	四	八八	五六・七五
商業ニ従事スルモノ	四	一七	三	二四	一五・五〇
其他	一三	二一	九	四三	二七・七五
計	五〇	八九	一六	一五五	一〇〇・〇〇

卒業者ノ概況

本校卒業者ハ創設ヨリ明治三十九年三月末日マデ三百四十六名内木工科百九名金工科二百三十七名ニシテ其就職ノ類別左ノ如シ

卒業者就職別

科別	工場及會社	自營	補習	外國	兵役	他學校ノ生徒	死亡	計
木工科	五一	四六	一	一	四	二	三	一〇九
金工科	一四三	四四	二	三	二四	五	一六	二三七
計	一九四	九〇	二	四	二八	七	一九	三四六

前表ニ照スニ卒業者ノ内其大多數即百分比五七ハ工場ニ作業シ二六・五ハ自營シ各其専門ノ工業ニ従事セルモノナリ是等ハ主トシテ實技ノ職工トシテ工場ニ就業セルモノニシテ卒業以來同一工場ニ於テ一意其業ニ従事セルモノハ概ネ成績良好ニシテ其工場ニ缺クベカラザル有要ノ地位ニ進ミ一工場ヲ支配スルモノアリ又自營者ニシテ相應ノ業務ヲ營ムモノ亦少ナカラズ今ヤ工業界ハ無教育ナル勞働者ヲ以テ満足セズ圖ヲ引キ之ヲ解シ讀書、算ニ通ジ理科ノ心得アルモノニシテ而カモ常識ニ富ミ誠意ナル職工ヲ要スルノ急益、迫リ本校卒業者ノ如キ年々其需要ニ應ズルコトヲ得ザルノ現況ナリ

設立ノ要旨

第十四章 附設工業教員養成所附屬工業補習學校

本校ハ明治三十二年工業教員養成所附屬トシテ設置セラレ主トシテ晝間業ニ服スル職工ニ必須ナル知識技能ヲ補習セシメ兼テ工業補習學校ノ組織及び其教育法ノ研究ニ資セン爲メニ設立セルモノニシテ主ニ晝間實地事業ニ従事セ

ル大工、指物師、鍛冶師、仕上師、鍍盤師、染物師、電氣業者、陶工、玻璃工其他各種ノ工業ニ從事セル者ニ各自ノ業務上ニ必要ナル學理ヲ夜間ニ授ケ又同時ニ普通教育ヲ補ヒ善良ナル職工ヲ養成シ其業務ニ資シ兼テ社會ニ於ケル位置ヲ高カラシメントスルニ在リ

抑、工業ノ健全ナル進步ハ直接其工業ニ從事スル職工ノ技能ノ進步ニ待タザルベカラズ殊ニ我邦工業界ノ現状ハ此點ニ關シテ遺憾尠カラズ故ニ本校ハ所屬學校ノ完全ナル設備ヲ更ニ夜間二重ニ使用シテ此ノ缺ヲ補ハントスルモノニシテ經費尠キモ教育ノ効果ハ多カラズトセザルナリ

沿革

初メ本校ハ純然タル晝間學校ノ制ニ倣ヒ課程ヲ分チテ金工科及ビ木工科ノ二科トシ教科目ヲ修身、國語、算術、理科、圖畫、工具及ビ製作法ト定メ修業年限ヲ二箇年トシ每週教授時數ヲ八時間トシ之ヲ一週三日夜間ニ配當シ學期試驗、學年試驗、卒業試驗ノ制ヲ定メ授業料ハ一般ニ之ヲ免除シ且ツ必要ナル圖書、器械等ハ之ヲ貸與シテ就業ヲ獎勵セリ

然ルニ此ノ如キ組織ハ既ニ晝間一定ノ業務ニ勤勞セル餘暇ニ補習セントスル本校生徒ノ如キモノニ對シテハ頗ル嚴酷ニ失スルノ傾向アリ生徒中一箇年間其通學ヲ繼續スルモノ甚ダ少ク殊ニ入學者ノ學力年齡等著シク不同ニシテ之ヲ一學級ニ編入スルハ實ニ教授上不便尠シトセザルノミナラズ生徒自身ニ於テモ適切ノ教ヲ受クルコト能ハザリシヲ以テ自然中途退學者續出セシカバ早クモ其改正ノ必要ヲ感ズルニ至レリ是ニ於テ本校ハ三十五年九月根本的改正ヲ施セリ其要ハ第一學年ノ制ヲ廢シ各教科目ヲ獨立セシメ總テ隨意科目トシ生徒ヲシテ其希望ノ教科目ヲ其時間ニ出席シテ聽講スルコトヲ得セシム、第二從來工業ニ關スル科目ハ金工具、木工具及ビ製圖ノ三科ニ過ギザリシヲ今回ノ改正ニ依リ更ニ物理、化學、木工具製作法、金工具製作法、金工材料、木工材料、家屋構造、規矩法、機械力學、發動機、染色法、機械法、製造化學、建築製圖、機械製圖及ビ工業圖案ノ十六科目ヲ増設シテ一層工業ニ緊切ナル知識ヲ授クルコト、セリ、第三從來修業期間二箇年ナリシヲ改正ノ結果教科目ノ難易事項ノ繁簡ニ應ジテ之ヲ參酌シ最短期ヲ四週間最長期ヲ一學年ト

ル知識ヲ授クルコト、セリ、第三從來修業期間二箇年ナリシヲ改正ノ結果教
科目ノ難易事項ノ繁簡ニ應ジテ之ヲ參酌シ最短期ヲ四週間最長期ヲ一學年ト



(影撮間夜)室教校學習補業工

セリ、第四従前授業料ヲ徴收セザリシヲ本改正ニ依リ之レヲ徴收スルコト、爲シタルハ其金額ハ僅少ニシテ經費ノ補助タルニ足ラズト雖モ既ニ之ヲ納付シタルモノハ其期間通學ヲ怠タラザルハ實驗ノ徴スル所ナルヲ以テナリ爾後再ビ規則改正ヲ行ヘリ其要ハ各教科目ヲ便宜初歩普通等ノ程度ニ分チ同時ニ二級又ハ三級ヲ開講シ生徒ヲシテ各自ノ選擇ニ依リ自己ノ學力相當ノ級ニ入ラシムルノ便ヲ圖レリ是レ一ニハ學力不同ヨリ生ズル授業上ノ困難ヲ輕減シ二ニハ生徒ヲシテ中途退學ノコトナク其志望ヲ貫徹セシメントスルノ主旨ニ出ヅ又修業證明書、修業證書及ビ精勤證書ヲ附與スルノ制ヲ設ケ各其合格者ニハ之ヲ附與スルコトトシタルハ本邦職工間ニハ退職證明書ナルモノ行ハレザルヲ以テ時ニ甲ノ工場ニ於テ不良ナル行爲アリタルモノモ容易ニ乙工場ニ採用セラル、コトアリテ良不良ヲ混同スルノ弊アリ、以上ノ諸證書ノ如キハ學業若クハ行爲ヲ證明スルモノニシテ受領者ヲ裨補スルコト尠ナカラザルベシ

本校ハ概ネ以上ノ如キ沿革ヲ經テ現今ハ其ノ教科ヲ普通科目及ビ工業科目ニ分チ普通科目ハ修身、國語及ビ算術ノ三科目トシ工業科目ハ物理、化學、實用幾何、自在畫、用器畫、木工材料、木工具及製作法、家屋構造、規矩法、建築製圖、金工材料、金工具及製作法、機械力學、發動機、機械製圖、電氣、染色法、機械、製造化學、工業圖案等はレナリ

本校ノ授業ハ専ラ夜間ニ屬スルヲ以テ特殊ノ科目ヲ除ク外ニハ別ニ本校專用ノ設備ヲ要セズ教室ヲ始メ器具、模型、標本等皆之ヲ所屬學校ノ附屬職工徒弟學校設備ノモノヲ使用セリ又講師ノ如キ主任教官ヲ除ク外ハ每學年ノ初メニ開講スベキ教科目ヲ定ムルニ當リ所屬學校長ニ於テ其教官中ヨリ之ヲ選任スルモノトス

本校ノ生徒ハ日々ノ授業ガ直接自己ニ幾何ノ利益ヲ與フルヤ否ニ依リテ其學修ノ勤怠ヲ異ニスルヲ以テ苟モ直接ノ利益顯著ナルニ於テハ遠路ヲ厭ハズ孜孜トシテ力學スルコト却テ晝間ノ學校生徒ニ勝ルモノアリト雖モ其直接ノ利益顯著ナラザルトキハ忽チ學業ヲ抛擲スルガ如キ狀態ニ陷ルヲ免カレズ故ニ

生徒、卒業
者成績
ノ概要

此種ノ教育ニ熟練ナル教員ガ實地適切ノ事項ヲ選擇シテ教授スルト否トハ大ニ其成績ニ關係スルモノトス

本校ハ創立以來卒業者ヲ出スコト二百五十八人ニシテ此等ノ卒業者及ビ生徒ノ成績ハ他ノ高等ナル學術ヲ修ムルモノ、如ク一時ニ矚目スベキ顯著ナル効果ヲ示サマルハ勿論ナリト雖モ其學修セシ所又ハ日々學修スル所ヲ以テ之ヲ各自ノ職業ニ應用シ日常ノ工業上ニ開進的技能ヲ注入シツ、アリ

本校生徒ハ入學前ヨリ概ネ既ニ職業ニ從事セルモノナレバ卒業後ノ狀況ニ關シテハ茲ニ叙說セズ

抑、工業補習教育ナルモノハ本邦ニ於テハ其施設以後日極メテ淺ク且夜間主トシテ職工ノ通學スルモノナルヲ以テ世人ハ此種教育ノ存在ヲ知ルモノ尠シト雖モ凡ソ職工ナルモノハ其自家ノ境遇上専門ノ知識技能ヲ修ムルノ途ニ乏シク幼年ヨリ他ノ徒弟トナリタルモノニシテ當初ヨリ職工タルヲ好ムモノ、ミニハ非ザルベシ而シテ此等ノ中巧妙ノ手工ト明晰ノ腦力トヲ有シ職工タルノ適才モ其業務ニ就キ學ブニ所ナク天才ヲ空フスルモノナキニ非ザルベシ此ノ如キ天才ヲ有スル者ハ勿論其他篤志ノ輩ニシテ實技ノ素養アルモノニ業務上支障ナキノ時ニ於テ當業ヲ裨補スベキ學業ヲ授クルトキハ容易ニ之ヲ會得シ直ニ實地ニ應用シ得ルヲ以テ技能ノ進歩ハ期シテ待ツベキナリ故ニ此種教育ノ如キ經費僅少ニシテ教育ノ效果多大ナルヲ以テ將來大ニ力ヲ注グベキモノハ實ニ工業補習教育ヲ以テ其最ナルモノトス殊ニ目下職工教育ヲ急要トスルハ時代ノ要求ニシテ本校教育ノ有效ナル成績ヲ證スルニ餘リアルモノト謂フベシ

附 錄

第十五章 本校及附設工業教員養成所ニ關スル諸表

第一 教官、入學出願者、許可者、在學生、卒業者累年人員表

年 次	教 官	入學出願者	入學許可者	在 學 生	卒 業 者
明治十四年	三	一三三	六〇	五三	一
明治十五年	九	七一	三二	八五	一
明治十六年	一四	九〇	三三	一〇五	一
明治十七年	二二	一九五	七〇	一六二	一
明治十八年	三一	三〇〇	八一	一八九	二四
明治十九年	二四	二	二	一四三	二一
明治二十年	二一	四〇三	七〇	一六五	二九
明治廿一年	二四	四五三	七二	一八三	四三
明治廿二年	二五	三五九	六八	一八八	四〇
明治廿三年	三一	三五四	九三	二一六	五〇
明治廿四年	三五	三八一	八一	二二二	五八
明治廿五年	三五	三三一	七六	二三三	五三
明治廿六年	三八	四四六	一二九	三〇〇	六九
明治廿七年	四六	四三二	一一四	二八四	八九
明治廿八年	五〇	四二四	一五一	三二五	八五
明治廿九年	六二	四一〇	一五九	四三二	八一
明治三十年	六八	四五六	一六八	四六四	一二四
明治卅一年	七〇	五五九	一九〇	五四〇	一二四
明治卅二年	八七	六九六	二二九	六一二	一一八
明治卅三年	九〇	八八六	二二〇	六四〇	一四六
明治卅四年	九四	一〇四五	二〇四	六五三	一九〇
明治卅五年	九七	一〇九三			
明治卅六年	九三				
明治卅七年	九一				
明治卅八年	九〇				

備考

一 教官及在學生ノ數ハ各年次ニ於ケル年末ノ現員ヲ示ス
 一 教官中ニハ實修授業ニ従事スル雇教員ヲモ含ム

一明治二十年ニ於テハ前年豫科ヲ廢シタル爲メ授業上ノ都合ニ依リ生徒ヲ募集セズ臨時補缺トシテ入學セシ者ノミヲ計上ス

一明治二十七年ヨリ附設工業教員養成所ニ關スル人員ヲ合算ス

一累年入學者ノ増加ハ本校設備ノ擴張ニ依リ入學出願者ノ増加ハ世ノ少年工業ニ從事セントスル者漸ク多キヲ加フルノ兆證トシテ見ルニ足ラン

第二 卒業者、在學生出身及卒業者就職地方別表

	本 校		附 設 工 業 教 員 養 成 所	
	卒業者出身地	在學生出身地	卒業者就職地	卒業者出身地
北海道	二〇	六	四〇	一
東京府	二三五	七七	三三九	一一
京都府	二一	六	四一	四
大阪府	一五	二	八二	三
神奈川縣	二四	八	二八	二
兵庫縣	四九	一五	四七	九
長崎縣	三七	九	二三	二
新潟縣	四七	二七	三八	九
埼玉縣	二六	一四	一七	三
群馬縣	三〇	八	一九	一
千葉縣	一五	七	一八	一
茨城縣	一八	一	一〇	一
栃木縣	一六	七	二〇	二
奈良縣	九	七	一七	一
三重縣	二三	一四	一三	二
愛知縣	四七	一〇	二六	八
靜岡縣	三七	一六	一七	〇
山梨縣	一一	八	三	九
滋賀縣	一一	一	四	三
岐阜縣	二二	一一	四	五
長野縣	三八	二四	四	一
宮城縣	二一	一	六	一
福島縣	三九	一八	四	九
岩手縣	一六	八	四	一
青森縣	一一	三	二	二
山形縣	五一	一四	一一	四

秋田縣 一八
福井縣 二九
三
九
八
三
三

秋田縣	福井縣	石川縣	富山縣	島根縣	岡山縣	廣島縣	山口縣	和歌山縣	德島縣	香川縣	愛媛縣	高知縣	福岡縣	大分縣	佐賀縣	熊本縣	宮崎縣	鹿兒島縣	沖繩縣	臺灣	韓國	清國	印度	ネパール	暹羅	比律賓	總計
一八	二九	二〇	一六	一一	一四	二七	三七	一一	一二	一一	二一	二八	六二	二九	三五	二一	七	三一	二		七	七	二	二	三		一、四〇三
三	二	八	三	六	〇	八	一	二	七	八	八	一	一	五	七	九	八	一	五	二	二	四	二	五	二	四	五五八
九	一	五	四	一	一	四	八	三	六	三	〇	四	八	三	五	二	一	五	四	一	三	七	七	二	三		一、〇七四
八	九	五	二	六	四	二	三	二	二	八	二	四	四	四	六	六	五	八									二七七
三	一	一	一		〇	四	二		三	三	一	二	一	一	一	五	一	二									一一三
三	五	三	二		六	五	一	三	五	七	一	四	〇	三	五	七	五	八	三								二四二

備考

一表中在學生ハ明治三十九年二月末日ノ現在、就職者ハ三十八年十一月二十二日ノ調査ニ係ルモノナリ

一表中ノ就職者ハ海外在留者、研究生、兵役者、就職未定者及死亡者ノ數本校ニ於テ三百二十九人、附設工業教員養成所ニ於テ三十五人ヲ除キタルモノナリ

第三 卒業者職業類別表

(明治卅九年二月末日調)

職業別	染織科	窯業科	化學科	機械科	電氣科	工業圖案科	建築科	計
民間工場等ニ於テ常務専門職ニ就スルモノ	一〇七	三八	一〇三	五六五	八七	一〇	一三	九二二
教員	九五	二四	三八	八四	二	二二	四五	三一〇
技術官吏	四〇	一六	四二	五七	一七	三	一二	一八七
海外留學	七	一	五	二〇	四	二	一	四〇
研究	一	一	一〇	三	四	三	一	一一
兵役	一六	二	一	四六	一六	二	一	九三
特許代理業	一	一	一	四	一	一	一	四
未定	一	一	一	四	二	一	一	九
合計	二六七	八一	一九八	七八三	一三二	四二	七三	一、五七六

備考 表外死亡者百四人アリ

第四 教官現員表

(明治三十九年四月三十日現在)

科別	教授	講師	師助教授	囑託教員	雇教員	計
染織科	三	一	二	一	二	一四
窯業科	一	二	三	一	一	七
應用化學科	五	一	三	一	一	一四
機械科	五	一	六	一	二	一七
電氣科	三	一	一	一	二	七
工業圖案科	二	二	三	一	一	七
共通學科	三	五	三	一	一	一三
工業教員養成所	二	三	一	一	一	七
職工徒弟學校	一	一	四	一	三	八
合計	二五	一五	二九	八	一三	九〇

第五 在學生現員

(明治三十九年三月二十日現在)

科別	研究生	第四年生	第三年生	第二年生	第一年生	選科特別豫科	計
染織科	一	八	三六	三一	四〇	六	一三〇
窯業科	一	一	九	四	一〇	三	三四
應用化學科	一	五	二五	二五	二五	五	九四

窯業科	1	1	5	9	2	4	1	0	9	3
應用化學科	1	1	2	5	2	5	9	7	5	3
應	1	1	2	5	2	5	9	7	5	3

機械科	2	4	9	5	7	6	8	2	2	4
電氣科	1	3	2	9	3	0	3	9	1	4
工業圖案科	2	3	5	1	4	3	9	4	1	1
建築科	1	7	6	9	1	2	3	4	1	1
合計	9	3	1	6	7	8	2	6	7	1

第十六章 本校附帶ノ團體

第一 校友會

校友會

本會ハ明治二十三年ヲ以テ創立セラレ本校生徒、卒業生及職員ヲ以テ組織シ其目的ハ會員相互ノ親睦ヲ旨トシ身體ノ健康ヲ保全スルニ在リ時々遠足及諸種ノ運動ヲ爲シ又時トシテ會誌ヲ刊行シテ會員相互ノ消息ヲ交通スルノ機關ニ供セリ爾來本會ハ多少ノ變遷ヲ經歷セザルニアラザリシト雖モ其目的ニ至テハ敢テ變易スルコトナク以テ今日ニ至レリ

然ルニ是ヨリ先キ本校内ニ校員ノ組織ニ係ル自治團ナル一團體アリ品性陶冶ノ目的ヲ以テ成立セシモノナリシガ本會ト其目的ニ於テ相去ル遠カラザルヲ以テ今ヤ兩々相併立スルノ必要ナキニ依リ遂ニ三十八年ニ至リ兩者相合同シテ校友會ノ名稱ヲ用ヒ從來ノ規則ヲ更革シ本會諸般ノ規程ヲ制定セリ其重ナル點ヲ概叙セハ左ノ如シ

目的 ハ紳士ノ品性、健全ノ體軀、朋友ノ信義、師弟ノ本分、國民ノ義務ヲ發揮保全スルニ在リ此目的ヲ貫徹スルガ爲メ文藝部、端艇、庭球部ヲ置キ且遠足ヲ行フ

會員 ハ通常會員(本校及工業教員養成所學生)特別會員(同上職員)贊助會員(舊職員卒業生)ノ三種ニ分チ本校及工業教員養成所職員學生ハ本會々員タル義務ヲ負フ

役員 ハ會長及副會長各一名幹事五名特別委員五名以下各科委員、各部役員若干トス

評議會 ハ副會長、幹事、特別委員、各科委員、各部長及副長ヲ以テ組織シ本會全般ニ關スル重要ノ事項ヲ評議ス

會費 ハ一ケ年通常會員ハ會費金貳圓並ニ入會金壹圓五拾錢、特別會員ハ會費壹圓以上ヲ納ムルモノトス

基本金 ハ特定收入ヲ以テ之ニ充テ當分ノ内通常經費ニ流用スルヲ得ズ通常會員ハ卒業ノ際基本金トシテ金壹圓ヲ納ムルモノトス

第二 藏前工業會

藏前工業會

本會ハ明治三十九年三月本校及ビ工業教員養成所出身者一般ノ結合ヲ以テ設置スルコト、ナレリ是ヨリ先キ出身者及ビ生徒ノ團體ニハ從前ヨリ基礎ノ鞏固ナル機械工藝會ナルモノト時ニ會運ニ盛衰アル化學工藝會ナルモノトノ二會アリト雖モ社會ノ實務ニ從事スル卒業者ハ化學若クハ機械ニ關スル學業ヲ修メタル者ニシテ其目的相互知識ヲ交換シ親睦ヲ深厚ナラシムルニ在レバ何ゾ兩會ヲ並立スルノ要アラシヤトノ議ハ一部ノ出身者間ニ唱道セラレ審議ヲ重ヌルコト多ク終ニ機械工藝會ハ開放セラレ凡ソ本校及ビ工業教員養成所出身者ハ打テ一丸ノ一大團結トナリ藏前工業會ナル名稱ヲ以テ再生スルコト、ナレリ本會設立ノ日極メテ淺ケレドモ千七百餘名ノ出身者ハ皆會員タルノ義務ナキニ非ザルヲ以テ本會ノ基礎確立ノ時ニ方リテハ是等多數同趣味ノ會員或ハ一團或ハ一個トナリ社會ニ活動ヲ試ミ我工業ノ上進ニ資スルト共ニ知識交換親睦深厚ノ主旨ヲ貫徹スルハ期シテ待ツベキナリ

明治三十九年五月廿三日印刷

明治三十九年五月廿六日發行

東京高等工業學校

東京市日本橋區兜町二番地

印刷者 金澤求也

東京市日本橋區兜町二番地

印刷所 東京印刷株式會社



